

DachurA

「登場人物」

エル・エインズワース

心優しく慎ましやかで、周囲の人間からとても慕われている。上流階級の家出身の淑女。自身の誕生日パーティーで出逢った青年・セドリックの妻。

セドリック・アンドール

エルの夫エルをエインズワース家から連れ出した、ブローカーを営む謎の多い美青年。

マーシャ・レイノルズ

セドリックの幼馴染。ブロンド髪に猫の様な縦長瞳孔が印象的な気さくな美女。

ライリー・ワトソン

雑貨屋の女主人。姉気質な女性。セドリックとマーシャとは昔馴染みらしい。

DachurA 1st story-Ivy- III

XXXIX Love that seems to go crazy

——帰り道。

私の思考を占拠しているのは、先程アルフレッド・ガーランドと名乗ったあの青年。
年。

何処かで顔を合わせた事があっただろうか。彼の名前は聞き覚えがあり、妙な既視感を覚える。

だが、彼は私を認知していなかった。もし彼と顔を合わせた事があつたとしたら、私の姓を聞いてセドリックの名前を出すのは変だ。単に、セドリックの知り合いだと考えるのが妥当だろう。

しかし、先程から妙な胸騒ぎがして仕方がなかった。何か重要な事に気付いていない様な、足元が見えていない様な、奇妙な不安感に襲われる。

——漸く辿り着いた自宅の前。ポケットから取り出した鍵を扉の鍵穴に差し込み、手早く解錠する。

先程迄は、寂しさや心細さに苛さいなまれ外に居る方が気が楽だったというのに、あの青年に会ってから妙な視線を感じる様な気がして気分が悪かった。逃げ込む様在家中に入り、乱暴に後ろ手で扉を閉める。

手に持った赤薔薇は、青年から貰った時から何も変わっていない。なのに、青年への不快感からか何処か毒々しい色をしている様に見えた。罪の無い美しい薔薇さえも、不気味なものに見えてしまう。

本来であれば、今すぐにも花瓶に活けるべきだ。だが今は、着替えが最優先である。何処か血液を思わせる様な赤黒い花を咲かせる薔薇を一瞥し、一旦考えをやる様にそれをテーブルの上へと置いた。

チェストから服を一式取り出し、足早に脱衣所へ向かう。

先程少女に突き飛ばされた事は、極力セドリツクの耳には入れたくない。きっと彼が知れば怪我などの心配をしてくれるだろうが、彼に想いを寄せている人間が居る”という事実を、どうしても彼には知られたくなかった。

それを彼が知ったからといって、何かが変わる事は無いだろう。彼の愛を疑ったりなどしていない。

だがそれでも、その様な事を敢えて伝える必要は無い、という考えが変わる事は

無かった。

バサバサとやや乱暴に服を脱ぎ、肩の部分を摘まんで広げてみる。決して大きなものではないが、確かにワンピースの裾と腰部分に泥のシミが付いてしまっていた。出来る事なら、今すぐにもシミ抜きをしたい。あまり長く放置してしまえば、シミが落ちなくなってしまう可能性がある。それに、この服は特別気に入っているもので、生地の色も薄い為多少のシミも目立って見える気がした。

だが運の悪い事に彼が帰ってくる迄時間が無い。仕方なく脱いだ服を脱衣所の棚の下へ隠す様に押し込み、新しい服に袖を通した。

壁に設置された小さな鏡を覗き込みながら、乱れた髪を結び直す。彼が結婚記念日に贈ってくれた髪飾りが、汚れてしまわなくて良かった。安堵の溜息を漏らし、結い上げた髪にそつと差し込んだ。

これで、彼を出迎えても問題は無いだろう。水溜りに倒れ込んだ事も、気付かない筈だ。それにもし気付かれてしまっても、自身の不注意で転んでしまったと言っておけば誤魔化せるだろう。

最後に一度全身を見渡し、そつと脱衣所を出た。

しんと静まり返ったリビング。彼に隠し事があるからか、そわそわとしてしま

落ち着かない。

何処かおかしな所は無いだろうか。そう思いながら部屋中を見渡した。

部屋の中は、家を出る前から何も変わっていない。変わった事があるとすれば、クラフト紙に包まれた赤い薔薇が一輪置かれている事位だ。

枯らしてしまつては勿体ないと青年から受け取つたは良いが、この家に薔薇を活けられる様な花瓶は無い。

椅子の背もたれに掛けておいたオフホワイトのエプロンを手に取り、それを身に着けながら薔薇をどの様にして活けようかと思考を巡らす。

今この家にある、薔薇を活けられそうな物といえば、昨晚彼が飲み干してしまつたスコッチの空き瓶位だ。だが、幾ら枯らせてしまわぬ様にとはいえ、酒瓶に薔薇を活けるにはあまりに見栄えが悪い。それに、植物やインテリアに一切の興味が無いセドリックでも、流石に酒瓶に活ける事は止めるだろう。

だからと言って、この薔薇一輪の為に花瓶を買う気には到底なれない。これを機に毎日花を買い、日替わりで部屋に飾る、なんて事もしなさそうだ。

こんな事になるのなら、受け取らなければ良かった。結局枯らせてしまうのなら意味が無い。

薔薇の花弁も先程の様な瑞々しさは失われ、痛々しくも萎れてしまっていた。

そんな中、ふと遠くから聞こえてきたのは聞き慣れた靴音。着実にこの家へと向かってきているそれは、最愛の夫のもので間違いない。

今日一日私を苛さいなんでいた寂しさや心細さは綺麗さっぱりと消え去り、思考を占拠していた赤い薔薇はセドリツクの存在へとシフトする。

ぱつと玄関へ顔を向けたのと同時に、カチリと心地よい音が耳に届いた。ゆっくりと開く扉の奥に見える、整った美しい顔。

「おかえりなさい！」

顔を綻ばせ、身を翻ひるがえし彼に駆け寄る。そして抱き寄せられるままにその腕の中に収まり、口付けを交わした。

「ただいま。体調、良くなったんだな」

「まだ万全ではないけれど、少し休んだら良くなったわ」

「そうか、大事に至らなくて良かったよ」

彼がふわりと私の髪を撫で、私を抱く腕に力を籠める。そして頬を擦り合わせ、首筋へ顔を埋めた。

今日の彼は少し変だ。普段なら着替えをする為に脱衣所、もしくは疲れた身体を

癒すべくベッドへ直行すると言うのに、今日は私を抱いたまま離そうとしない。

「——セドリック？」

彼の肩を軽く叩き声を掛けると、彼が徐に私の背に手を滑らせた。そして首筋にキスを落とすと同時に、エプロンの紐を解く。

思わずあつ、と声を漏らし、緩んだエプロンが落ちてしまわぬ様に手で押さえた。だが、彼はそんななお構い無しに私の唇に噛み付く。

それは、先程とは比べ物にならない程甘く深い。服越しに私の身体を触るその手は官能的に動き、日中の寂しさも相まってかこのまま流されてしまいそうだった。今日の夕飯には、セドリックの好きな肉料理を用意している。このまま流されてしまつては、その料理も無駄になってしまう。彼の腕の中で身を捻り、なんとか離れた唇から「駄目」と一言漏らした。

「お腹空いてる？ ご飯は直ぐに出せるけど、先にお風呂の方が良いかしら」

僅かにその手が緩んだのを見計らい、彼の腕から逃れ距離を取る。そして手早くエプロンの紐を結び直しながらキッチンの方へと足を向けた。

夕飯の準備は、もう済ませてある。あとはオーブンで焼くだけだが、サラダの用意がまだだという事を思い出した。彼がお風呂に入っている間に支度をすれば問題

無いだろう。

だが彼の両腕が私を背後から強く抱き、私の身体だけでなく思考迄をも引き止めた。首筋や耳元に彼の吐息が当たり、思わず身を震わす。

幾ら華奢な体付きをしているとは言え、彼は男性だ。私より頭一つ分程背も高く、当然力も強い。彼に抑え込まれてしまえば、身動きが取れなくなってしまうのは最早当然の事だった。

「——今日は、マーシャと随分長く話し込んでいたんだな」

耳元で囁かれた低く甘い声に、お腹の奥が疼く様な感覚に襲われる。だが彼はそんな私の事など露知らず、耳に唇を触れさせながら私の手を優しく掬い取った。

肌は白く、指は長く美しい。私の手より一回りも二回りも大きなそれを見ていると、ついつい夜の情交を思い出してしまい顔に熱が上るのを感じた。

「長く……って程でも、無いと思うけれど……。彼女、昼頃には帰ってしまったて……」

そんな思考を無理矢理頭から払い落とし、何とか彼の言葉に返答する。

マーシャが帰ったのは昼頃。時計の針が、丁度十二時を指し重なった時だったと記憶している。

確か街で調べ物をすると言って出て行った筈だ。セドリックもそれを把握していると思っていたが、何か行違ゆきまちがいでもあったのだろうか。背後の彼が、ぽつり「昼？」と漏らした。

「——マーシャと、何の話をしたんだ」

彼の問いに、思い出されるのはマーシャとの会話。様々な会話を交わしたが、主に話題に上がったのはセドリックとの事。情交についてや夫婦仲等、とても彼に出来る話では無い。

「色々、ね」

含みを持たせつつ曖昧に誤魔化すと、彼がむつとした顔で私を抱く腕に力を籠めた。

「……なんだよ」

「色々は色々。女同士の会話内容を聞くなんて無粋よ」

意地悪をする様にふふ、と笑い、身を捻り彼の腕の中から抜け出す。そして彼の手を取り頬擦りをする、彼が複雑な表情を浮かべた。

嫉妬でもしているのだろうか。何処か不服そうなその顔に、心が満たされていくのを感じる。

——人を「所有物」としてしか見ていない、身勝手な拘束は嫌いだ。他人を自分の望む人間になるよう支配し、自分を引き立てる為の駒にする、所謂上流階級の人間が好むやり方。自己愛だけで構成された、不快な行為である。

だが、嫉妬は違う。同じ拘束の意味を持ちながらも、特定のものへの強い愛や執着が齎す感情であり、その言葉や行動は全て深い愛情表現の一種だ。

相手はマーシャだと言うのに、会話内容が知れないだけでこんなにも不服そうな顔をする彼が何よりも愛おしい。

もっと嫉妬させたい、不安にさせたい、なんて思ってしまった程「嫉妬」という感情は私を虜にするものだった。胸の奥が擦ったくなる様な甘心で満たされていく。ふと、彼の視線が私の顔から逸れ背後に向いた。それに釣られて振り返り、彼の視線の先に目を遣る。

そこには、完全に頭の中から消え去ってしまったいた赤薔薇が。

「——あの薔薇は？」

彼が問うのとほぼ同時に、街でアルフレッドと名乗る青年と出逢った事を思い出す。

なんと伝えるのが一番適切だろうか。彼をもっと嫉妬させたい、なんて欲が邪魔

をして、ついつい意地の悪い言葉を選んでしまふ。

「街で、知らない男性がくれたの。とても紳士的で、優しい人」

嫉妬がどれ程苦しい感情かは痛い程分かつている。だが、今日は少女に突き飛ばされたり妙な寂しさや心細さに苛さいなまれたりで散々な一日だった為、今は少しでも彼の愛情を感じていたかった。

「その人ね、貴方の事を知っている様だったの。アルフレッド・ガーランドって名前の人、知ってる？」

「……知らないな、そんな奴」

「あら、そう……。貴方の名前を知っていたからてつきりお知り合いかと思ったのだけど、違ったのね。薔薇を貰ってしまったのだけど、丁度良い花瓶が無くて、どうしましょう」

よれたエプロンの皺を軽く伸ばし、再びキッチンへと身体を向ける。

彼が今どんな表情をしているのかを眺めるのも捨て難いが、また先程の様に抱きしめて、引き止めて欲しかった。そして耳元で、嫉妬を感じさせる言葉でも囁いてくれれば。そうすればきつと、私の心は更に満たされる。

「でも彼、きつと悪い人じゃないわ。今度会ったら食事でもどうかって」

実際、あの青年が良い人か悪い人かどうかなど知らない。だが、少なくとも良い印象を抱いていない事は確かだ。仮に青年と再会したとしても、共に食事に行く気などさらさら無い。

しかし、セドリックを嫉妬させるには多少の嘘も必要だと思った。

結婚する前は散々マーシャへの嫉妬で苦しんだのだ。それを理由にして良いとは思っていないが、こうして彼の気持ちをもよおせぶ様な事をしてしまうのは少しくらい許して欲しい。

「ああ、勿論貴方も一緒に——」

だが幾ら嫉妬させたいと思っても、夫の居る女性が他所よその男性と二人きりで食事をするというのは宜しくない。勿論そんな気はない上に、青年にもセドリックも共にと言われている為事実とは異なるのだが、流石に罪悪感が勝り慌てて訂正の言葉を口にする。

しかし、私の言葉は最後まで言い終わる前に止まった。

自身の言葉を止めたのは、彼の暖かな腕でも声でも無い。ブチ、と何か引き千切られる音。

それは鈍く、やけに耳に残る嫌な音だ。一体何の音かと、振り返り彼に視線を向

けた。

はらりと、彼の掌から舞う美しい赤。

まるで溢れる鮮血が床を濡らす様に、赤い薔薇の花弁が散る。その様子を見て、瞬時に彼が薔薇の花を引き千切ったのだと覚った。

「——セドリック」

どうしたのかと問う為に、彼の名を呼ぶ。だが私の言葉は、それ以上続く事は無かった。

彼の手が私の両手首を掴み、壁に背ごと叩き付ける。骨が軋む音が聞こえてきそうな程、強い力。硬い壁に叩き付けられた背は、じんじんと響く様に痛んだ。

こんな状況、普通じゃない。彼が私に乱暴をした事等、過去に一度だつて無かつた。これは明らかに、嫉妬の域を超えた怒りである。

だと言うのに、彼の手の強さはメアリーの夢を忘れさせてくれる様で、何処か心地よく感じた。

「——いつまで、その男の話をするつもりだ」

低い、彼の声。私を見つめるその瞳は冷たく、私が想像するより遥か上を行く怒りが籠っている。

少し、悪戯が過ぎてしまったかもしれない。彼を此処迄怒らせるつもりは無かつた。

「……ご、ごめんなさい」

彼の視線から逃れるように顔を反らし、ぼつりとそれを口にする。だが彼はそれを許す事無く、乱暴に私の顎を掴み視線を合わせた。

「——随分とその男を気に入っている様だな」

「ち、ちがっ……」

「違くないだろ。食事の約束までするなんて、そんな事俺が許すとも思ったのか」
「……彼は、貴方も一緒になって……だから、二人きりじゃ……」

「そういう事を言ってるんじゃない」

力強い彼の声に、びくりと肩が揺れる。

「——その男の事は忘れる。もう二度と、俺に他の男の話はするな」

彼の指先が、するりと頬をなぞった。そしてもう怒りなど感じさせない程、優しく私にキスを落とす。

「——じゃないと、お前をこの家に閉じ込めておかないといけなくなる」

私に語り掛ける声は、今迄に聞いた事が無い程の甘い猫撫で声だ。その瞳からは

怒りが消え、今度は私を甘やかすような優しい眼差しに変わる。

指先は痺れを感じる程に冷えていき、足は立ってられない程に酷く震える。そんな私を支える様に、彼が私の腰に腕を回しそっと抱き寄せた。

「――返事は？」

耳元で囁かれる、低い声。それは何よりも優しい声音だと言うのに、決して拒絶をさせない威圧が籠っていた。

「……は、い」

消え入りそうな声で何とか返答し、震えの止まらないまま彼の腕の中で頷く。

「――いい子だ」

変わらないの甘い声で囁き、彼は満足した様に私の髪を撫でた。そして私から身体を離し、何事も無かったかのように普段と同じ足取りで脱衣所へと消えていく。

そんな彼を尻目に、壁に背を付けたままずるとその場に崩れ落ちた。震える身体を両腕で掻き抱き、瞳から涙を零しながら小さく蹲うずくまる。

今の私を襲う感情は、恐怖か、嫌悪か、それとも罪悪感か。

どれも、違う。

身も心も震え、涙が止まらなくなってしまいう程の甘心だ。

——ああ、こんなにも満たされた事は過去にあっただろうか。

呼吸は浅く、息が詰まる。なのに口角は上がり、笑みが抑えられない。

このまま果ててしまうのではないかと思う程、身体は甘い熱に支配される。

——嫉妬。

それは私がとても望んでいたもの。後ろから抱きしめて、私を引き止めて、もつと不満げな声を漏らして欲しかった。だが、彼は私の望み以上の事をしてくれた。背に感じた衝撃も、手首に残る痛みも痣も、全て彼の「愛情」である。

愛の無い拘束とは違う。自分を満たすための支配欲なんて汚いものではない。全ては私への愛が齎した行動。つい暴力に訴えてしまう程、彼はあの青年に嫉妬していた。

嫉妬とは、なんと甘美な感情だろうか。このまま彼の愛に溺れて、壊れてしまいたくなる程に狂おしい。

もつと彼を追い詰めれば、彼は再びその強い愛を私に向けてくれるだろうか。彼は私に、気を狂わせてくれるだろうか。

——そういえば。

現在ロンドンで起こっている連続婦女暴行事件。彼はその事件を、特別気に掛け

ている様だった。

私もし、例の事件に巻き込まれたとしたら、彼は一体どうなってしまうのだろうか。

気を狂わせてでも尚、今まで通り私を愛してくれるか。

それとも犯人である男をその手で殺めるか。

もしくは、私と共に命を絶つか。

——もっと、もっと、苦しんで。私に尽くして。壊れる位、深く愛して。

彼の代わりなど存在しない。彼じゃなきゃいけない。

もし彼が苦しみに耐えきれず私から逃げようとしたとしても、絶対に逃がさない。だって、この家に閉じ込めてしまいたい程に愛しているのは、彼では無く私の方なのだから。

XI Ask yourself

十一月半ば、季節は冬。

普段より一時間以上も早い朝の七時、空気の冷えたキッチンで作るのは一人分の朝食。寒さに耐えながら、黙々と手を動かす。

そんな私を苛むのは、嘗ての朝を思い出させる酷い頭痛と眩暈。色取り取りの野菜を見ても一切食欲が湧かず、料理のにおいに吐き気迄をも催す。

「——大丈夫か？」

そんな私の様子に気付いたのか、セドリックが不安げな表情を浮かべ私の顔を覗き込んだ。

「——ええ、大丈夫……」

答えた声は掠れ、今にも消えてしまいそうな程小さい。だが、現在の私にはその返答が精一杯だった。

唇が僅かに震える程に、身体が冷え切っている。なるべく多くの衣類を重ね着込

んでいるのに、身体が温まるどころか徐々に体温が奪われていく様な気さえしていた。

起床時は、此処まで頭痛も眩暈も酷くは無かった。故に、朝食の用意なら出来ると思つて始めたが、次第に頭痛は酷くなつていき、終いには異様な手足の冷えから料理の盛り付けさえうまく出来なくなつてしまった。

フライドエッグにソーセージ、彩りで野菜を並べた簡単な朝食。だが、何処か纏まりが無く子供が盛り付けた様な見た目だ。どうやつても上手く動かせない指先に溜息を吐く。

出来ないものを、幾ら粘つても仕方が無い。盛り付けは食べる相手の事を考えて行おこなわれるものでもあるが、此処まで来ると最早作り手の拘りである。

それに彼が家を出る時間も迫つており、これ以上時間を掛ける事も出来そうに無かつた。

朝食をテーブルへ運ぼうと、ダッジブレッドを数個入れたバスケットと皿を両手に持つ。私は体調不良の為朝食をとる事が出来ないが、共にテーブルに着くだけでも大分違ふだろう。だが、あんまりにも彼を見つめていると彼も食事がしづらいらうか。

そんな事をぼんやりと考えながら、テーブルの方へ向かう。

「……………」

丁度、キッチンとテーブルの間あたり。突如ぐらりと、回転する様な眩暈に襲われ足を止めた。

両手には、料理の乗った皿とバスケット。このまま倒れてしまつては大変だ。恐怖と不快感に心臓は早鐘を打ち、呼吸は浅くなる。

テーブルはすぐ目の前。手を伸ばせば届く距離だ。早くテーブルに皿とバスケットを置いて、椅子に座ろう。少し休めば収まる筈だ。

だが、意志と相反して足は直立したまま動かない。

「——エル、どうした」

異変を感じ取つたのであろうセドリックの声が、やけに遠くで聞こえた様な気がした。

ズギズキと脈打つ音が耳の奥で響き、次第に視野が萎んでいく様に暗くなつていく。

しまった、と思った時にはもう遅い。自身の身体は傾き、手から皿とバスケットが滑り落ちた。

音を立てて割れる皿に、足元に転がるバケツド。

早く落としてしまった朝食を片付けなければ、カーペットが汚れてしまう。それに割れた皿を放置しておくのも危険だ。

だがそんな思考と裏腹に身体は自立せず、落ちた朝食同様、地面に身体は吸い寄せられていく。

「——エル！」

彼が私の名を呼んだの同時に、身体が温かな何かに包まれた。

鼻腔を抜ける、甘く苦い良く知った香り。それは紛れも無くセドリックのものだ。私を抱く彼の腕とその香りに、彼が咄嗟に私を抱き留めてくれたのだと覚る。

ごめんなさいと謝る事も、私は大丈夫だと言う事も出来ない。意識は遠のくばかりで、動かしした唇から声が出る事は無かった。

ぐるぐると回る眩暈は、未だ収まる事無く私を苛さいなみ続ける。

暫く経てば、収まるだろう。大した事無い筈だ。ただの体調不良の一種で、何も問題は無い。

そう何度も頭の中で繰り返すが、そんな考え虚しく、糸が切れた様にプツリと意識が途絶えた。

*

ふわふわと浮遊している様な感覚の中、ゆっくりと瞳を開く。

視界の先は見慣れた天井と、不安げな表情を浮かべ私の顔を覗き込む、最愛の夫の顔。

何も無い空間に意識だけ投げ出された様な、奇妙な時間だった。

それが夢なのだと言われればそうかもしれないが、夢だったと断言できない気味の悪いもの。

未だ意識がはつきりとしないうまま顔を動かし、時計へと視線を向ける。

意識を失う前は、確かに七時を指していた。だが知らぬ間に時間は過ぎてしまった様で、現在時計の針は八時三十分を指している。

「――仕事は……？」

掠れた声で、私を見つめるセドリックに問う。

確か今日は、朝早くに仕事の予定が入っていると聞いていた筈だ。その為、普段より早い時間に起床し朝食を作っていた訳だが、彼はスーツに身を包んだまま私に

寄り添う様にベッドに座っていた。

「倒れたお前を放って行ける訳無いだろ」

「——仕事、優先してくれて良かったのに……。予定、大丈夫なの？」

「早い時間に予定があるとは言ったが、実際ははつきりと時間が決まっていた訳じゃないんだ。念の為家を早く出ておきたかっただけで、仕事に支障はない」

「——そう、よかった」

彼の手が、ふわりと髪を撫でる。

「顔色、良くないな。後でマーシヤを来させるから、今日は診療所に行ってこい」

「——大丈夫、大した事ないわ」

「大した事無いかを決めるのはお前じゃない。今日はどうしても穴を開けられない仕事があつてな、俺は付き添えないんだが……。一度医者に診せた方がいい」

「この前も、眠っていたら良くなったわ。きっと今日も——」

「駄目だ、行ってこい」

力強い彼の声に、思わず口を噤んだ。

この体調不良の理由。それは、ずっと前から薄々気付いていた。

診療所に行けば、その理由が明らかになってしまふ。それを明らかにするのはも

う少し先であつて欲しかった。しかし今の彼を言い負かす事は出来なさそうだ。

渋々頷き、布団の中へと潜った。

「俺はそろそろ家を出るよ。仕事が終わる次第、直ぐに帰ってくる」

布団から顔を出し彼に目を遣ると、彼がぎこちなくも微笑んで見せる。

その顔を見ていると、じわじわと心の中に不安が広がっていくのを感じた。

笑顔とは程遠い表情。だがそれは、きっと私を安心させるために見せてくれた顔だ。

その表情を、笑顔を、失いたくない。いずれ覚めてしまう夢だとしても、まだ覚めたくはない。もう少しだけ見ていたい。

診療所へ行き、仮に私の憶測が正しかったとしたら。私は、彼に真実を伝えるだろうか。

きつと、伝えられない筈だ。「ただの風邪だった」等と言って、誤魔化してしまうだろう。

「——エル、そんな顔するな」

彼はあの日同様私が寂しがっているとでも思ったのか、私の頬を両手で優しく包み込んだ。

その手からは、強い私への心配が伝わってくる。それがより一層、私の心を重くさせた。

「私は大丈夫よ、ほら早く、仕事に行つて」

精一杯の笑顔を顔に浮かべ、彼の肩をぼんと叩く。

私の頬から名残惜しそうに手を離す彼が、ほんの一瞬その顔に不安を滲ませた。だが直ぐにベッドから立ち上がり、玄関の方へ向かつていく。

「じゃあ、行つてくる。ちゃんと診療所行けよ」

「分かっているわ。行つてらっしゃい」

ベッドの中から手を振り、家を去っていく彼を見送る。

彼はというと、私を余程心配していたのか扉が閉まる瞬間まで私を見つめていてくれた。

パタリ、と音を立て扉が閉まる。そして扉が施錠され、愛しい彼の靴音が遠ざかつていく。

マーシャが来るまで、まだ時間があるだろう。彼女は夜型で、朝が弱く中々起きる事が出来ないと前に言っていた。もしかすると、まだ眠っているかもしれない。彼女が来るまでの間、少しだけでも眠った方がいいだろうか。今も、寝返りを打

つたびに船酔いでもしているかの様な眩暈に襲われ、それと同時に僅かな吐き気が込み上げるのを感じた。このままでは、とてもじゃないが外に出られそうに無い。肩まで布団を被り、瞳を閉じる。極力何も考えない様頭の中を空っぽにし、ただ眠る事だけに意識を向けた。

——だが、一向に眠気はやってこない。どれだけ何も考えない様心掛けても、自然と沸き上がるのは強い不安。

溜息と共に、瞳を開く。

リビングの床には、先程落とした箸の朝食の姿は無かった。

奥に見えるキッチンの上に、割れた皿が重ねて置かれている。きっと彼が片付けてくれたのだろう。

料理を駄目にしてしまった事と、彼の手を煩わせてしまった事への罪悪感が一気に押し寄せる。

ごろりと仰向けになり、再び溜息を吐いた。

顔を手で覆い、絡まった糸を解く様に思考を整理する。だが、思考の糸は絡まっていくばかりで全く答えが見えてこない。

もつと、柔軟に考えるべきなのだろう。難しく考えすぎているのかもしれない。

今の私は、セドリックの性格や人柄、そして彼への信頼を無視し、勝手に一人であれこれと考え不安に思っているだけだ。

今日だって、仕事があるのにも関わらず私が目覚めるまで寄り添ってくれて、更には扉が閉まる瞬間まで心配の眼差し向けてくれた。診療所だって、私は街へ何度も足を運んでいる為場所も勿論把握している。だと言うのに、決して一人では行かせようとせず、マーシヤを派遣してくれるなどの気遣いをしてくれた。

普通に考えれば、そんな彼が私を拒絶するとは思えない。そもそも、拒絶する位ならば最初から娶めとったりなどしないだろう。

そんな中、ふと頭に浮かんだのは母の存在。今の私には、母も父も居ないも同然だ。だがもし、今も両親の存在があったとしたら。こんなにも悩む事は、無かつたのだろうか。

母は、自身の胎内に新しい命が宿ったと知った時どの様に思ったのだろうか。私が産まれた時、どの様に感じたのだろうか。そして父は、私が産まれた事を少しでも喜ばしく思っただろうか。

謎の多かつた両親の事を考えてもキリが無い。どれだけ考えたって、それを確かめる術は無いのだ。

それよりも今は、モーリスが私をどの様に思っていたのかが知りたかった。

彼は私が産まれる前から、エインズワース家に勤めていた筈だ。彼は産まれた私を見て、何を感じたのだろう。何を感じて、何を思つて、ずっと私に傳かひていたの
だろう。

——モーリスに、会いたい。

街で彼の気配を感じた時、何故私は彼を追い掛けなかったのだろうか。何故、彼の姿を探さなかったのだろうか。浮かぶのは、後悔ばかり。

じわりと滲んだ涙が頬を伝う。

これでは駄目だ。そう頭では分かっているのに、心が弱っている所為か今はまとも
に考えられそうになかった。

マーシヤが家を訪ねてきたのは、それから約一時間が経つてからだだった。

部屋に響くドアノックの音。返事をする前に解錠され、ゆっくりと扉が開く。
「エルちゃん大丈夫？ セデイから話は聞いてるよ」

扉から顔を覗かせたマーシヤが、不安げに此方を見つめる。

結局、この一時間悶々と色んな事を考えてしまい、一睡もする事が出来なかった。

その所為か、視界を動かす度にぐらぐらと眩暈が起こる。

「ええ、心配かけてしまつてごめんなさい」

込み上げる吐き気を何とか抑えながら起き上がり、マーシヤに微笑みかけた。

「顔、真つ青だよ。本当に大丈夫？ 歩ける？」

此方に駆け寄つてきたマーシヤが、私を支える様に背に触れた。彼女の問いに「大丈夫」と一言答え、ゆっくりベッドから腰を上げる。

「とりあえず、診療所行こうか。先生に診てもらおう？」

彼女の問いに小さく頷き、ふらふらとした足取りで玄関へと向かう。そしてコートラックからストールを手に取り、それを羽織つて外へ出た。

マーシヤが家の戸締りをしているのを尻目に、曇つた空を見上げる。愛らしい鳴き声を発しながら、視界を遮る様に飛ぶのは白い小鳥。その小鳥が飛んでいく先には葉の落ちた木があり、枝には同じ種類の小鳥が数羽とまっていた。

寒空の下、身を寄せ合う様に小さな足で枝にとまるあの小鳥達は家族なのだろうか。鳥類はパトナーをとても大切にする、なんて話を前に何処かで聞いた事がある。その姿を眺めぼんやりと考へていると、戸締りを終えたマーシヤが私に身を寄せた。

「どうかした？」

彼女の問いにふと我に返り、鳥達から視線を離す。目に留まった野鳥に迄そんな事を考えてしまうなんて、今の私は相当参ってしまったているらしい。

彼女の問いに「何でもない」と短く返し、街の方へと歩を進めた。

それから、マーシヤに身体を支えられながら歩く事十数分。視線の先に、小さな診療所が見えてきた。

今までに何度も目に行っている建物だが、中に入るのは初めてだ。確か、医師の名前はマクフアーデンと言っただろうか。私は一度も目にした事が無い医師だが、街の女性達が綺麗な顔立ちをしていると噂しているのを聞いた事があった。

診療所の前で足を止め、小さく息を吐いてからドアノブに手を掛ける。

「——あ、あのさ」

ドアノブを捻ろうと手に力を籠めた瞬間、ずっと黙っていたマーシヤが突如声を上げた。

「——私、外で待ってても良いかな」

彼女の言葉は何処かきこちなく、表情は僅かに歪んでいる。

「どうして？ 何かあるの？」

思わずその言葉に問い返すと、彼女がより一層顔を歪めた。

「——ああ、えっと……私、此処の先生得意じゃなくって」

「得意じゃ、無い？」

復唱する様に問うと、彼女がコクリと頷く。

彼女の表情を見るに、相当苦手な先生の様だ。その様な顔を見ていると、じわじわと不安が沸き上がってくる。

「構わないけれど、怖い人なの？」

「ううん、全然怖くは無いよ。ちよつと、何考えてるか分からない様な人で、私が個人的に苦手ってだけで」

「——そう……」

私の主観ではあるが、マーシヤは人の表情を読み取る事にとっても長けている様だ。あれ程表情の変化が無いセドリツクの事さえ、分かり易いと言ってしまう程である。そんなマーシヤが苦手とするという事は、余程表情の無い人なのだろう。苦虫を噛み潰した様な顔をしている彼女が何だか面白く感じ、くすりと笑みを零した。

「じゃあ、行ってくるわね」

診療所の壁に凭れ掛かった彼女に微笑みかけ、ドアノブを捻る。少し重く感じる扉をゆっくり押し開くと、カラリとドアベルが鳴った。

白を基調とした清潔感のある診療所の中は、僅かにアルコールのニオイがする。決して大きく広い建物では無いが、内装は長椅子が並べられただけのシンプルな物で、居心地の良さそうな空間だった。

音に気付いたのか、カーテンの奥からこの診療所の医師らしき人が顔を出す。シルバーフレームの眼鏡にバイオレットの瞳が印象的な男性だ。街の女性達が噂する理由が分かる程、端正な顔立ちをしている。

「おや、見ない顔ですね。診察ですか？」

その声はややハスキーで、何処か少年を連想させるものだ。

「はい、お願いします」

彼の問いに答えると、彼は私を数秒程見つめた後カーテンの奥へと案内してくれた。

——時間になると、約三十分。

医師の腕が良かったのか検査も手際良く進み、想像よりも早く解放された。

診察を終え、この診療所の医師——エドワード・マクファアーデンにぺこりと頭を下げる。

「——ありがとうございます」

「一週間後に、また来てください」

彼の言葉に黙って頷き、診療所の扉を開く。

マクファアーデン先生は確かに不愛想であり、マーシヤの言う通り何を考えているか分からない人だった。だが医学的な事は全て噛み砕いて分かり易く説明してくれる、とてもいい先生なのだという事は分かった。

不愛想と言ってもセドリックとはまた違った性格をしていて、何処か抜けている様な先生だ。医療の話となると饒舌になるが、それ以外に関してはある言葉の多くない人である。少々眠たげな表情をしている様に見えるが、あれが通常なのだろうか。苦手意識を抱く程の人では無いと感じたが、少々扱いづらそうな印象を持った為マーシヤが苦手とする理由が少し分かるような気がした。

「——エルちゃん、先生なんだって？」

診療所の外で待機していたマーシヤが、私の姿を見るなり不安気な表情を浮かべ駆け寄ってきた。

「……うん」

その言葉に小さく頷き、自身にも言い聞かせる様に言葉を紡ぐ。

「——妊娠、しているって」

口にするのと、その言葉の重みを深く感じる。憶測通りではあったものの、やはり自分の中で何処か他人事のように思っている節があったのだろう。焦りや絶望、恐怖や不安などの感情が一気に沸き上がるのを感じた。

だが、私の気持ちとは裏腹にマーシャはぱっと顔を綻ばせる。

「お、おめでどう……!!」

さっきまでずっと不安な顔をしていたというのに、彼女の顔に花が咲いた様な笑顔が浮かぶ。そんな彼女の表情を見ると、僅かながら不安が和らぐのが分かった。

彼女はとても喜んでくれている。これは、きつととても喜ばしい事。

だが、どうしても素直に喜ぶ事が出来ない。それは、セドリツクの反応への恐怖か、それとも「あの夢」の所為か。

「——エルちゃん、嬉しくないの？」

私を見て何かを覚ったのか、彼女の顔から笑みが消えた。

「嬉しくない訳じゃないわ。大丈夫よ。でも、セドリックがどう思うのか……少し心配で……」

「セディなら大丈夫だよ！ あいつ、凄いいエルちゃんのこと大事にして……、子供出来た事だって、絶対喜んでくれる筈！」

「——そうだと、良いのだけど」

頭の中を回る、メアリーの言葉。あれはただの夢だ。分かっている。だがどうしても、それを断ち切る事が出来ない。

「——ねえ、マーシャ」

私の一歩前を、嬉しそうに歩く彼女に声を掛けた。

「妊娠した事、セドリックには黙っていて欲しいの」

マーシャは、自分の事の様に喜んでくれている。そんな彼女に自身の思いを伝える事はとても憚はかられた。

だからなるべく誤解を生まない様、穏やかに告げる。

「——……」

マーシャと私の間を、冷たい風が吹き抜けた。

私は今、どんな顔をしていたらろうか。マーシャは何も言わず、黙って私の顔を

見つめる。その顔には、僅かに不安が滲んでいた。

「——大事な事だし、自分の口で……伝えたいから……」

取って付けた様な言葉だと、自分でも思う。

だが彼女はそれを追及する事無く、「分かった」と一言、消え入りそうな声で答えた。

XI.I Punishment

妊娠が発覚して、一日が過ぎた。

医師からそれを聞いた時は、想定していた事とはいえ信じられない気持ちが大きく、それと同時に強い不安や絶望、焦燥感に襲われた。

そしてその日、それ等の感情に耐えられず帰宅したセドリックには「何でもなかった」と言って誤魔化した。病気でなくて良かったといつて安堵の表情を見せてくれたセドリックに胸が痛みつつも、眠って起きれば気持ちが落ち着くだろうと思

その日を終えた。

——そして、一日が経過した今日。

自身の考えが甘かったという事を覚った。

どれだけ時間を掛けても、不安や絶望、焦燥感と言うものは消えてくれない。寧ろ、話すのを先延ばしにすればする程その感情は膨らんでいく。

無かった事には、出来ない。それは分かっている。そうこうしている間に胎児は成長し、余計に夫婦仲を悪くしてしまう可能性だつてある。

では一体、どうすればいいのか。

答えは簡単だ。セドリックに早く妊娠を伝えればいい。

だが膨らんだ不安等の感情が邪魔をして、そんな簡単な事がスムーズに行おこなえない。

ズキズキと痛む頭を押さえながら、一人石畳の道を歩く。

普段と変わらない、街の景色。

あれほど街を騒がせていた婦女暴行事件はいつの間にか収束し、あの事件の話をする人達は少しずつ減っていった。真相は分からず終いではあったが、収束したの

ならそれに越したことはない。被害者の女性達の心も、回復に向かつているらしい。だが、今日の街はやけに殺伐としていた。

もうあの事件は収束したというのに、新たな被害者が出た時の様に皆深刻そうな顔をして額を寄せ合い、ひそひそと何かを話している。

噂話というものは、あまり気分の良いものでは無いだろう。何かを噂する人の声というのは普段の話し声とは違い、人の神経に触れる何かを孕んでいる。

そしてそれだけでなく、人の噂話は「自分だけ知らない」と思わせる何かを持っていた。どんな些細な事であろうと、それを知らない事に恐慌を引き起こす。

遠目に見えた、ライリーの店。赤子連れの女性と話す彼女は、街の人達と同じ様に深刻そうな顔をしていた。

ライリーはその人柄からか、街の人からも信頼を寄せられていて、色々な話を知っている。きつと、彼女に問えば皆が何を噂しているのかが分かる筈だ。

赤子連れの女性が店から離れた瞬間を見計らい、ライリーの元へ駆け寄る。

「ライリーさん、街で何かあったの？」

挨拶も主語も無い言葉。だが彼女は、私の気持ちを直ぐに察してくれた様だった。それを咎める事無く、変わらぬ深刻な顔で口を開く。

「——今朝、妊婦の遺体が発見された。自殺だったらしい」
彼女が普段よりもやや低い声で、ゆっくりと告げた言葉。

その言葉に、ぐらりと目の前が暗くなるのを感じた。

噂話と言っても、心の何処かで強盗や盗難、もしくは貴族絡みの話かと思つて
いた。だが、実際告げられたのは想像を絶する内容。

何故自殺したのか、夫は何をしていたのか、様々な疑問が浮かび、問い質たしたい
衝動に駆られる。

だが彼女の事だ。問い質さなくとも、全て教えてくれるだろう。そう信じて、黙
つて彼女の言葉を待つ。

「その遺体は、早朝に帰宅した旦那が発見した様でね。聞くに、彼女が妊娠をした、
事をきっかけに口論に発展し、旦那が家を出て行つたらしい。旦那は家に帰らず数
日間遊び歩いて、今朝漸く自宅へ戻つたら、妻であるその娘が首を吊っていた、と」

「——そんな……」

「その娘は、うちの店にもよく来る子でね。妊娠した事を嬉しそうに話してくれた
のをよく覚えてるよ。だけど、旦那が妊娠を良く思わなかつたんだろ。ね。残され
た遺書に色々と書かれていたそうだけど、旦那はその娘に、子供を拒絶する様な言

葉を、多く浴びせたらしい。それで、娘は腹の中の子供ごと……」

——妊娠、口論、拒絶、自殺。

それ等が脳内をぐるぐると周り、まるで内側から何度も叩かれている様に鼓動が速くなる。

もしセドリックが、その娘の夫の様に妊娠を拒絶したら。もし、口論の末彼が家を出て行ってしまったら。

そんな事ばかりが頭に浮かんでしまつて、耐え難い恐怖に襲われる。

「旦那が居なくなつて、一人で育てる事も出来ただろうに。旦那をそれ程愛していたんだらうけど、何も自ら命を絶たなくなつた……」

ぶつぶつと呟くライリーを尻目に、そつと自らの首筋に手を遣る。

亡くなつたその娘は、首を吊つたと言つていた。彼女は、どんな思いで自身の首に縄を掛けたのだろうか。

きつと最期の瞬間まで、彼女は自身の夫と身籠つた子の事を考えていた筈だ。

「……………」

ふと、過去に自身も死を選ぼうとした事を思い出した。あの時は地獄の中から抜け出したい一心であり、死こそが救済という思いであつたが、彼女は苦慮の末に死

を選んだのではないだろうか。

きつと、出来る事なら家族三人で幸せに暮らしたかったに違いない。だって彼女は、ライリーに妊娠した事を欣然として話したのだから。

——では、私は？

身籠った事が分かって、一度でも喜ばしく思っただろうか。セドリックは受け入れてくれないと身勝手にも決めつけ、宿った命を蔑ろにしてしまったのではないだろうか。

子の母親として、その娘の様に一度は喜ぶべきだった筈だ。一番にセドリックの事を考えてしまった事に、深い罪悪感を抱く。

——だが、怖い。怖くて仕方が無い。

私とその娘と同じ結末を歩んでしまうのではないかと、おぞけ怖気に襲われ行動に移す事が出来ない。

「エルちゃん、顔色が悪いね。大丈夫かい？」

ライリーの言葉に、ふと我に返る。

「——ええ、大丈夫……。ここ数日、体調を崩していて」

「そうかい、今日は早く帰って家で休みな。悪化したら大変だ」

彼女が商品台の向こう側から手を伸ばし、私の頭をくしやりと撫でた。その手の感触が何処かセドリックの手に似ている様に思えて、心を苛む怖気が僅かに和らいでいくのを感じる。

「ありがとう、ライリーさん」

その手が離れて行ってしまう事を名残惜しく感じながらも、なんとか無理に作った笑顔を彼女に向けた。

彼女も、何処かマーシャと似ていて勘が鋭い人だ。これ以上此処に居ては、私が今不安を抱えている事を気付かれてしまう気がした。

首元を圧迫される様な、首を絞められている様な、酷い息苦しさに息をつく。まるで、首を吊ったあの娘に憑り付かれてしまった様だ。呼吸が浅くなる程の息苦しさに、視界が歪むのを感じた。

——早く帰って、眠ってしまおう。彼が帰ってくるまでまだだいぶ時間がある。眠ってしまったら、何も考えずに済む。怖気に襲われる事も、不安に苛まれる事もなくなる。

ひらりとライリーに手を振り、踵かかとを返した。
その、瞬間。

「……！」
髪をぐいと引つ張られる感覚がして、思わずその足を止めた。
何処かに、髪を引つ掛けてしまっただろうか。髪飾りが緩み、髪が乱れていくのを感じながら振り返った。

だが、瞳に映ったそれらの光景に一瞬で血の気が引く。

あの日のセドリックを連想する、はらりと散る赤い花卉。そして耳に届いた、プツリと何かが千切れる小さな音。

「……あ」

自身の背後に居たのは、先程ライリーと話し込んでいた赤子連れの女性。その女性の腕に抱かれた赤子が、黒のリボンを握りしめ、嬉しそうに手足をばたつかせる。私の髪を、いや、髪飾りのリボンを引つ張ったのは、紛れも無いその赤子だった。

髪飾りに付いた造花の薔薇は崩れ、花卉が散ってしまい無惨な姿で石畳の上に落ちている。

赤子が引つ張った拍子に、飾りが壊れてしまったのだろう。解けてしまった黒いリボンが赤子の手から滑り落ち、追いつかぬ打ちをかける様に散った花卉の上に落ちた。この髪飾りは、セドリックが結婚記念日に贈ってくれた物だ。私が大切に、大切

にしていた物。

リボンを落としてしまった事からか、火が付いた様に赤子が泣きだす。その所為で女性もライリーも赤子に掛かりきりになってしまい、二人が壊れた私の髪飾りに気付く事は無かった。

——これは、天罰だろうか。

家を捨て、全てを裏切り逃げ出した罰。そして、セドリックに想いを寄せる少女に酷い事を言ってしまった罰。

悪事を働いた者に、幸福など訪れない。

自身の妊娠を受け入れられないのも、恐怖や不安に苛まれるのも、大切な髪飾りが赤子の手によって壊されてしまった事も、最早当然の報いだ。

涙が零れそうになるのを抑え、その場にしゃがみ込み散らばった花卉を残さず掻き集める。この髪飾りは、どうやったって元通りにはならない。それは、素人目で見ても分かる事だった。

「——エルちゃん？ そんな所にしゃがみ込んで、どうしたんだい」

気付いたライリーが、私に声を掛ける。だが、今はその言葉に返答する事が出来なかった。

慌てて立ち上がり、壊れた髪飾りを大切に胸に抱いて逃げる様に家路を急ぐ。地面を蹴った拍子に、瞳に浮かんだ涙が零れ頬を伝った。それは止まる事無く、次から次へと頬を伝い落ちる。

——自分と、最愛の彼の血を引いた我が子が愛おしくない訳が無い。

セドリックと愛し合った事実を、ただの書類じゃなく形に出来る事は心嬉しく思う。だが、あの晩セドリックに無理を言つて屋敷から連れ出して貰つた事実は変わらない。

彼は私を深く愛してくれているが、子供が出来たら彼への負担も当然増える。そうなった時、いずれ彼は私を屋敷から連れ出した事を、私と結婚した事を、後悔する日が来るのでは無いか。

漸く辿り着いた自宅。乱暴に扉を解錠し、逃げ込む様に家の中へ入る。

ふらふらとベッドに近づき、ナイトテーブルの前に膝を付いて座り込んだ。手荒くナイトテーブルの引き出しを漁り、中から空の小箱を取り出す。

そしてその箱を開き、散った花卉とりボン、コームをそつと仕舞い込んだ。

箱の中の、髪飾りだった物。私がとても、大切にしていた物。

涙が止まらず、嗚咽を漏らしながら蓋を閉じ、その箱を強く胸に抱いた。

セドリックの愛が離れて行ってしまうなら、少しでも彼の負担になつてしまふのなら、子供など居ない方が良い。

だが、子供だけが彼と愛し合った証明。

私はエインズワース家の令嬢であり、彼と出逢い、生まれ育つた家を捨てて彼と結ばれた事などなんの形にもならない。私達の間に愛があつた証明は、これしか無い。

——要らぬ物を身籠つた、あの男にとっては余計な物だつた、それさえ無ければまだ愛して貰えたのに。

耳の奥で響く、メアリーの言葉。あれは夢だつた筈なのに、夢だと思えない程に鮮明だ。

メアリーの声が、嘲笑う声が、頭の中に響き渡る。

ああ煩い。煩い。何度も言わなくなつて分かつている。

「——余計な、物を……」

その言葉は、誰に言つたものだつたか。無意識的に自身の腹に手を遣り、強く服を握りしめる。

どうしてこうなつてしまったのだらう。こんな事になるのなら、こんなに不安に

なるのなら、怖気に襲われるのなら、自殺したあの娘の話など聞かなければよかつた。噂話はよくあるものだ、下らないと、そう決めつけてしまえばよかつた。

それとも私は、苦界くがいを渡つて生きなくてはならぬ人間なのだろうか。これが、運命なのだろうか。

苛立ちと不安、恐怖が混ざり合い、酷い吐き気に襲われる。

——なんで、どうして。

頬を伝い落ちる涙は止まる事無く、頭の中では、まるで私を責め立てる様に何度もメアリーの声が響いていた。

XLII Sweet citrus

——雨上がりの街。ペトリコールが充満する路地裏にて、広がる灰色の空を見上げ溜息をつく。

診療所へ行って、二日が経過した。

ライリーから聞いた妊婦の自殺の話も、髪飾りが壊れてしまった事も、たったの一晩で気持ち切り替えられる筈は無く、何を見ても何をしていてもそれ等と身籠った赤子の事が常に私の頭を埋め尽くしていた。

ほんの一瞬たりとも忘れる事は出来ず、食事も喉を通らない。その為、もう二日間もまともな食事が出来ていない。

ただただ、心労しんろうだけが募っていく。

ライリーや街の人達と会話をする気分にもなれず、今日は店の方には行っていない。料理を作る食材に幾つか足りないものがあるが、セドリツクの分さえ作れば問題無いだろう。

人通りの少ない路地裏を選び、一人当てなく進んでいく。

主治医であるマクファーデン先生には、無暗に歩き回らない様に、と言われている。食材の買い出しも、極力一人で行かない様にとも。

妊娠初期は母子ともに非常に不安定であり、些細な事が流産に繋がる可能性があるのだとか。

それを聞いて私は、セドリツクに知られぬまま子が流れてしまえばいいのときえ思った。そうすれば、もう悩む必要は無いのに。夫婦仲に罅が入る事も無いのに。

ただ、少しの後悔が残るだけで済むのに。
路地裏の一部にある、少し長い石の階段。丁度そこへ差し掛かり、段差の前で足を止めた。

階段を見下ろし、ぼんやりと思考を巡らす。

もし私が此処で転んだら、階段から落ちたら、もう何も考えずに済むだろうか。全てから解放されるだろうか。

階段の長さを見るに、落ちても命に関わる事は無い筈だ。きつと、軽症で済むだろう。だが、確実にお腹の子は助からない。

そんな考えが頭の中をぐるぐると回り、階段を降りられずその場に立ち尽くしていた。

階段から落ちた事も、子供が流れた事も、セドリツクの耳に一切入れないという事は出来る筈が無いのに、目先の事に囚われてしまい冷静に考えられない。

もつと、しつかりしなければ。これでは駄目だ。

そう、どれだけ自身に呵責かしやくを与えても、その思考からは逃れられる事は無かった。
——苦しい。

何度その言葉をセドリツクに伝えようとして、飲み込んだ事だろう。

伝えようとしても、結局寸前になって喉奥が塞がった様に声が出なくなってしまう。

妊娠した事を聞いて、困惑する彼の顔が、拒絶する彼の言葉が、まるで現実の事柄の様に脳内に鮮明に浮かんでは消える。あの時の、メアリーの夢の様に。

いつまでもこんな場所で立ち尽くしていたって仕方が無い。無意識的に手を遣ったお腹を撫でながら、片足を前に出した。

このまま落ちてしまえばいいのに、なんて思いながら、ゆっくりと階段を降りていく。

——ふわりと、鼻腔を抜けたシトラスの甘い香り。

とても落ち着く香りだ。誰かの香水だろうか。その香りに釣られ顔を上げると、自身と擦れ違う様に階段を上ってくる女性と視線が交わった。

ストロベリーピンクの瞳に、色素の薄い肌、薄紅が混じった美しい白髪。何処か修道着を思わせるデザインのドレスに強く目を惹かれる。

彼女が私を見て、柔らかく笑った。その笑顔が美しく、釣られて自身も笑みを浮かべる。

何処か別の街から来た女性だろうか。これ程特徴的な風貌をしていれば、街でも

目を惹く筈だ。一度見れば忘れられないだろう。

現代の人間にしては随分と変わった風貌で、仮に魔女や占い師などの類たぐいだと言われても信じてしまいそうだ。

同性の私ですら見惚れてしまうその美しさに鼓動を高鳴らせながら、こっそりと彼女を盗み見る。

スカートを軽く摘み上げ、ゆつたりとした動作で階段を上るその姿。背筋は伸ばされていて、動きに無駄が無い。これ程美しい佇たずまいの女性は、貴族の中にもそうそういないだろう。絵に収めたくなる程だ。

彼女を、もう少し間近で見たい。そんな願いも虚しく、お互い無言のまま擦れ違った。

「——Beliefs destroy not only one's own life, but also the lives of others.
《思い込みは自身の人生だけで無く、他者の人生までもを滅ぼす》」

突如自身の耳に届いた、鈴を鳴らした様な繊細な声。訛なまりの無い、心地の良い英語。

そして、不可解な言葉。

その言葉は、いつか丘の上で開いた黒の手紙を彷彿とさせた。あの手紙の意味は結局分からず終いであったが、あの手紙も、すれ違った彼女の言葉も、何か特別な意味があるような気がした。

「——待って！」

咄嗟に振り返り、その女性を呼び止める。

ここで彼女を逃してはいけない。ちゃんと真相を知らねばならない。そう本能的に感じ取る。

「——貴女は誰？ あの手紙を送ったのも貴女なの？ あの手紙と、今の貴女の言葉に、なんの意味があるの？」

階段を上りきった彼女が、足を止めた。そんな彼女の背に、感情に任せた言葉を投げ掛ける。

すると彼女はスカートひろがえを翻し、少し悪戯な笑みを浮かべて振り返った。ほんのりと赤い小さな唇の前に指を立て、「It's a secret 《それは秘密》」と囁く様に告げる。

「——待って、待ってまだ、話が……」

彼女は踵かかとを返し、ゆったりとした足取りで遠ざかっていく。

私はそんな彼女の背を見つめるばかりで、追いかける事が出来なかつた。まるで根を生やした様にその場から動く事が出来ず、ただその場に立ち尽くす。

彼女を追い掛けて、私は何を問えば良いのだろう。私はあの手紙の差出人を覚えていない。よつて彼女に名前を尋ねても、あの手紙の差出人と彼女が同一人物かを確かめる事も出来ない。

それに、彼女は「秘密」だと言つた。あの手紙も、先程の彼女の言葉も、意味を聞いたところでできつと彼女が何かを答える事は無いだろう。

漸く身体が動いた頃には、彼女の背は見えなくなつていた。
ぼんやりとした頭で先程の言葉を思い返す。

「……思い込みは、自身の人生だけでなく……他者の人生までもを、滅ぼす……」
彼女の言葉を復唱しながら、様々な事を思い浮かべた。

セドリックが拒絶をする事も、自殺した妊婦と自身を重ね合せている事も、全て私の思い込みだ。勝手な決め付けでしか無く、そこに一つも真実は無い。

だが、メアリーの夢は？

あれは、あの言葉は、私の心情を表したただの幻なのだろうか。それとも、正夢

や予知夢の一種なのだろうか。これから起こる未来をメアリーが代弁しただけで、あれは未来を見せたものなのかもしれない。

しかし、この世には逆夢さかゆめと呼ばれるものも存在していた。

逆夢とは、事実とは逆の夢、実際には逆の事が起こる夢の事である。例えば夢で夫と離縁をしたとすれば、現実では夫との仲が深まるなど、そういったものだ。

——メアリーのあの夢が、仮に逆夢などしたら。

先程の女性の言葉。まるで私に、思い込みを捨てるとでも言うようであった。何を信じ、何を疑えばいいのか。

思考は絡まり、余計に分からなくなっていく。

やはり、あの女性を追いかけろべきだったかもしれない。そう思いながら壁にもたれ掛かり、まだ僅かに香る甘いシトラスに溜息をついた。

診療所へ行ってから一日二日と日が過ぎ去り、今日で三日目を迎えた。

言わずもがな、セドリックには何も話せていない。言おうと努力はしてみるものの、彼の顔を見るとどうしても話す事が出来なかつた。

夕食と入浴を終えた、眠るまでの短い自由な時間。針と糸でセドリックのシャツの綻びほころを繕いながら、疲労感に溜息を吐く。

食事を摂らない生活を三日も続ければ、当然身体に不調が出てくる。目の霞みや頭痛、倦怠感、集中力の欠如等、数えだしたらキリが無い程だ。

普段なら数分で終わる作業も、今日は中々思う様に進める事が出来ない。

指先には何度も針を刺し、その都度布切れで滲んだ血液を拭う。そして真っ直ぐでない縫い目を見ては何度も糸を切つて解き、縫い直す。そんな事をしていくうちに、いつの間にかシャツの綻びは当初よりも大きくなってしまっていた。

古くなったのなら買い替えれば良いとシャツを処分しようとするセドリックに、勿体ないからと無理を言つて手直しをしているというのに、これではいつまで経つ

でもまともに着用出来るシャツにならない。

欠如している集中力を、呼び戻す事は難しい。出来ないものを何度もやり直すよりも、今晚は諦めて、明日の朝続きを縫う方が効率的だろうか。

そんな事を考えていると、背後でベッドが軋む音がした。此方に向かってくる彼の気配に、自然と身体が硬くなる。

「——なあ、エル」

私と向かい合う様にテーブルに着いた彼が、何処か複雑な表情を浮かべ私の名を呼んだ。

頬杖を付いて此方を見つめる彼の視線は、私の手元に向けられている。作業が遅い事を、不審に思われてしまったのだろうか。

手元に視線を落としたまま、動揺で満ちた心を隠す様になるべく穏やかに「なあに」と返答する。

だが、彼は黙ったまま。感じる視線が少々気まづく、沈黙は重い。

彼がこの様に、はつきりと物を言わないのは珍しい。一体何を思っただけかを疑問に思い、顔を上げた。

「どうしたの？」

首を傾げ、彼に視線を送る。

彼は変わらず複雑な表情を浮かべていて、その顔から何かを読み取る事は出来そうに無い。

最近は大分表情が柔らかくなった為顔を見るだけで何を考えているか分かる事も増えてきたが、今の顔を見ているとやはり彼は表情が豊かな人では無いのだという事を再確認した。

一体何を言われるのかと怖気おぞけを抱きながらも、彼の瞳を深く見つめ返す。すると、彼が僅かに表情を崩し口を開いた。

「——お前、俺に何か言わなくちゃいけない事があるんじゃないのか」
投げられた言葉に、心臓が大きく脈打つ。

動揺から落としそうになってしまったシャツを強く握りしめ、彼の視線から逃れる様にその場に俯いた。

「——マーシヤから何か聞いたの？」

「いや……」

彼が曖昧に言い淀み、少し間を置いた後「なんとなく」とその先を濁した。

その様子を見るに、マーシヤから何かを聞いたのは明白だ。

マーシャにとってセドリックは、仕事仲間であり毎日顔を合わせる相手だ。それに幼馴染という事もあり、何でも話せる相手なのだろう。黙っていて欲しい、という頼みはマーシャにとって酷だったのかもしれない。

仮にマーシャがセドリックに妊娠の事を話していたとしても、私にマーシャを責める資格は無かった。全ては、話さなかった私が悪いのだ。

部屋に響く、秒針の音。それはまるで急かす様に耳奥に響き、とても気分が悪い。

「あ、あの……」

長い沈黙が苦しく、なんとか喉奥から言葉を漏らす。

静寂を裂く自身の声。それがやけに大きく感じ、シャツを握る手に力を籠めた。

「——エル」

彼が囁く様に、私の名を呼ぶ。何処か棘がある様で、何よりも優しい、言葉にし難い声だ。

その場に深く俯き、早く話さなければ、と自身を急かす。

だが、何も言葉が出てこない。何から話し始めればいいのか、自身の不安をぶつけても良いものか、彼はそれを受け止めてくれるのか、様々な事が頭を回り、目が回りそうだ。

ぼたり、と雫がテーブルに落ちる。

それが自身の瞳から零れた涙だと気付くのに、少し時間が掛かった。しかしそんな自身の気持ちとは裏腹に、涙は溢れテーブルには一粒、また一粒と雫が落ちていく。

——ずっと、ずっと不安だった。一人きりで、考え続けていた。

自身の中で張り詰めていた糸が、この状況をきっかけに切れてしまった様だ。

——もう考えられない、もう一人で抱えられない。

彼が少しでも子を拒絶するのならそれに従おう。もうどうなったって構わない。彼と居られるなら、それでいい。

全てを打ち明けようと、顔を上げた。

「……………」

瞳に捉えた、彼の表情。

深く傷ついた様な、なんて言葉では表せない。だがその中で、敢えて言葉にするのなら「絶望」。

彼がマーシャから、どこまで聞いたのかは分からない。だがもし私が子を身籠った事を聞いていたとしたら、彼は今迄どんな思いで過ごしていたのだろうか。

思い返してみれば、彼はこの三日間やけに私の身体を気遣ってくれていた気がする。それは、私がここ数日体調を崩していた故の行動だと思っていたが、もしそれに別の意味があつたのなら。

彼のその表情は「拒絶」じゃない。ただただ悲愴感に満ちた表情だ。

そんな顔、させたくなかった。見たくなかった。

まさか私が真実を告げぬ事で、彼を傷つける事になるうとは。私は私の事ばかりで、彼の事を何も考えられていなかった。

「——ごめん、なさい」

その事実が悲しくて、苦しくて、思わずガタリと大きな音を立て椅子から立ち上がった。その拍子に椅子が倒れ、手に持っていたシャツが床に落ちる。

そしてそのまま、逃げる様に玄関の方へ足を向けた。

逃げたいいけない。彼に自分の口で話さなくてはならない。

だが今は、少しでも冷静になる時間が欲しい。少しでも、一人になって落ち着きたい。

でないと、言わなくていい事さえも彼に言ってしまう気がした。

「——エル、待て。ちゃんと話を……」

彼に腕を掴まれ、玄関へ向かおうとした足が止まる。

酷い動悸と緊張感、自身を襲う怖気。身体は震えだし、呼吸は浅くなる。

彼の顔を見るのが怖い。だが、もう逃げられない。逃げちゃいけない。

そう頭では分かっているが、心が話す事を拒絶してしまいどうしても逃げの方へ
気持ちに向いてしまう。

「……少し」

涙に濡れた顔を、彼に向ける。

——少し、時間が欲しい。

そう告げようと、口を動かす。

だが、喉奥から声が出る事は無く、身体がふらりと後ろへ傾いた。

足元がぐにやりと湾曲する様な感覚と共に、視界が歪みだす。倒れてしまったあの日の朝とはまた違った、気妙な眩暈。

強制的に身体から意識を抜き取られてしまう様な、不思議な感覚だ。

まるで糸を切られた操り人形の様に、その場に崩れ落ちる。

咄嗟に、セドリックが抱き留めてくれたおかげで床に叩き付けられずには済んだ。だが、閉じた瞳は自身の意志で開く事は出来ず、私を呼ぶ彼の声は徐々に遠くなっ

ていく。

そんな中、私はこの状況に僅かに安堵していた。

これで、少し冷静になる時間が作れる。これで少しの間一人になる事が出来る。意識が無かったとしても、この状況から逃げる事が出来るような気がしていた。

*

ゆらゆらと、下る様に意識が覚醒する。

ベッドに横になっているのに、船酔いをしている様に眩暈がしていて気分が悪い。あれから、どのくらい時間が経ったのだろうか。

意識を失っていた為一人になったという感覚は無い。だが、先程よりも大分気持ちには落ち着いていた。少し、冷静にもなれた様に思える。

そんな時、ふと頬に何かに触れる感覚がした。頬を包み込むそれは大きくて温かく、すぐさまセドリックの手だと言う事を覚る。

傍に感じるセドリックの気配。早く瞳を開いて、彼と話をしなければ。冷静になった今なら、きつと話が出来る筈だ。

だが、やけに瞼が重い。まるで目元のみ力が抜けてしまった様に、瞳を開く事が出来なかった。

それに、頬に感じる彼の手の温もりが心地良く、このままもう一度眠ってしまいたくなる。

しかし、そんな私を呼び起こそうとする様に彼が私の名を呼んだ。

その声はとても優しく、何処か寂しげだ。そんな声で呼ばれてしまえば、瞳を開かざるを得ない。

彼と話をする覚悟が完全に決まった訳では無いが、これ以上先延ばしにした所で意味が無いのだ。

不安が沸き上がるのを感じながら、目元に力を籠めた。

「……………」

だが、その瞬間彼の手が頬から離れた。予期せぬ動きに気持ち揺らいでしまい、瞳を開く事が出来ずそのまま彼の行動に意識を向ける。

彼が頬の次に手を触れさせたのは、私の左手。そのままゆっくりと持ち上げられ、空の薬指に何か柔らかなものが押し当てられた。

その感触には、覚えがある。セドリックにされるのは初めてだが、社交界では何

度もされた事だ。

「セドリック……?」

ゆっくりと瞳を開き、ベッドの脇に座る彼に視線を投げかけた。部屋を照らす灯りが瞳を刺し、その眩しさから僅かに目を細める。

「……体は大丈夫か?」

「……ええ、今は平気。心配掛けてしまつてごめんなさい」

彼の手は直ぐに左手から離されてしまい、結局彼が何を思つて薬指にキスを落としたのかは分からなかった。だが、慈しむ様に私を見つめながら髪を撫でる彼の姿に、自然とその疑問が消えていく。

私達の間に流れる沈黙。

言葉は交わさず、ただお互い見つめ合うだけの時間。それはとても心地よく、心の不安が溶けていくのを感じる。ずっと、こうしていたい位だ。

だが、今は彼と話をしなくてはならない。自身の口で、妊娠を伝えなくてはいけない。

乾いた喉を潤す様に唾液を飲み込み、口を開いた。

「——セドリック、あのね」

言いかけた言葉。しかしそれは、私の唇に触れたセドリツクの指に制された。

「マクファアーデンといったか。話は、全部あの医者から聞いたよ」

彼の指が私の唇から離れ、徐に私の額に掛かった前髪を払う。

「……気付いてやれなくて、悪かった」

ぼつりと、嘆く様に。彼は私の瞳を真つ直ぐ見つめたまま、誤魔化す事無くその言葉を告げた。

彼に非は一切無い。悪いのは全て私だ。だが、瞳に浮かんだ涙が邪魔をして、言葉が出てくる事は無かった。

代わりに、首を横に振りその言葉に否定を示す。

「……俺は人と関わる事が得意じゃないし、子供の相手をするのも慣れてない。だから、子供にとつていい父親になれるかは分からない。だがそれでも、子供が出来たって聞いた時、俺は嬉しく思った」

瞳に浮かんだ涙は溢れ、次々に伝い落ち枕を濡らす。

あの女性の言葉が、今漸く分かった。自身の思い込みは、他者の人生までをも滅ぼす。

私は何度、子供が流れてしまえばいいと願っただろう。何度、セドリツクは子供

を拒絶すると思ひ込んだらう。

私の想いは、考えは、何一つ正しくなかった。彼は子供を喜んでくれていたのに、私は彼の事を何も考えずにただ一人で不安になって、挙句流れてしまえばいいと願った。

込み上げる自己嫌悪。だがそれと同時に深い安堵が自身を満たし、涙は止まる事無く溢れる。

「——お前は、そうじゃなかったか？」

私に問う声は、囁き掛ける様でとても優しい。だが、その声には僅かに不安が滲んでいる様に感じた。

不安なのは、私だけじゃない。

悩んだのも、苦しんだのも、彼も同じだ。

彼の大きな手が、撫でる様に伝った涙を拭う。

私の瞳を真っ直ぐに見つめる彼は、不安な表情をしているものの決して逃げる事はしなかった。正面から、私と向き合ってくれた。

私も最初から、今の彼の様に話をすれば良かったと、出てくるのは後悔ばかり。だが今は、そんな後悔よりも彼に気持ちを伝える事の方が先だ。

「——嬉しくない訳、無いじゃない……」

痛む身体を無理矢理起こし、小さな子供の様に彼へ両手を伸ばす。すると彼が、私を腕の中に受け入れ強く身体を抱いてくれた。

「——でも、貴方の負担に……なりたくなかったのよ……」

私の身体を抱くその腕の強さと、愛おしい彼の体温。それ等に緊張の糸が解け、溢れる涙にしゃくり上げながら言葉を紡ぐ。

「……貴方が、人付き合いを好まないのは分かった。そんな貴方が私を愛してくれたのは、奇跡だって事も……」

彼が子をあやす様に私の背を優しく撫でながら、小さく頷いた。

「だから、その奇跡を大事にしたかったの……。貴方との子供が欲しいだなんて、我儘を言つて……。この関係を壊してしまいたくなかった……。だから、本当はお腹の子、とても大切に嬉しかったけれど……。このまま無茶をして、流れてしまえば、いいのかなって……」

私の言葉に、彼は何も言わなかった。ただ私を抱く腕に力が籠っただけで、口を噤んだままだ。

「……貴方はずっと、愛されていたかったの」

そんな彼に、躊躇ためらいながらも一言付け加える。

すると、彼が一度私を強く抱きしめた後、ゆっくり身体を離れた。

「……お前を負担になんて、思う訳ないだろ」

彼が私の頬を優しく抓つかり、僅かに口元を緩める。

「俺を、子供が出来た位で負担に思う奴だと思つてたのかよ」

「……そういう、訳じゃ……」

こつりと合わせた額から、伝わる彼の体温。

心を満たすのは、安堵と幸福感、そして一抹の不安。様々な感情が混ざり合い上手く言葉にする事は出来ないが、それでも心を苛んでいた怖気は綺麗さっぱりと消え去っていた。

「——これからどんな事があっても、お前を愛してる事だけは変わらないから」

彼が私の頬を両手で包み込み、そつと唇を重ね合わせた。

この三日間で何度も口付けを交わしていたのに、何故だか唇から伝わる体温がやけに久しく感じられた。きっと、彼との口付けに意識を向けられない程に不安に苛まれていたのだろう。

唇を離し、頬を緩ませる。

「貴方にしては、随分と気障きざな事を言うのね」

「——うるせえ」

複雑な表情を浮かべる彼にくすくすと笑みを漏らし、何方からともなく再び唇を交わらせた。

久しぶりに、笑った様に思える。彼と唇を交わらせながら、深い安堵からかまた涙が溢れた。

これで、良かった筈だ。

間違った方へは進んでいない。

私の頬を撫でる彼の手の感触を感じながら、彼と二人笑いあった。

XLIV Calm time

美しくも儂い粉雪が、はらはらと舞う十二月の下旬。

窓の外は一面の銀世界。きつと一歩でも外へ出れば、その雪の冷たさが凶器の様

に身体を刺すのだろう。

しかし、暖炉を焚き室温の上だった部屋の中からは、それ等がとても美しいもの
に思えた。

セドリックに妊娠を打ち明けて約一カ月。

彼は今迄以上に過保護になり、仕事の予定を入れず私と共に家で過ごしてくれる
日がとても増えた。

だが彼は表情が乏しく、何を考えているのかが分からない事は変わらない。相変
わらず他人には無頓着であり、共に街へ買い出しへ行った際にも、あまりの無表情
に店の人に怖がられてしまう事が多々あった。

それでも彼の日頃の行動を見ていれば、あの日私と身籠った子を受け入れてくれ
た言葉に嘘偽りが無い事は分かった。

暖炉の前に座り、私を背後から抱く彼に凭れ掛かる。

腕の中には柔らかなクッション、身体を包むのは彼の体温とお気に入りのブラン
ケット。時々私の頬や髪を撫でてくれる彼の手と暖炉の温かさも相まって、瞳を閉

じうとうとと現実と夢の間はさまを彷徨さまよう。

すると彼が徐に、私の腕を優しく摩りながら袖を捲つて肌を露出させた。暖炉の火に照らされてオレンジに色を変えた腕は、自身から見ても妊娠や出産に耐えられるのかと疑問視する程に細く思える。

「——細いな」

私の腕を撫でながら、彼がぼつりと呟いた。その声には、僅かに心配の色が滲んでいる。

「貴方はずっと愛されていたいから、なるべく綺麗で居たいの」

そう笑つて応えると、彼が複雑な表情を浮かべながら私の顔を覗き込み、そつと触れるだけのキスを落とした。

体型を維持する事は、屋敷に居た頃から徹底していた為慣れている。勿論、妊婦は胎児の分まで栄養を摂らなくてはならない為、それが好ましくない事は理解していた。しかし、女性は細ければ細い程美しい、という考えは一般的であり、事実でもある。故に、セドリツクに少しでも綺麗だと思つて貰えるように体型の維持を心掛けていた。

「マクファーデンにも、もう少し体重増やせつて言われてただろ。どんな姿でも、

お前が綺麗な事には変わりない」

「マクファーデン、先生」、ね。私達の子を一番に考えてくれている先生なのだから、もっと敬意を払わないと」

「本人の前ではそう呼んでる」

「——そう言う事では無くって……」

呆れ半分、セドリックらしい返答だと笑みを零す。

他人に無頓着なのか、それとも単に礼儀知らずなだけか。それは主治医に対しても変わらないらしい。

せめて主治医に位は敬意を払って欲しいものだが、逆にセドリックが愛想良く周囲の人間に敬意を払う様になったら怖い位だ。

本人に無礼が無い様になっているのなら、多少大目に見るべきだろうか。

そんな事を考えていると、彼が私を抱く腕に力を籠め、首元に顔を埋めた。

「——心配なんだ」

耳元で囁かれた声には、不安が滲んでいる。

「出産で死んだ母親も多くいる」

彼にしては珍しい弱音。余程不安を抱いているのだろう。

事実、現代では凡そ半数の母親達が出産で命を落としている。勿論なんの問題も無く出産を終え、子育てに励む母親も多くいるが、子だけを残す、もしくは母子共に命を落としてしまう事も決して珍しくはなかった。

彼の気持ちを考えれば、不安に思う気持ちも分からなくはない。きっと私がセドリックの立場であれば同じ様に不安を抱いただろう。誰だって、配偶者を失うのはつらい。

自身は然程出産に不安を抱く事はなかったが、仮に私が出産で命を落としたとして、子だけを彼に残してしまふ未来を想像すると僅かに胸が痛んだ。

しかし、セドリックにはマーシヤが居る。私が居なくなつた世界でセドリックとマーシヤを二人にするのは少々癪だが、マーシヤは私にとって一番の友人だった。彼女になら、セドリックと産まれた子を託しても良いだろう。唯一、妥協が出来る相手だ。

「――私に万一の事があつても、マーシヤが居るわ」

ぼつりと呟く様に言ってみれば、苦しさを感じる程に強く抱きしめられた。

「なんでマーシヤが出てくるんだ。お前が居ないと、意味が無い」

少し拗ねた様な声で、彼が更に腕に力を籠め嘆く。そんな彼に「苦しいわ」と言

つて笑うと、洪々その腕が緩められた。

彼は不器用ながらに、こうして愛をくれる。それが何よりも嬉しくて、愛おしくて、彼の腕の中で身を捻り、暖炉の火に照らされて赤み掛かつて見える黒髪をそつと撫でた。

普段なら、こうして私が彼の頭を撫でると「子ども扱いするな」等といった言葉が透かさず飛んでくる。しかし今は、私を抱いたまま何も言う事は無かった。

「——ああ、そういえば」

彼の髪を撫でていると、ふと先日主治医が言っていた事を思い出した。

「この前先生が、次の検診は旦那様と一緒に来てくださいって」

その事を告げると、彼の表情が一気に怪訝なものに変わる。

「いつも一緒に行ってるだろ」

「そう、なのだけど……」

彼の言う通り、検診の日は何があるかと必ず付き添ってくれていた。

しかし彼はどうやら、マーシヤと同じくマクフアーデン先生が苦手な様だ。検診の日を迎えると、そわそわと落ち着かない素振りを見せる。

人付き合いを得意としないのは元から知っていた事ではあるが、彼がそれを全面

に出すのは非常に珍しい。それ程、彼にとって苦手な人なのだろう。

だが、それでも付き添いを一度でも怠おこった事は無かった。それはマクファーデン先生も知っている筈なのに、何故私に念押しをしたのかは謎に思う。

「何か、貴方に特別な用事でもあるんじゃないかしら」

考えられる事と言え、その位だ。妊婦との生活や、指導等、医者として夫である彼に伝えたい事は色々あるのだろう。

「特別な、用事……」

私の言葉を復唱した彼が、少々考え込む素振りを見せる。しかし、直ぐに「ふうん」と興味を失った様に呟いた。

——私達の間には、沈黙が訪れる。

ただお互い、何も言わずパチパチと音を立てて燃える暖炉の火を見つめる。

流れるのは気まずさでは無く、穏やかで温かな空気。彼の腕に抱かれながらぼんやりと過ごすこの時間は、とても幸福なものであった。

緩やかに落ちていく瞼。今度こそ、本当に眠ってしまいそうだ。

現実と夢の間を再び彷徨はさまい始めた時、私を抱く彼が優しく「おやすみ」と一言囁いた様な気がした。

XLV Clinic

「——先生、あの……」

エドワード・マクファーデン医師が務める小さな診療所。

アルコールのニオイが充満する清潔感溢れる診察室には、医学書がびっしりと詰められた棚が三つと、座り心地の良いアームソファが二つ置かれている。

壁紙とカーテンは目の痛くならない無地のオフホワイトが選ばれており、良く言えばシンプル、悪く言えば殺風景な空間が広がっていた。

そんな中、先生はデスクの前のソファに、私は患者用のソファに腰を掛けていた。診察室へ入り、早十分。診察と言っても、母体や胎児に変化がないかの確認位であり、日常生活で困った事や気になる事、変わった事が無いか等のカウンセリングが殆どを占めている。

そしてその診察兼カウンセリングが終わりに近づいた現在、此処へ入ってきた時からずっと思考を埋め尽くしていた事を躊躇いながらも口にした。

「その頬、どうしたんですか……？」

先生の頬には、見る人全ての目を引くであろう大きな引っ掻き傷。その大きさや形からして、明らかに人のものだ。

その様に人の頬に引っ掻き傷を残せる人物と言えば、爪の長い女性位しか思いつかない。

——痴情の纏れ、だろうか。

幾ら医者であれど彼も人間であり、恋人を作る事だって、娼婦を買う事だってする筈だ。普段の振る舞いからはセドリックと同じく女性に興味がある様には見えなかったが、もし本当に痴情の纏れ故の傷なのだとしたら、それを訪ねるのは無粋だったかもしれない。

しかし彼は、相変わらずの無表情で淡々と答えた。

「猫を抱いたら引っ掛かれてしまつて」

「……………猫？」

思わず、彼の言葉を聞き返す。

彼はそしらぬ顔をしているが、その傷が猫の頬では無い事は明らかだ。

そこでふと、とある台詞を思い出した。

『うちの猫が、外で飲むのを嫌がるんだ』

それは、屋敷に居た頃に読んだ本に出てきた男性の言葉だ。その男性は、知人に妻の話をする際「猫」と表現していた。

しかし、その男性はかなり社交的でユーモア溢れるキャラクターであった。故に妻を「猫」と表現していても違和感は無かったが、女性の影が見えないだけで無くあまり社交的でもない先生が恋人を「猫」だなんて表現するとは到底思えない。

もしや、本当に彼の言う様に猫なのだろうか。再び、「……猫」と復唱する様に呟くと、先生が小さく頷いた。

「——ええ、とても気が強くて乱暴で、警戒心の強い子ですが」

彼の顔に浮かぶのは、今迄に見た事が無い程の優しい表情。相変わらず感情の読みづらい顔ではあるものの、誰かを想っているのは見て取れた。

「馬鹿みたいに律義で、人の心に繊細で、天使の様に可愛い猫です」

眼鏡の奥のバイオレットの瞳が、柔らかく細められる。

「自分より他人を優先してしまう事が玉に瑕きずですがね」

何を思い出したのか、彼が嬉しそうにくすりと笑みを漏らした。

やはり、先生は動物の猫の話をしているのではない。そんなに優しい笑みを漏らす様な相手なら、きっと娼婦たぐの類たぐでもないだろう。

ふと、先生の左手に視線を落とした。薬指は空で、指輪は嵌っていない。となる
と、恋人だろうか。

無意識的に、自身の左手の薬指を撫でる。

恋人や結婚、それ等の話を聞いたり考えたりすると、薬指に触れてしまう。それは最早癖となつてしまつていた。

指輪など無くとも、愛されている事には変わりない。今日だって、わざわざ仕事の休みを取つて検診に付き添つてくれているでは無いか。

そう分かつているのに、先生の優しい表情を見ていると何処か胸の奥がきゅっと締め付けられる様な感覚を覚えた。

「——先生が、そんな顔をするだなんて珍しい」

彼の細められた瞳を見つめ、ぼつりと呟く。

「先生にとつて、余程可愛い『猫』なのでしょう」
なるべく、穏やかに。

心の内の感情を覚られぬ様、彼に優しく微笑みかけた。

私の顔をまじまじと見つめた先生が、何やら考え込む様な表情を浮かべる。しかしそんな顔も束の間、普段通りの無表情を浮かべ私の言葉にコクリと頷いた。

「——妊娠と出産について、色々と書かれた本です。参考までに、読んでみてください」

診察が終わり、先生から差し出されたのは茶表紙の分厚い本。見るからに医学書だ。とてもじゃないが、妊婦に勧める本ではない様に見受けられる。

しかし、医者が勧めるものだ。もしかすると、医学書に見えるだけかもしれない。妊婦にとつて為になる事が書かれている書物かもしれない。

「これは医学書……ですか？」

そう願いを込めて問うと、私の希望を打ち壊す様に先生は何食わぬ顔で頷いた。「母親の食事や常日頃の行動がどう胎児に影響するのかわ、出産の手順、危険リスクや胎児の成長過程等、色々と細かく書かれていますよ。僕が今迄読んだ医学書の中で最も優れた本です。出来る事なら旦那様にも読んで頂きたい。妊娠生活は短い様で長い期間なので、是非隅から隅までしっかりと読んで頭に入れておいてください」

心做しかその瞳は輝いていて、普段より早口で饒舌だ。そんな先生に圧倒されつつ、「先生がそう言うのなら」と言つて差し出された本を受け取った。

本は想像していたよりもずつと重く、ズシリと片手に押し掛かる。その本を落と

さない様慌てて両手で持ち直し、胸に抱えた。

「次は旦那様とのカウンセリングです。呼んできて頂けますか」

ソファに座った先生がカルテに視線を落としながら、先程の優しい表情は何処へやら、少々不愛想に告げた。その言葉に頷き、「ありがとうございます」と一言声を掛けて診察室の扉を開く。

「——！」

ふわりと、視界の隅で揺れたオフホワイトのカーテン。それは診察室を出て左側に掛けられた物で、カーテンの奥は恐らく患者が立ち入る事の出来ない場所だ。

風や扉の開閉による振動が原因ではない、不自然な揺れ。それに、カーテンと床の間に出来た隙間に僅かな人影が見えた。

この診療所には、先生以外の医師は居なかつたと把握している。看護婦も居らず、先生一人で患者の手当や診察をしていて嘸さぞかし大変だろうと思っていた。

——患者ではない、来訪者だろうか。

この場に漂う、鼻腔を擦る甘い香水の香り。それは何処か覚えのある香り、カーテンの向こう側に居る人物が無性に気になった。

「——先生」

扉を開いたまま振り返り、カルテに視線を落とすままの彼に声を掛けた。先生は変わらざる不愛想で、カルテを見ながら「なんですか」と一言応える。

「お客様でも来ているんですか？」

なんと無しに尋ねた言葉。しかし、その言葉が先生の何かに触れたのか、彼が勢いよく顔を上げ私に視線を向けた。

その動作に驚きつつも、黙って彼の瞳を見つめ返す。

「——何故ですか？」

先生がその言葉を発したのは、数秒の間があった後。

「いえ、大した事では。ただ、甘い香水の香りがして……、それと、カーテンの向こう側に人影が見えたので」

「——……」

私を見つめるその顔は、いつも通りの無表情だ。しかし、ほんの一瞬眼鏡の奥の瞳に焦りが見えた様な気がした。

「——すみません、今はまだ匂いなどは少々きつい時期でしたね」

彼は不自然に私から顔を逸らし、再びカルテに視線を落とす。

「匂いは、大丈夫なのですが……ただ少し、気になった香りです……」

私の返答を聞いているのかいないのか、先生はそれ以上何かを言う事は無かった。先生と私は、あくまで主治医と患者でしか無く、踏み込んだ質問をしていい間柄では決してない。彼が口を噤んだという事は、これ以上聞いてはならない事だ。

先生から受け取った本を胸に抱え直し、ペコリと頭を下げて診察室を出た。扉を後ろ手で閉め、もう一度カーテンの方を見遣る。

そこにはもう人影は無く、甘い香水の香りすらも消えてしまっていた。ただ変哲の無いオフホワイトのカーテンが掛けられているだけだ。人の気配すらも感じられない。

先程感じた、甘い香り。それがただの香水の香りであればきつと何も思わなかっただろう。

しかし、私はその香りを知っていた。

誰かが身に着けていた香りだ。それも、私の身近な誰かが。

そつとカーテンの方に足を向け、ゆっくりと手を伸ばす。

先生に気付かかれてしまえば、怒られてしまう事間違いない。だが、今はその香りの正体を確かめたい一心だった。

——少し、覗くだけだ。誰の姿も見えなかったら諦めよう。

そう自身に言い聞かせ、指先をカーテンに触れさせた。

「——エル」

突如背後から聞こえた男性の声に、ドキリと鼓動が跳ね上がる。それは驚くなんて言葉では言い表せない程で、思わず胸に抱えていた本を落としそうになつてしまつた。

慌ててカーテンから手を離し、振り返る。

「何してるんだ、そんな所で」

振り返った先には、待合室で待つていた筈のセドリックが居た。壁に凭れ掛かり、彼は怪訝な視線を此方に向けている。

待合室と診察室は一枚の薄いカーテンで仕切られているだけで、大きな障害物は何も無い。その為、診察室の扉が開閉される音は待合室に筒抜けだった。

扉が開いたのにも関わらず、いつまでも待合室に戻つてこない私を疑問に思つたのだろう。わざわざ様子を見に来てくれた様だった。

「——ごめんなさい、何でもないわ。先生が、今度は貴方とカウンセリングがしたいって」

そう告げると、彼があからさまに嫌そうな表情を浮かべた。

彼は相変わらず、先生に苦手意識を持っているらしい。ふらふらとした足取りで此方に向かつてくるセドリックの背を撫で、「待合室で待っているわ」と一言告げた。

扉をノックし、診察室へ入っていくセドリックの姿を見届け、踵かかとを返し待合室へ向かう。

待合室は決して広くないが、家具が上手く設置されていてとても開放感がある場所だ。患者は私以外に居らず、しんと静まり返っている。

幾ら何度も足を運んだ診療所とはいえ、やはり病院の待合室に一人きりというのは少々心細い。早くセドリックが戻ってくることを願い、隅のソファを選び一人浅く腰掛けた。

胸に抱いた、茶表紙の本。それを膝の上に乗せ、そっと表紙を撫でた。

その本はとても分厚く、買い出し後のバスケットよりも重く感じる。一体どんな事が書かれているのだろうか、ハードカバーの表紙を捲り書かれている文章に目を遣った。

「……」

その本に書かれているのは、良くも悪くも先生が言った通りの内容だ。妊婦に必

要な栄養が取れる食材などが書かれている事はとても好ましく思うが、それ以外に大きな問題がある。

妊婦の不安を煽る様な出産の危険リスクや感染症、そして直視できない程写實的に描かれた胎児や子宮内の絵。

見ているだけでぐらりと眩暈がしてくる程だ。こんなものを、先生は世の中の妊婦に勧めているのだろうか。

そう考えると、今後の先生の評判が少し心配になった。

こんな本を読んでいたら、心を病んでしまいそうだ。セドリック以上に、出産に恐怖を抱いてしまうかもしれない。

この本は、今日中に先生に返してしまおう。そう思いながら、ぱたりと本を閉じた。

ふわふわと、夢と現実を行き交う朝。まだもう少し眠っていたい、あと少しだけ、なんて言い訳をしながら枕に顔を埋める。

眠っている時間よりも、こうして言い訳をしながら微睡む時間の方が心地良く感じてしまうのは何故だろうか。

早く起きて行動しなければならぬ朝に、こうしていつまでもベッドの中に居る。それに深い背徳感を抱いてしまうというのに、心地良さを感じてしまうだなんて不思議だ。

ふと、脳裏に浮かんだのは昔モーリスから聞いた雑学。背徳感や罪悪感、人に一種の快楽を与えるらしい。更には、睡眠は人間の三大欲求の一つでもある。

二度寝に心地良さを感じてしまうのは、それ等が関係しているからなのだろうか。低下した思考力でそんな事を考えながら、眩しく感じる陽の光から逃げる様に布団の中へと潜り込んだ。

そんな私の耳に届いたのは、陶器が擦れ合う音。その音に、今日はセドリックが

仕事の予定を入れず一日家に居てくれる日だという事を思い出した。

彼は今も変わらず、私の身体を気遣ってくれている。まるで壊れ物に触れる様に私を扱い、検診には必ず付き添い、バスケット以上に重い物は持たせてもらえない。過保護すぎると指摘をしても、セドリックは「自分がそうしたいから」と言つて全く聞く耳を持たなかった。

更には、私が一人にならずに済む様に少しでも仕事減らそうと、頑張つてスケジュールを調整してくれているらしい。それはこの前、家に様子を見に来てくれたマーシャから聞いた話ではあるが、マーシャ自身もセドリックがそこまで徹底している事には非常に驚いた様だった。今のセドリックならきつと良い父親になれると、マーシャも嬉しそうに言っていた。

それに、変わった事はそれだけでは無い。

今日の様に一日仕事の無い完全な休日といえ、彼は昼まで目を覚ます事は無く、一日をベッドの上で過ごしていた。だというのに、妊娠を告げてから彼は私よりも早く目を覚まし、私だけの為に紅茶を淹れてくれるようになった。

私が目を覚ますタイミングでカップに注がれた紅茶は、起き抜けの身体を温めるだけでなく、心迄をも癒してくれる。

そして彼は、英国人の鑑と言える程紅茶に詳しいマーシャを幼馴染に持っているからか、紅茶を淹れる事が人よりも上手かった。本人曰く、「これが普通」らしいが、彼が淹れてくれた紅茶は自身で淹れたものよりも香りが良く味も良い。

今日も、彼は私よりも早く目を覚まし、紅茶の支度をしてくれている様だ。二度寝をやめ、寝返りを打ちキッチンに立つ彼を眺める。

本当に、過去の彼からは想像できない姿だ。彼から与えられる深い愛情に、甘心地満たされていくのを感じながら一人笑みを零した。

「——おはよう、セドリック」

ゆつくりとベッドから身体を起こし、丁度紅茶をカップへ注ぎ終えた彼に声を掛ける。此方を向いた彼に微笑み掛けると、相変わらず表情の乏しい顔で「おはよう」と一言返ってきた。

そんな、普段と変わらない彼の姿。しかし、たった一つだけ普段と違う物があつた。

それは、彼の左手の薬指に嵌められたシルバーの指輪^{リング}。

昨晩までは無かったものだ。無意識的に、自身の左手を見遣る。

「——！」

自身の薬指には、同じくシルバーの指輪が嵌められていた。セドリックの指に光る指輪と同じものだ。

慌ててもう一度セドリックに視線を向けると、彼はやや複雑な表情を浮かべ「渡せてなかったから」と呟く様に言った。

湯気の立つティーカップを片手に歩み寄ってきた彼が、ベッドの隅に腰掛ける。そして徐に私の左手を掬い取り、指輪にキスを落とした。

「遅くなって、悪かった」

薬指に光る指輪。紛れも無い既婚者の証。

セドリックと繋がる、夫婦の証。

「——ううん、いいの。とっても、嬉しいわ……」

様々な角度から指輪を眺め、溢れる欣幸に溜息を漏らす。

意匠の少ないシンプルな指輪であり、何処かプロポーズと共に贈られたロケットペンダントを彷彿とさせるものだ。きっと、美しさだけを求めれば他にもっと優れたものがあるのだろう。

しかし私にとっては、彼が選んでくれたこの指輪が世界で最も美しいものだと思えた。

「大切にするわね。ありがとう、セドリック」

まだ夢の中に居るのではないかと錯覚するほど、胸の中が喜悦の色で染まっくてい

これは私が、ずっとずっと欲していたものだ。それこそ、他所よその女性の指に嵌る指輪に嫉妬してしまう程。

もう、空の薬指に触れては苦しい思いをしなくていい、嫉妬をしなくていい。そう思うと、涙が出る程の安堵感と幸福感に包まれた。

しかし、幸福を感じたのも束の間。

差し出されたティーカップ右手で受け取った隙に、何を思ったのか彼が躊躇ためちいなく私の薬指から指輪を抜き取った。

「ちよ、ちよっと待って！」

突然の事に理解が追いつかず、慌てて彼へと手を伸ばす。しかし、彼は指輪を握りしめたまま手を高く上げてしまい、私の手は届くことなく宙を彷徨さまよった。

「——確か、妊娠中は指輪をするべきじゃないってマクファーデンが言ってた」
淡々とした、彼の言葉。

言われてみれば確かに、先生がそんな事を言っていた気がする。しかし、呆気な

く訪れた指輪との別れを易々と受け入れる事は当然出来ず、身体と腕に力を籠めもう一度手を伸ばした。

一瞬このまま彼によじ登る事も考えたが、右手に持った紅茶が波打ち私を引き止める。

実力行使が出来ないのであれば仕方が無い。話し合いで返してもらおうしか無い様だ。

普段なら彼の淹れてくれた紅茶をベッドで堪能する所だが、今の私の頭の中は指輪の存在で埋め尽くされていた。

「少しだけ、少しだけなら平気よ！」

「医者言う事は聞くべきだ、って前に言っただけだったか」

「そ、それはそうだけど……、せめて、今日一日だけ！ 一日だけでいいわ。だから、お願い……」

この際、指輪を返してもらえないのなら手段は厭わない。

普段なら絶対にこんな事はしないであろうと思いつつ、過剰な愛をくれる今なら泣き落としも効くのではないかと思ひ、瞳を潤ませ上目遣いに彼を見つめる。

幼少期、自身の両親やモーリスに何かを強請る時にすらしなかった手段だ。羞恥

が込み上げるのを感じながらも、視線を泳がせる彼に僅かな手応えを感じた。しかし、私の髪をぐしやぐしやと乱した彼が強い口調で放ったのは「駄目だ」の一言。

結局彼は、私のどんな言葉にも耳を貸さず指輪を返してくれる事は無かった。

「少しくらいいいじゃない……、一日だけって言っているのに、本当に意地悪……」
「なんとでも言え」

指輪を返してもらえなかった事を嘆きながら、温度の下がった紅茶を啜る。

彼が淹れてくれた紅茶は相変わらず香りが良く、味も良い。甘みも丁度良く、ミルクの量も適量だ。しかし愁然しゆうぜんとしている今、その味を楽しむ事はとても出来なかった。

そんな私を尻目に、彼が徐にベッドから腰を上げる。その姿をなんと無しに目で追うと、彼がナイトテーブルの方へと手を伸ばした。その手の先には、彼が贈ってくれたロケットペンダントが。

まさか、ペンダントも妊婦には良くないなんて言い出し、それまで取り上げる気では無かるうか。そんな事が脳裏を過り、咄嗟に彼を止めようと肩を掴んだ。

しかし彼は私の制す手を物ともせず、ペンダントの金具を器用に片手で外しチェーンに指輪を通した。

瞬時にその行動の意味を理解する事が出来ず、カップを手を持ったままぼんやりと眺める。すると、彼が私を抱き寄せる様に首に腕を回し、そっとペンダントを私の胸元に下げた。

「出産が終わる迄、こうやって持ってる」

陽の光を反射し、輝くペンダントと指輪。長く使用しているからかロケットには小傷が出来、当時の様な輝きは失われているが、それでも指輪に負けず劣らず美しさを放っていた。

折角貰った指輪を、指輪として使えないのはとても残念に思う。その気持ちが変わる事は無い。

だがそれでも、こうしてペンダントと共に肌身離さず身に着けておく事が出来るのは嬉しく思えた。

指に嵌める事が出来る日は、愛おしい我が子に会える日。どちらもとても、待ち遠しい。

一人笑みを零すと、それに応える様に指輪とロケットが擦れ合い、胸元でチャリ、

と音を立てた。

「——今日は天気が良い。後で、少し散歩にでも行くか」

「そうね、たまには広場に行きたいわ。あの、大きな噴水がある広場へ」

休日は早朝から紅茶を淹れてくれて、更にはこうして私の事を考えてくれる。これ程素敵な人が、他に居るだろうか。

溢れる幸福感に微笑みかけると、彼が柔らかな表情を浮かべ私の頬を撫でた。

XLVII Precious family

十月十日とは、短い様で長い。それは、先生が前に言っていた事だ。

しかし私にとってこの期間は、表現しようが無い程に短いものだった。

先程迄の慌ただしさが嘘の様に、部屋は静まり返っている。響くのは、秒針の音のみ。

妊娠が分かったのは、ほんの数か月前。——の様に感じるが、実際は十カ月もの

期間が経つたのだ。改めて考えると、本当に妊娠期間とは短いのだと実感した。

他の妊婦よりもお腹が大きくならず、不安がる私に先生は「個人差がある」と言った。幾ら先生の言葉でもそれを盲信する事は出来ず、私は何度も繰り返し先生に訴え続けた。お腹の子の成長に問題があるのではないかと。

しかし生まれてきた子は、そんな不安を払拭する程に元気な赤子だった。

可愛い我が子に出会えた感動は、とても言葉にする事は出来ない。全ての事が幻の様に感じて、自然と涙が零れる程に嬉しかった。

だがそれと同時に、出産の痛みを言葉にする事も出来そうに無かった。

彼を初めて受け入れた初夜。あの日も、酷い痛みを感じた。叫びだしそうな程の痛みに、まるでナイフを差し込まれているかの様だとも思った。

当時はまだ、自身が妊娠をし、出産をする事など全く考えていなかったが、あの痛みを超えるものは存在しないと思っていた。しかし出産の痛みは、その痛みを遥かに超えるものだった。

痛みを超越し、それが苦しみに変わった時。『産みの苦しみ』とはこの事を言うのだと理解した。

そして愛おしい我が子の姿を見た時、その苦しみが全て吹き飛ぶ程の喜びを感じ

た。

出産をする前は、仮に自身に万が一の事があってもマーシャにならセドリックと子供を託せるなんて事を考えていたが、我が子の顔を見た瞬間その考えは一瞬で塗り替わった。

他でも無い自分が子の成長を目にし、セドリックと共に喜び大人になる姿を見届けたいと、そう強く願った。初めて、強く生きたいとも思った。

そして何よりも感動し、驚いた事は、自身が身籠った子が双子だという事だった。ベッドの上、自身の隣で眠るのは可愛い双子の女の子。

人形を二つ並べている様にも見えるそっくりな容姿に、不思議な感覚を抱く。

実は自身が身籠っている赤子が双子だという事は、随分と前から先生から告げられていた。故に想像通りの事ではあったのだが、過去に双子を見た事が無かった為半信半疑だった。

事実、出産を終え双子である娘を目の前にしても何処か信じ難い。生命とは不思議だ、と思いつつ娘二人を眺める。

「——お疲れ」

ゆっくりとベッドに近づき、私の手を取ったのは最愛の夫。私の髪を撫で、額に

キスを落とした彼に返事の意を籠め優しく微笑み掛ける。

彼は、私が陣痛を迎えてから出産を終えるまで、ずっと傍に付いていてくれた。陣痛が起こったのは0時前。それから不規則に起こる陣痛に苦しみ、そして助産婦を呼び慌ただしい時間を過ごした後、十六時過ぎに無事出産を終えた。その為、お互いまともな睡眠は一切取れていない。

私は陣痛や出産などがあり慌ただしく過ごしていた故に、睡眠がとれていない事に特別苦痛を感じていないが、ロングスリーパーの傾向があるセドリックにとつて睡眠がとれない時間は苦痛を伴うものであっただろう。しかしそれでも彼は、一睡もせず私に寄り添ってくれていた。

「——自分で産んだのが、まだ信じられない」

痛む身体を起こし、ベッドで眠る双子の姉——ルイを抱き上げた。

父であるセドリックと同じローズレッドの瞳を持った姉のルイと、母である私と同じイエローブラウンの瞳を持った妹のレイ。どちらも肌が透き通る様に白く、まだ産まれたばかりの赤子なのに美しい娘に育つだろうと確信を持つ。

「可愛い子ね」

胸に抱いたルイを眺め、ふふ、と笑みを漏らす。

身内みうちひい鬚ひいなどでは無く、本当に可愛い赤子だった。顔立ちが良いのは、セドリツクの血を引いたからかもしれない。

柔らかく触り心地の良いルイの頬を指先でなぞり、その小さな額にキスを落としたりした。

「貴方も抱いてあげて」

ベッドの傍で私とルイを眺めていたセドリツクに、囁く様に告げる。

しかしセドリツクは、私の言葉にやや複雑な表情を浮かべた。

母親は本能的なものか、教わらなくとも我が子の抱き方は直ぐに分かる。しかし、セドリツクは違うのだろう。ベッドで眠るレイの頬を指先で撫でたりはするものの中々抱き上げようとはしなかった。

そんなセドリツクに、近くで私達を見ていた助産婦が笑みを零した。タオルや器具の片付けを中断し、此方に歩み寄ってくる。

「赤ちゃんを抱くのは初めてかしら？」助産婦の問い掛けに、彼が曖昧に頷いた。

「大丈夫、何も怖い事は無いわ」

言つて、助産婦は易々とレイを抱き上げる。そして困惑の表情を浮かべるセドリツクに丁寧に抱き方を教え、彼の腕の中へとレイを渡した。

抱き方を教わっているとはいえ、彼の抱き方はぎこちない。父親とはこういうものなのだと理解しながらも、その強張った顔に思わず吹き出すように笑ってしまった。

「セドリック、顔が怖いわ」

腕の中のルイにあまり刺激を与えてはならない、と頭では分かっているが、笑いが止まらず肩が震える。「もつと笑って」

初めて娘を前にして、どの様な顔をすれば良いのかが分からないのだろう。複雑に表情をころころと変え、レイを腕に抱きながら私の隣に腰掛けたセドリックは見ていて何だか面白い。

彼の肩に凭れ掛かり、その腕に抱かれたレイの顔を覗き込む。

「——レイ」

ほそりと、彼が躊躇いながらも娘の名を呼んだ。

その瞬間、彼の声に反応する様にぱちりとレイの瞳が開く。

まだ何も映していない筈の瞳は確かにセドリックを捉えていて、焼き立てのパンの様にふつくらとした小さな手が彼の方へと伸ばされた。

「あら、レイはちゃんと貴方がパパだって分かっているのね」

彼に届くことなく彷徨う手は、愛らしくてつい握りたくなってしまう。それはセドリックも同じだったのか、彼が徐に伸ばされたレイの手を包み込んだ。

——自身が屋敷から抜け出し、メアリーやモーリス、エインズワース家を裏切った罪は大きい。

いつか、天罰となつて自身に降りかかるのでは無いかという不安は尽きなかった。しかし、最愛の夫と可愛い我が子達に囲まれる今、此処にあるのは確かな幸せだ。見えぬ未来を憂うよりも、此処に有る幸せを大切にしていこう。

そう、深く感懐を抱いた。

XLVIII anxiety

「エルちゃん……大丈夫かい……」

全身を刺す様な寒さに、空から落ちてくる寒雨が氷雪に変わり始める昼頃。玄関

扉を開いた先には、見知った顔が立っていた。

今の私を見れば、誰だつて深憂を抱くだろう。結った髪は乱れ、睡眠不足から顔色も悪く、娘に掴まれた所為で衣類には沢山の皺が付いてしまっている。決して、「大丈夫」などでは無い。

しかし、それを彼女——ライリーに訴えた所で仕方が無い。子育てが大変だという事ぐらい、出産前から分かり切っていた事だ。

ライリーの言葉に黙つて頷き、家の中へと彼女を招き入れた。

彼女は、セドリックと私の間に子供が出来た事を何よりも喜んでくれた一人だ。詳しい話は聞いていないが、どうやら彼女とセドリックは古い仲のようで、ライリーにとつてセドリックは息子や弟も同然らしい。それ故か、私の事も特別気に掛けられていた様だった。

そして子供が生まれてからは、毎日の様に店を空けて我が家に娘の顔を見に来ている。まるで親戚かのようにライリーは娘二人を過度に可愛がり、亭主に作らせたのである。木製の玩具おもちゃを毎日持つてきては嬉しそうに娘に与えていた。

しかし、子供が生まれて早三カ月。彼女の笑顔も、私の笑顔も次第に減つていっ

た。

姉であるルイは比較的大人しく、理由無く泣く事が殆ど無い為手が掛からない。だが、妹のレイは常に泣き叫び、非常に手の掛かる子供だった。

あまりに泣く頻度が高い為、何処か怪我をしていたり、病に侵されていたりするのでは無いかと不安に思い、診療所へ連れて行った位だ。

マクファーデン先生の適切な診察により、レイに怪我や病気が無い事は分かった。しかし、何故レイがこれ程までに泣くかの理由は分からなかった。

声が枯れるまで泣き叫び、そして泣き疲れては眠り、起きては再び泣き出す。家事もままならない生活に次第に疲れてしまい、私はこの三カ月間で大きく変わった。折角出産や子育ての為に頑張って四ポンド程体重を増やしたというのに、この三カ月で七ポンドも落ちた。当初の体重を遥かに下回ってしまい、街に出れば会う人に「酷く窶やつれた」と言われる様になってしまった。

「目の下の隈、酷いよ。うちは子供が出来なかつたから子育ての苦労は分からないが……、エルちゃんは子供を持つにはまだ早い年齢だろう。誰か、私以外の人を頼ってもいいんじゃないかい。生活も、特別厳しい訳でもないんだらう？」

「——毎日、ごめんなさい。迷惑を掛けてしまつて」

レイに手を焼いているうちに、次第に街に行く時間が作れなくなつてしまつていた。食材の買い出しも出来なければ、散歩で気分転換なんて事も出来ない。

それを知つたライリーが、少しでも私の負担を減らせるようにと毎日食材を買つて自宅に届けてくれる様になつた。

しかし、当然彼女にも自分の店があり、生活がある。今こうして彼女を頼つてしまつている事にも、深い罪悪感を抱いていた。

「いや、私の事は良いんだよ。毎日こうして、ルイちゃんやレイちゃんの顔が見れて幸せだからね。ただ、私はエルちゃんの事が心配で……」

「——私は大丈夫。ライリーさんがこうして毎日来てくれるだけで充分助かつているわ」

私の腕からレイを抱き上げたライリーにお礼を言い、彼女が持つてきてくれた、食材の詰められた紙袋を抱えた。

そしてふらふらとした足取りで、キッチンへと向かう。背後から「転ぶんじゃないよ、気を付けな」と声が飛んできたが、その言葉の直後にふらついてしまい壁に肩を強打してしまつた。両手が塞がっている為ズキズキと痛む肩を摩る事も出来ず、

辿り着いたキッチンにしゃがみ込み、届けて貰った食材を冷暗所に一つずつ片していく。

レイはライリーに抱かれると、比較的大人しくなる。最も大人しくなる相手はセドリックなのだが、何故だか私があやすと逆効果だとも言う様に激しく泣く事が多かった。

私は、駄目な母親なのでは無いか。レイに、母親として認めて貰えていないのではないか。自然と沸き上がるのはそんな不安。

食材の片づけが終わわり、空になった紙袋を畳みながら小さく溜息を吐いた。

自身の左手の薬指に嵌ったシルバーの指輪リングにそつと指を這わせ、この指輪が贈られた時の事を思い出す。

あの時は、私だけの為に作られたのだと実感する程、自身の指にぴったりだった。しかし今は、七ポンドも体重が落ちてしまったからか指から滑り降りてしまっような程に緩くなってしまっていた。

指の関節部分にひっかかり辛うじて落ちずに指に嵌っているが、これもいつ外れてしまうか分からない。

結婚記念日にセドリックがプレゼントしてくれた髪飾りの二の舞を踏まない様に、今から外してペンダントに通しておいた方が安全だろうか。しかし、泣いて暴れるレイが私のペンダントを掴んだことが過去に何度かあった為、中々その選択に至らない。

今はチェーンが切れてしまわぬ様、服の中にペンダントを隠しているが、チェーンが切れてしまえば指輪を失くしてしまう可能性だってある。

そう考えると、自身の指に嵌めておいた方が安全だとも思えた。

再び溜息を吐き、キッチンの台に手を付きながらゆっくり立ち上がる。

娘二人が眠る揺籠ゆりかごがあるリビングからは、ライリーがレイをあやす声が聞こえていた。その声にレイは気を良くしたのか、泣き止むだけで無く小さな笑い声までも上げている。

——やはり、私では駄目なのだ。

胸がズキリと痛むのを感じながら、ライリーが子供達を見て居てくれている間に夕飯の支度をしてしまおうと手早く台に食材を並べた。

セドリックは外へ仕事に出て、私達を養ってくれている。それに引き換え、私は何も出来ていない。家事をやると言っても、子育てを理由に街へ買い出しには行け

ておらず、更にはレイ一人あやす事も満足に出来ない。

ならせめて、料理位はセドリックが満足するものを出さなくてはならない。

元はと言えば、私がセドリックの家に無理に押し掛けてしまったからこうなってしまうのだ。

本来であれば、彼は今も一人自由に生きる事が出来ていた筈だ。しかし彼は無理を言う私の手を取り、あろう事か私の事を愛してくれた。そして私を妻にし、子供まで受け入れてくれている。

仕事だって、決して楽なものではないだろう。マーシャから良く愚痴を聞くため、ブローカー業の大変さは理解しているつもりだ。

そんな中、私と娘二人を文句一つ言わず養い、労いの言葉を掛けてくれる彼には感謝してもし足りない。

何故、彼はそこまでして私達を支え続けてくれているのだろう。

気分が落ち込んでいるからか、気が付けばそんな事ばかり考えてしまう。

彼が過去に美味しいと言ってくれたスープを作りながら、セドリックの事を思い浮かべる。

人との関りを得意とせず、更には女性嫌いであるセドリックが、私を娶^{めと}るだけで

なく子供まで受け入れてくれるだなんて、不思議で仕方ない。彼にとって、私はそれ程特別な人間だったのだろうか。

どこにでも居るような私が、彼にとっては特別。

元気で愛嬌があるマーシヤを幼馴染に持ちながら、私の手を取った。

それは何故か、何故私は彼の特別になれたのか。答えの出ない疑問ばかりが頭に浮かび、頭痛がしてくる。

「——エルちゃん」

背後から聞こえたライリーの声に、ふと我に返った。

慌てて振り返り、彼女へ視線を送る。

「——鍋、沸騰してるよ」

「えっ……ああ、ごめんなさい」

彼女の指摘通り、ずっと眺めていた箸の鍋はぐつぐつと沸騰していた。慌てて鍋を底から掻き混ぜ、僅かに焦げてしまったスープに溜息を吐く。

考え事をしながら料理をすると、碌な事が無い。レイをあやす事が出来ないのだから、せめて料理だけはしっかりとしなければ。そう思っても、頭に浮かぶのは彼の事ばかり。

「使用人の一人でも、雇ったらどうだい。見た感じ生活に不自由は無いようだし、チャーウーマン位なら雇えるだろう」

「……………」

ライリーの言葉に、鍋を見つめたまま黙って首を振る。

確かに、彼女の言う通り今のままでは私の身体がもたない。それに、ライリーにも迷惑が掛かってしまう。普通に考えれば、使用人を雇う方が賢明だろう。

しかし、それはこの家に「他人」の出入りを許す事になってしまう。セドリックは人との関りを好まないだけでなく、信用していない人物を家に上げる事を特別嫌がった。

ライリーやマーシャは彼にとって、家によっても問題無いと判断する位に信頼を置いている人物だった様で快く許してくれたが、使用人となれば話は別だろう。

それに、使用人を雇うとなれば、必然的に屋敷に居た頃を思い出してしまふ。

もう此処には、使用人を差別する父も母も居ない。使用人が暴言を吐かれる事も、暴力を振るわれる事も無い。だがそれでも、私が心を保てそうになかった。

「——じゃあ、セドリックが休みを取る事は？」

「彼にこれ以上迷惑を掛けたくないの」

「迷惑って……二人の子供だろう！ セドリックはエルちゃんの子であり、この子達の父親だよ！ だからもう少し頼ったって……」

ライリーが声を張り上げた事で、彼女の腕に抱かれていたレイが愚^ぐ図^ずる様な声を上げた。その声に気付き、ライリーが続きの言葉を飲み込む。

中途半端に途切れてしまった会話。それを終わらせてしまおうと、振り返り彼女に視線を投げた。

「——心配かけてしまつて、ごめんなさい。でも、大丈夫よ」

私の言葉に、何か反論をしようとしたのだろう。彼女が何やら複雑な表情を浮かべ口を開く。

しかし、彼女は何も言う事無く口を噤んだ。

季節は冬。

空を覆いつくすのは、今にも雨が降り出しそうな程の黒い雲。こんな日は、昼間から部屋に明かりを灯さなければならぬ。

しかし、外は昨晩の豪雪ごうせつの影響で一面銀世界。そのお陰で、明かりを灯さなくとも家の中が晴れの日の様に明るかった。

現時刻は十二時半。

小さなスプーンに掬い取ったスープを、子供用の椅子に座ってうつらうつらとする愛娘の口元に近づける。

子供の口の大きさに合わせて作られた銀のスプーンは、柄尻えじりに小さなミツバチの飾りが付けられていてとても愛らしく、娘二人のお気に入りだ。レイに至っては、このスプーンでなければ中々食事をしてくれない。

そんな愛娘は、今年の夏に一歳になった。

時の流れは恐ろしい程に早く、二人は大きな怪我も病も無く元気にすくすくと育った。

セドリックも不器用ながらも娘と接し、一年が経った今では良き父親となっていた。そして私はこの一年でゆっくりと精神と体重を戻し、今では誰も「甞れた」等と言わない程に回復をした。緩くなり、落ちてしまひそうだった指輪は、今はぴつたりと指に嵌っている。

不安など無い、幸せな暮らし。

寧ろ、これ程幸せで良いのだろうか、と不安に思ってしまう程だ。

ルイは眠そうな目をしながらも、お腹が空いているのかスプーンを近づける度に小さな口を目一杯に開けた。そして、口に含んだスープを小動物の様にもぐもぐと咀嚼する。そんな姿は、頬が緩んでしまう程に愛らしい。

子供達とこうして食事をする時間は、私にとって一番の癒しの時間。ルイは大人しく素直な為、食事の時間はとても穏やかなものだった。

——しかし、隣でレイにご飯を食べさせているセドリックはそうでは無い様だ。

「ああ、待て！ 皿に手を入れるな！ それは玩具おもちゃじゃない！」

「いや！」

「嫌じゃないだろ！ 大人しくしろ！」

「やあー！」

二人の騒がしい声が部屋に響く。

よくレイも、自身の妹と父親がこれ程までに騒いでいる隣で、うとうとと出来るものだ。そう思ってしまう程に、今日の二人は一段と騒がしい。

お気に入りのスプーンはレイの手によって遠くへ投げられ、振り上げられた腕は先程から何度もセドリックの肩を叩いている。

レイは少々——いやかなり落ち着きが無く、我儘で言う事を聞いてくれない事が多い。セドリック相手になるとその我儘は更に増す様で、彼とレイの食事はいつも騒がしかった。

毎回と言ってよい程にレイはご飯を素手で掴み、そしてセドリックに投げつけ、その都度彼が怒りながら器を取り上げる。彼のシャツは投げつけられたご飯で汚れ、今月だけでももう五枚もシャツを買い替えていた。

「大変そうねえ」

今日もレイと格闘しているセドリックを眺め、ぽつりと呟く。

「そう思うんだったら、たまには交代してくれ……」

「レイは貴方からのご飯しか食べないのよ」

「そんな訳無いだろ。お前相手だったらここ迄暴れねえよ」

疲れ切った顔をしているセドリックを見ると、あまりにおかしくて思わず笑ってしまふ。

彼がこれ程感情を表に出すだなんて、数年前迄は考えられなかった事だ。二人が産まれて、特にレイの相手をする様になってから彼はとても口数が増え、表情が豊かになった様に感じた。

苛立ちすらもあまり口にせず、表情にも出さなかつた彼が、今ではレイ相手に怒って騒いで、一日の終わりには疲れ果ててぐったりとしている。そんな彼の姿が見られて、今はただただ嬉しかった。

彼の言う通り、私を相手にするとレイはそれ程激しく暴れる事は無い。しかし、彼からのご飯しか食べない、というのはあながち間違いではなかつた。

暴れはしないものの、セドリックが居ない事に腹を立てて泣いて愚図り、器に盛ったご飯を半分も食べてくれない事が殆どだ。

赤子の頃のように一日を泣いて過ごす、という事は無くなり、食事時以外はレイと仲睦まじく遊んでいるが、それでもレイはセドリックに良く懐いていて今も変わらずべったりだった。

そんな彼女が何故毎度セドリック相手に「ご飯を投げつけ愚図っているのか」とうと、それはご飯の時間が終われば彼が直ぐに仕事に戻ってしまうからだだった。

だからきつと、わざと我儘を言つて彼を引き止めようとしているのだろう。そんな天邪鬼な一面を持つレイが愛らしく、私からすればとても微笑ましかった。

レイとのご飯は相変わらず進まず、彼は未だ昼食に手が付けられていない。このままでは、仕事の時間に間に合わなくなってしまうそうだ。

暫し考えた末、テーブルの隅に置かれた彼の昼食をそつと手元に寄せる。そしてスープをスプーンで掬い取り、徐に彼の口元に差し出した。

「——何のつもりだ」

差し出したスプーンを見遣り、彼があからさまに表情を歪める。

「レイが貴方からのご飯しか食べない様に、貴方も私からのご飯しか食べないのかしら、と思つて」

「押揄う様にそう告げると、彼がじとりと此方を睨み「馬鹿にしてんのか」と短く答えた。」

そんな私達のやり取りを見ていたレイの顔が、みるみるうちに歪んでいく。レイはまだ愛の伝え方が分からず、こんな風に泣いて怒って気を引く方法しか知らないのだ。

きつともう少し大きくなれば、素直に甘える方法も身に着けるだろう。しかし、子供なりにセドリックを引き止めようとしている姿はとても可愛らしく、愛おしい。「ほら、レイが泣きそう。早く食べて」

スプーンを揺らして、彼に早く食べる様に催促する。

こうしている間にも、機嫌を悪くしたレイが愚図る声を上げ始めていた。

「ああ、もう！」

苛立ちを露わにした彼が、差し出したスプーンに噛みついた。そしてスプーンを啜えたまま、再びレイに向き直る。

眉間に皺を寄せ、きつくセドリックを睨むレイの顔はセドリックそっくりだ。やはり、親子なのだと実感する。

機嫌が悪い我が子に手を焼く彼はあまりに哀れで、しかし堪らなくおかしくて、

止まらない笑いに肩を震わせた。

「笑ってんじやねえよ」

「ごめんなさい、つい」

二人を眺めていると、隣に座っていたルイが徐に私のブラウスを引つ張った。

ルイは口数が少なく、大人しい性格をしている為時々彼女の存在を忘れてしまう事があった。存在を忘れていても、彼女は怒る事も泣く事もしないから猶更だ。罪悪感を抱きながらも、ルイに視線を向ける。

するとルイは、「さっさとしろ」と言わんばかりの顔で口を開けた。

そこで、彼女のご飯がまだ途中だった事に気付く。

「ごめんね、ルイ」

彼女の頭を撫でながら、スープを掬ったスプーンを彼女に差し出した。

スープを口を含み、もぐもぐと動く頬はやはり小動物を彷彿とさせる。吸い寄せられる様にその頬を指先で突くと、ルイがセドリツクによく似た顔で眉間に皺を寄せた。

「——とりあえず、全部食わせたから仕事に戻る。後は任せた」

セドリックのシャツを掴んで離さないレイを抱き上げ、彼女の手をやんわりと掴む。

コートを着込み、名残惜しそうにする彼と軽いキスを交わして、家を出ていく彼にレイと共に手を振った。道の途中、何度も振り返る彼を見て頬を緩ませる。

此処には、子供達を見ていくれたり、家事を代わってくれたりする使用人は居ない。それ故に、二人の子供を同時に見ながら家事を熟さなくてはならない為苦労を感じてしまう事もある。

しかし、これも全て苦労ありきの幸せだろう。今は、そんな日々が何よりも愛おしかった。

丁度セドリックの背が見えなくなり、外の寒さに身震いをした頃合い。背後から、ぱたりと木の器が落ちる音が聞こえた。ルイが落としてしまったのだろうか。

まだ少し機嫌の悪いレイを抱き直し、慌てて玄関扉を閉めテーブルの方へ足を向けた。

少し開いた窓から、ひんやりとした風が流れ込む。その風にカーテンが弧を描き、ナイトテーブルに置いた燭台の灯りが揺れた。

元々物置だった二階。所々に蜘蛛の巣が張り、どこもかしこも埃まみれだった部屋は、セドリックとマーシャの手により改造され、今やとても居心地の良い子供部屋となった。

窓にはレース生地 of 白いカーテンを掛け、薄紅の壁紙を貼った内装は、幼く可憐な娘達にとてもよく似合う。

——二十一時を少し過ぎた頃合い。

子供の身長に合わせて作られたダブルベッドに、寄り添うように眠る娘二人。そんな二人の頭を時々撫でながら、囁く様に子守歌を歌う。

「——Cute cute my baby 《可愛い可愛い私の赤ちゃん》」

この歌は、昔良くメアリーが歌っていたものだ。お茶会の準備をしながら穏やか

な表情で口ずさむ彼女は、目を奪われる程美しかったのを覚えている。

「——I can meet again someday, I wish for that day 《いつかまた逢える、その日を願ってる》」

一度、何故その歌をいつも歌っているのかと尋ねた事があった。歌うのが好きだから、や、その歌を特別気に入っているから、と言われればそれまでだが、彼女がその歌を歌う時は決まって父から叱責されたり等何か嫌な事があった時だった。

それを尋ねられた彼女は「お仕事中に申し訳ありません」なんて謝りながらも、何処か嬉しそうに、だが何処か儂げに、幼少期実母が歌ってくれたものだと言わせた。てくれた。

「——I believe in that day 《その日を信じてる》」

メアリーにとつての、思い出の歌。聞いているうちに覚えてしまったその歌を、いつの間にか私は我が子にも歌って聞かせていた。

彼女にとつて大切な歌を、私が勝手に娘に聞かせているなんて知ったら、メアリーは一体なんと言うだろうか。

酷く憤るか、悲しむか。

何方も、違うだろう。

彼女の事だ、きつと笑顔で許してくれるに違いない。

「——So don't cry 《だから泣かないで》」

そう思い、笑みを零しながら最後のフレーズを口にした。

メアリーの事は、あの夢を見て以降忘れようとしていた。何故彼女を夢に見たのか、何故夢の中の彼女はあんな事を言ったのか、それは幾ら考えても分からなかった。

なら、もう彼女の事は忘れてしまおう。

メアリーは私の良き友人であり、今でも屋敷に置いてきてしまった事を後悔してしまう程大切であったが、それでも私にとってはこの生活には代えられなかった。思い出して苦しい思いをするくらいなら、悩むくらいならば、忘れてしまった方が良い。もう二度と、彼女と会う事は無いのだから。

娘達の寝顔を眺めながら、ふと溜息を吐く。

しかし、忘れようと思いつつもこの歌を歌ってしまうのも、歌う度にメアリーの事を思い出してしまうのも事実だった。

まるで彼女を想い、苦しみ続ける事が裏切りへの贖罪だとも言う様に、私の心

の中から彼女は消えない。どれだけ忘れようとしても、忘れられない。

「——エル」

突如背後から聞こえたセドリツクの声に、ぐるぐると回っていた思考が止まった。ずつと考え事をしてきたからだろうか。彼が二階に上がってきた事に、全く気が付かなかつた。

慌てて振り返り、彼に視線を投げる。

「二人とも、寝たか？」

普段よりずつと潜められた声に、ふふ、と笑みを零す。その問いに応える様に微笑み、そつと手招きをした。

足音を立てない様ゆつくりと歩み寄ってきた彼が、私の頭上から娘達の顔を覗き込む。

「ほら見て、可愛いでしょ？」

ベッドに並ぶ、天使の様に愛らしい寝顔。

二人は、今月の頭に四歳の誕生日を迎えた。顔つきもしっかりとしてきて、私達と同じ様な言葉を話し、性格の違いもはつきりと分かる様になってきた。それでも、

私達にとつてはまだ幼い子供だ。

些細な仕草や言動、こうした寝顔が何よりも愛らしくて、つつい子供扱いしては娘達に怒られてしまう。

「レイは、貴方によく似てる」

レイの目元に指先を触れさせ、瞳の下に二つ並んだ涙ボクロをなぞった。

セドリツクの目の下にも、同じホクロがある。こうしたものを見つけると、やはり親子なのだと実感が湧き胸の中に幸福感が広がった。

「——でも、レイはどちらかというとお前に似てるだろ」

私の背後から手を伸ばし、彼が徐にレイの頭を撫でた。

「そうねえ、貴方に似ているのはレイの方かしら」

レイはやや中性的な顔付きをしていて、瞳の色もありセドリツクに似ている部分が多い。

しかし、私と同じ口元に小さなホクロがあり、私の遺伝子を継いでいる事も分かった。

そこでふと、思い出したのは両親の事。

私は社交界で、「母であるシャーロットに似て美しい娘だ」等と言われてきた。だが、父に似ているとは一度も言われた事が無かった。

確かに、このアッシュゴールドの髪も、ふわりと柔らかな髪質も、母に似ているものだと思う。しかし、どれだけ考えてみても父に似ている所は思い浮かばなかった。

では、性格面はどうだっただろうか。

ルイは人見知りが激しく無口で、表情も乏しい。そこはセドリックに似たのだろう。そして反対のレイは、何処へ行っても愛想が良く、常に笑顔で感情の起伏がやや激しい子だった。どちらかと言えば、私に似たのだと思える。

私の性格は、父と母どちらに似たのだろう。私がまだ小さな頃は、母はよく笑う優しい人だったと記憶している。物心がついて、いつの間にか母は厳しい人になってしまったが、それでも母が見せてくれた笑顔は印象深く記憶に残っていた。

反対に、父はどんな性格をしていただろうか。小さな頃から父との関りが薄かった為、父がどのような人だったか記憶に残っていない。

自身の娘達を見ていけば両親である私達によく似ていると思えるのに、自身が両親のどちらかに似ていたか、というのは幾ら考えても分からない。

セドリックは、両親の何方に似ていたのだろう。彼は、それを覚えているだろうか。何故だかそれが猛烈に気になり、振り返り彼の顔を見上げた。

「——ねえセドリック、貴方はご両親の何方に似ていたの？」

昔、マーシヤに二人の両親の事を尋ねて、「知らなくて良い事」だと言われた事があつた。その時の彼女の瞳は鋭く、やけに怖かつた事を覚えてゐる。故に、セドリックに両親の話題を出すべきでは無いかと思量し、今迄ずっとその話には触れな
いできた。しかし、娘を持った今なら少し位許されるのでは無いか。

そう思い、やや躊躇いながらもその問いを口にした。

「……」

彼は、娘達の寝顔を見つめたまま何も言わない。その表情は変わらないが、穏やかな空気にピリ、と緊張感が走つた様な気がした。

やはり、聞くべきでは無かつた。謝るべきだろうか、それとも、このまま黙つて
いるべきだろうか。

そう頭を悩ませていると、彼がぼんと私の頭を撫でた。

「——下で話そう。折角寝かしつけたのに、二人が起きたら困るだろ」

*

両手で包み込めばすっぽり収まってしまふ程の、小さなマグカップ。そこに注がれているのは彼が用意してくれたホットミルク。

両の掌にミルクの温かさを感じながら、自身の向かいに座った彼の顔を上目遣いに覗き見る。

一階に降りてきて、彼は一度も言葉を発していない。

両親の事を尋ねてから、彼はずっと何かを考えこむ様な顔をしていた。

興味半分、後悔半分といった所だろうか。やはり、大切な人の両親にはかんきょう感興を惹かれてしまうものだ。

どうしても彼の両親への興味を拭えず、彼に謝罪をする事も質問の訂正をする事も出来なかった。ここで誤魔化してしまえば、もう二度と彼の両親の事を知る事は出来ないと思ったからだ。

しかし彼に同じ問いをされたとしたら、私は上手く答えられそうに無かった。

マグカップに口を付け、ちびちびとホットミルクを飲みながらどうしたものかと考える。

「——母からよく、父に似ていると言われていた」

長い沈黙。それを破ったのは、彼の方だった。

「お父様に？」

思わずそう問うと、彼が小さく頷いた。

「もう随分と昔の事だからよく覚えていないが。父に似て、綺麗な顔立ちをしていると母は良く言っていた。だが、俺は子供ながらに母に似ているんじゃないかと思つてた。母は長い黒髪に赤い瞳をしていたから、容姿だけで言うなら母に似ていたんじゃないかと」

「そう……」

「黒髪なのは父も同じだったが、父は青い瞳をしていた。父は表情が乏しく無口だったからか、その目がやけに冷たく見えて嫌いだつた。でも、今になってはどつちに似ているかは分からない。瞳の下に、二つ並んだホクロがあるだろ。レイにもあるものだが、父にも同じホクロがあつた。鏡を見れば、父がそこに立っている様な気さえしてくる」

彼はカップに注がれたミルクを飲みながら、淡々と告げる。その声からは、感情が一切伝わってこない。

「セドリックは、お母様に似ている方が良かった？」

私の問いに、彼が一瞬ぴたりと動きを止めた。

彼の瞳の奥に、言葉にし難い感情が滲む。それは愁然しゅうぜんにも、厭悪えんおにも思える何かだった。

しかし彼は、それを誤魔化す様にぎこちなく頬を緩める。

「どうだろうな」

彼の視線はカップに落ちたまま。瞳の奥の、その言い難い感情も消えていない。余計な事を、聞いてしまったかもしれない。彼が両親の話をしてくれただけでも充分だったのに、詮索するような事をしてしまった事に罪悪感を抱く。

「——そういえば、あの歌」

またもや沈黙を裂く様に、彼が口を開いた。

無理矢理話題を変えられた事を感じ取りながらも、顔を上げる。

「何か、思い入れのある歌なのか？」

彼の、何気ない問い。その問いに、胸に奥がちり、と痛んだ。

あの歌とは、娘に聞かせていた歌の事だろう。

思い入れがあるか無いか、それは私にも分からない。ただ、メアリーが良く歌っ

ていた。それをいつの間にか覚えてしまい、無意識的に娘に歌い聞かせていた。それだけだ。

しかし、彼がそれを聞いたらどう思うだろうか。

もう屋敷を出て五年以上が経つと言うのに、未だに侍女であったメアリーの事を想っているなんて、きつと私がセドリツクの立場であれば屋敷を恋しく思っているのでは無いか、などと思ってしまう筈だ。

「——昔、ね……何処かで聞いた事があって、それがたまたま印象に残っていて……」

しかし、誤魔化す言葉など咄嗟に浮かぶ訳が無い。

彼にも直ぐ勘付かれてしまいそうだと思いつながら、彼の視線から逃れる様にカッパに口を付けた。

「そうだったのか。よくあれを歌ってるから、特別何か思い入れがあったのかと。例えば、お前の母親が同じ様に歌って聞かせたとか……」

彼の言葉に、今度は別の意味で胸が痛む。

母が私に、子守歌を歌ってくれた事は無かった。眠れない夜に傍に居てくれたのは母でも無く、父でも無く、モーリスだ。彼が子守歌を歌う事は無かったが、眠れ

ない日には時々話を聞かせてくれた。

普通なら、子供には母親が寄り添うものなのだろう。私もそうだ。娘達が眠りにつくときは、必ず眠るまで傍に寄り添っている。

しかし母は、私に寄り添ってくれる事は一度だって無かった。

「——そういう、ものは……」

何か返事をしなければと思うものの、胸の痛みに言葉が詰まる。

あまり、彼に心配を掛けたくない。聞かなければ良かったと、後悔をさせたくない。だから出来る限り笑顔で、彼の言葉を自然に誤魔化さなければならぬ。

しかし、何も言葉は浮かばず、考えれば考える程頭の中はぐちゃぐちゃと絡まっていく様だった。

「——まま」

突如、背後から小さな声が聞こえた。その声に驚き、心音が早くなるのを感じながら彼と共に声の方向へと視線を投げる。

「——ルイ？ どうしたの、起きちゃった？」

自身に声を掛けた人物。それは、先程寝かした筈の娘だった。

内心、この緊張感の漂う空気から逃れられた事にほっとしながらも、椅子から腰

を上げルイに歩み寄る。そして腰を屈めてルイの顔を覗き込むと、彼女が私の顔をじっと見つめた。

「まま、どこかいたいなの？」

ぼつりと、彼女が相変わらずの無表情で告げる。

怖がる様子は無く、かといって私を心配している素振りも無く、ただ淡々と告げるその彼女は、何処か出逢ったばかりのセドリックを彷彿とさせる顔をしていた。心中をも見透かしてしまいそうな、その宝石の様に澄んだ瞳に思わず顔を反らす。

「どうしてそう思うの？」

僅かに声を上擦らせながらも、彼女に問う。

するとルイは僅かに間を置いて、黙って首を横に振った。

「なんでもない」

子供は、良くも悪くも周りを見ている。子供だからといって、悔る事は出来ない。

「ママと一緒に二階へ行きましょう。眠る迄、お話でもしてあげるわ」

早々に会話を切り上げ、ルイを抱き上げた。四歳にもなると、軽々抱き上げる事が出来なくなってくる。子供の成長を感じながらも、振り返ってセドリックに微笑みかけた。

「二階に、行ってくるわね」

何故、子守歌を歌う、では無く、敢えてお話をすると云ったのかは自分でも分らない。

しかし、胸の中に残った痛みは暫く消えそうになかった。

彼は私の言葉に、何か言いたげな顔をしながらも頷き顔を逸らした。

不用意に、過去の話をすべきではない。私も彼も、きつと人には言い難い過去を持っている。

彼の事なら何でも知りたいと思う反面、それに触れてはいけないのだと本能的に感じ取った。

「まま」

階段を上っている途中、不意にルイが私の頬に触れた。

「ぱぱとけんか、したの？」

彼女の無表情は変わらない。

セドリック以上に感情が読み取れないのでは無いか等と誤ってしまふ程だ。

ルイはセドリックと違って、可愛い女の子である。女の子は、やはり愛想が良い

方が世渡りがし易い。彼女の性格や個性を潰してしまう事はしたくないが、将来の事を考えると少々不安だった。

「喧嘩なんてしていないわ。どうして？」

彼女の髪を撫でながら問うと、ルイがううんと小さく唸った。

「ばばが、こわいかお、してたから」

「怖い顔……？」

最後にセドリックを見た時、確かに普段と少し様子が違う様子にも見えたが、彼女が言う様な怖い顔はしていなかったように思える。しかし彼女は先程、私にも何処か痛いのかと尋ねた。

「どうやら、まだ小さな彼女の瞳は私達大人の目に見えるもの以上のものを映してしまいうらしい。」

「そんな事無いわ。大丈夫よ」

そう言つて、安心させる様に微笑む。

彼と、あの話の続きをする事は今後無いだろう。私も彼も、心を痛めるだけだ。それに、娘に余計な心配を与えてはいけない。

それは親としてでもあり、大人としての義務だとも思えた。

LI The thundering night

轟々と吹き荒れる狂風。窓を叩く豪雨。

これは夢か、それとも現実か。ふわふわと意識が浮遊する、心地良いとも不快だとも言えない感覚と共に、瞳を開く。

未だ意識がはつきりしない中、視界に入ったのは普段通りのリビング。それと、暴風雨の所為で揺れるカーテン。

今の時期——九月中旬には珍しくない小夜嵐だ。さよあらし

やけに、懐かしい夢を見ていた。此処に来てまだ日が浅かった頃経験した、嵐の晩の夢。

何故突然あの晩を夢に見たのかと疑問を抱いたが、吹き荒れる暴風雨に納得がいった。全てはそれ等が見せたものだったのだ。

お気に入りのブランケットを掻き抱き、先程見た夢をぼんやりと思い返す。

——あれは確か、六月の冒頭の事だったと記憶している。

丁度、日が暮れた頃合いだった。六月にしては珍しい嵐に、私は不安を抱きなが

らセドリツクの帰りを待つていた。

その時、一人考えていたのは幼少期の事。父にチェストに閉じ込められてしまった、あの晩の事だ。それは私にトラウマを植え付けるには十分すぎるものであり、克服をした今でもあの時の事を思い出せば少々息苦しさを感じる程であった。

確か、それがきっかけだった筈だ。

部屋の灯りが思わぬ事故で落ちてしまい、パニック状態となった私は「一人にしないで」なんて言つて彼に縋りついた。——いや、押し倒した、の方が正しいだろうか。

あの時、私は何を思つていたのだったか。ただ覚えているのは、まるで童話の王子様の様に整つた顔と、深く絡み合つた視線。そして、張り裂けそうな程の鼓動の高鳴り。

明確に、彼が欲しいと思つた瞬間だった。彼に愛されたい感情を必死に抑え込み、今の関係を壊さないように努めていた私が、罪を背負つてでも良いと思う程に彼を渴望した。

そしてその時、彼は私の気持ちに応えてくれる様に「傍に居る」と言つてくれた。今なら、彼はその時には既に私を愛してくれていたのだと分かる。しかし当時は

その言葉に翻弄^{まんろう}され、期待をしても良いのか、彼を望んでも良いのかと、心を、頭を悩ませた。

それからの記憶は朧^{おぼろ}げであるが、唇を合わせようとどちらからともなく顔を近づけた。伝わる彼の体温に、吐息が触れ合う程の距離。

瞳を閉じれば、あの時の感覚が蘇る。

だが、結局落雷に邪魔をされ彼と口付けを交わす事は出来なかつた。

あの時彼と口付けを交わしていたとしたら、今頃違った未来を見ていたのだろうか。

もっと早く結ばれる事が出来ていたかもしれないし、歪んだ関係を築いていた可能性だつてある。

全ては、神のみぞ知る、だ。しかしそれでも、今より幸せな未来は無かつただろう。彼と結ばれるまでのあの間だつて、きつと大事な意味があつた筈だ。

今はこの道を選べてよかつたと、心からそう思っていた。

——嵐は気持ちいを、不安定にさせる。この騒音が原因だろうか。因果関係は分からないが、酷い孤独感を煽るものだ。

昔の夢を見てしまった事も相まって、索漠^{さくばく}とした気持ちに苛^{さい}まれる。彼はきつと、

今も眠っているだろう。彼は眠りが深く、この程度の嵐では目を覚まさない筈だ。彼に触れれば、少しは満たされるだろうか。そんな事を思い、ごろりと寝返りを打った。

「……………」

彼が居た筈のベッドは空っぽ。手探りで探しても、何処にも彼の姿はない。

自身の隣から彼が居なくなってしまった事に、全く気が付かなかった。索漠としているからか、それともこの嵐の中だからか。孤独感が頂点に達し、慌てて起き上がった。

ブランケットを抱くだけでは物足りず、少しでも安心感を求めて頭から被り辺りを見渡す。

遠目に見える、リビングのテーブル。眠る前には確かにテーブルの上に置かれていた燭台しゆくたいが、今は何処にも見当たらない。

その燭台は、大抵二階の子供部屋へ行く時に使用する。それが無くなっていると
いう事は、セドリックは今子供達の部屋に居るとい事だ。

この嵐の中、娘二人は嘸さそかし不安だっただろう。レイは特に雷嫌い、少しでも空が光ろうものなら直ぐに泣きだしてしまう。

きつとそんな二人を案じて、彼は二階まで様子を見に行つたのだ。

今頃、レイは雷や暴風雨を怖がり泣いているかもしれない。私も様子を見に行くべきだろうか。はつきりとしなない頭で、ぼんやりと考える。

そんな時、階段の方から僅かな物音がした。

天候の所為で掻き消されてしまいそうではあるが、その物音は確かに誰かが階段を降りてくる音だ。階段の方へと視線を向けると、オレンジ色の光がゆらゆらと揺れていた。

「——セドリック？」

階段を降り、リビングへ戻ってきたのは私が探していた人物。想像していた通り、彼は二階の子供部屋へ行つていた様だ。

私の声に気付いた彼が、一言「起きてたのか」と呟く。

「二人とも、大丈夫だった？」そう声を掛けると、セドリックがやや複雑な表情を浮かべた。その顔に、思わず首を傾げる。

「——ルイに、絵本を読んで欲しいとせがまれた」

「ルイに？ レイじゃなくって？」彼が、複雑な表情を浮かべたまま頷く。

ゆつたりとした足取りで此方に歩み寄ってきた彼が、火の灯る燭台をナイトテー

ブルに置いた。そしてブランケット越しに私の頭を撫で、隣に腰掛ける。

ルイが、絵本を読んで欲しいとせがむだなんて珍しい。——いや、珍しいなんてものでは無いだろう。彼女がそれをせがむのは初めてでは無いだろうか。

ルイは小さな頃から本が好きで、気が付けば一人絵本を眺めている事が多い子供だった。まだ言葉もままならない小さな頃は、それに気付いた私やセドリックが読み聞かせたり等をしていたが、ある程度の年齢になってからというもの、それを極端に嫌がる様になった。

私もセドリックも文字の読み書きは充分に出来る上、読み聞かせも決して下手な部類では無い筈だ。しかし、彼女は「一人で読めるから」と言つて読み聞かせるところか、私達が絵本に触れる事すら厭悪えんおした。

その理由は、未だ分からないまま。一度それを尋ねた事があつたが、彼女は口を噤んでしまい暫く口を利用してくれなくなつてしまった。

そんな彼女が、セドリックに絵本を読んで欲しいとせがむだなんて。まるで想像が出来ない。

やはり、起きた時点で私も二階に行けば良かったかもしれない。そんな彼女の姿を見てみたいと、興趣きょうそをそそられる。

しかし、すぐ隣からする彼の甘い香りに、娘への興味さえも徐々に抜け落ちて行つた。

沸き上がる様に思い出されるのは、先程見たあの夢。隣の彼に甘える様に擦り寄り、その腕に自らの腕を絡める。

すると、彼が徐おもむろにブランケットを私の身体に巻き付けた。その行動の意図が分からず疑問を抱くが、何処かぎこちなく逸らされた顔に凡おおよその察しが付く。

「——夢を、見ていたの。此処に来て、まだ間もない頃の、嵐の夜の夢」

「嵐の夜……」

「貴方は覚えていない？」

彼が巻き付けたブランケットを肩から落とす、彼に凭れ掛かった。

そして誘惑でもするかのように「初めてキスしようとした時の事」と囁く。

私が身に着けているネグリジェは非常に生地が薄く、よく見なくとも肌が透けているのが分かる。胸元もはだけていて、更には下着を身に着けていない為目のやり場に困ってしまったのだらう。

そんな彼が可愛らしく、愛おしく、あの夢を見た事も相まってか彼に触れたいなんて欲求が沸き上がる。

「あの時、なんて明かりが消えたんだ」相変わらずその視線は定まらず、私の髪を撫でる手もぎこちない。

きつと彼は平常心を装っているつもりなのだろうが、私にはその動揺が見て取れた。そんな彼を見ると、ついつい頬が緩んでしまう。

「——それが、よく思い出せないの。カーテンの裾が窓枠に挟まっていた事は覚えていたのだけど……」

「大事な事は覚えてないんだな」

「それって、そんなに大事な事かしら」ふふ、と笑みを零すと、彼も釣られて口元を緩めた。

ゆるりと絡めた腕を解き、腰を上げる。そしてそつと燭台の火に息を吹きかけ、灯りを消した。

暗闇に包まれた部屋は、「あの夜」と同じ。

——普段なら、絶対にこんな事は出来ない。全ては、あの夢と嵐の所為だ。

そう心の中で言い訳を重ねながら、目が慣れぬ中彼に近づいた。

「——ねえ」手探りで彼を見つけ、当時の様にその膝の上に跨またがりた。

「暗い所が苦手なの」

嵐の音に掻き消されぬ様彼の耳に口元を近づけ、甘く囁いた。

「一人は、嫌なの」

徐々に暗闇に目が慣れ、彼の整った顔が瞳に映る。その美しさは、何年経っても変わる事はない。寧ろ、その美しさは日に日に増している様にすら思える。

「——一人に、しないで」あの日と同じ言葉。同じ、距離。

まるで、あの夜に戻ったかのようなようだ。そんな錯覚に、理性が溶けていくのを感じる。

「——エル」熱の籠った声で、彼が私の名を呼んだ。

私の項うなじに滑る彼の手から、甘い熱が伝わる。引き寄せられるままに、こつりと額を合わせた。

「——俺が、傍に居るから」彼が告げた言葉も、当時と同じ。

あの晩、苦しく感じる程彼に心酔しんすいしきっていた。

その顔も、声も、瞳も、身体も、体内を流れる血液さえも、全てが狂おしく、愛おしかった。彼が、何よりも欲しかった。

それは、今も同じだ。手に入った今でもまだ足りない。こんなに近くに居るのに、長い間同じ時間を過ごしたのに、それでもまだ足りない。

恋や愛は精神病、だなんて良く言ったものだ。

彼への狂おしいこの愛情が、病でないと言うならなんというのか。

「だからお前も——」彼が続けて、言葉を漏らす。

本当なら、その言葉をしっかりと聞き終えたかった。しかし欲望が限界を達し、その言葉を飲み込むように彼の唇に自らの唇を押し当てる。

お互いの唇を食み、舌を絡め、貪る様に、口付けを何度も繰り返す。

あの日の様に、まるで私達の行為を妨害するかの様な迅雷も、稲妻も、今では情欲の助長にしかならない。寧ろ、娘二人への配慮が省ける為好都合だ。

私の身体に触れる彼の手つきは官能的であり、徐々に体温が上がりつついく。

あの日の私が、今では愛した彼とこんな淫靡な時間を過ごしているなんて知ったらどう思うだろうか。そう考えるだけで、ぞくぞくと快感が迸り気分が高揚する。

「——ねえ、セドリック」

離れた唇で強請るように名前を呼ぶと、彼の指先が私の頬をなぞった。そして次の瞬間、彼に強く引き寄せられベッドに押し倒される。

「——あの子達には、気付かれないようにね」

そう笑って告げれば、口元を僅かに緩めた彼が「それはお前次第だな」と囁いた。

*

「——んっ、ん、あ」

彼が強引に私の脚を開かせ、脚の間に顔を埋める。そして愛液に塗れた秘部に這わされるのは、彼の熱い舌。

無意識的に伸ばした手は宙を彷徨い、彼の艶やかな髪に触れた。こんな状況でも、触り心地が良いと感じてしまう程の髪質だ。羨ましいとすら思ってしまう。しかし、ずっと触っていたい、という意思半面、自身を襲うのは気が触れそうな快楽。それに僅かな恐怖を感じ、彼の舌から逃れようと腰を引いた。

だが彼の手が逃すまいと私の腰を強く掴み、逃れる事は出来ずただ与えられる快楽に嬌声をあげる。

「だ、め……セドリツク……っ」

彼が嘯み付いた先は、性感帯の中でも特に感度の強いしこり。弄ぶ様に舌の上で転がした後、じゆる、と音を立てしこりに吸い付いた。

沸き立つ快楽に、思わず背を反らす。

このままでは口淫だけで果ててしまいそうだ。再び腰を引き、彼の額を押す。し

かし彼は、そんな私を嘲り笑う様に更に強くしこりに吸い付き、舌先で激しく刺激した。

「あ、あつ、もう、だめっ……」

その快樂に限界を超え、シートを蹴り一際高い声を上げながら絶頂を迎える。

身体を震わせ、息を切らせながらりとベッドに身を預けると、漸く彼が顔を上げた。

「感じやすいのは久々だからか？ それとも、この天候の所為か？」

まるで悪戯をする子供の様な顔で、彼が唇や指に付着した愛液を舐め取りながら問う。

「——……」その問いに答えられず、顔に熱が溜まるのを感じながらきつく睨みつけると、彼が珍しく声を漏らし笑った。

彼の言う通り、こうして触れ合うのは大分久々だ。

眠る前にベッドの中で口付けを交わし、見つめ合う時間はあったが、娘が出来てからというものこうして交わる事は殆ど無かった。それ故か、今迄より深く快樂を感じている様に思える。

しかし、この天候の所為とも言えるだろう。

当時の私は、情交は疎か男性との交際がどの様なものかもはつきりと分かっていたなかつた。言葉や存在こそ知っているものの、何をもって交際、何をすれば情交、というのには知らなかつたと思う。そんな私が、彼に触れたい、彼が欲しいと明確に感じたのが「あの夜」だ。

その所為で、「嵐」というだけで何処か淫靡いんぴに感じていた。

そして時間は掛かれど彼と結ばれ、心も身体も無垢だった私が、いつの間にか愛欲に溺れ彼と何度も身体を重ねるようになった。その末に子供を授かり幸せな家庭を築いているのだが、それでも彼への愛情が変わる事は無い。

よく、子を授かつた事がきつかけで夫への愛情の形が変わる、なんて言うだろう。中には、夫との情交を受け付けなくなってしまう女性もいるのだとか。

しかし私は、今でも彼に触れたい、触れて欲しいと思う上に、飽きる程繰り返し情交にもまるで恋人を相手にしている様に鼓動を高鳴らせていた。

勿論彼を、娘の父親として、家族としても愛している。それは事実だ。だがそれでも、私にとって彼はかけがえのない一人の男性であった。

娘を持つ母親だと言うのに、いつまでもこんな事ばかり考えているだなんて愚かだろうか。淫奔いんぱうな女だろうか。

果てた後というのは、色々と余計な事を考えやすい。愛欲に溺れているのか、不安に苛さいなまれているのか分からなくなり、溜息を漏らし手で顔を覆った。

「——！」

そんな私の気持ちを知ってか知らずか、彼の指先が秘部をなぞる。そして蜜壺の入り口を擦くすくする様に弄もよほったと思つたら、躊躇ためらいも無く一気に蜜壺の奥迄指を差し込んだ。

「考え事か」彼の表情はやや複雑で、怒っている様にも拗ねている様にも見える。「そういう、訳じや……」彼の顔から視線を逸らし曖昧に答えると、彼が抉る様に強く蜜壺の中を擦った。突然与えられた快樂に、思考が追い付く前に声が押し出され腰が僅かに浮き上がる。

「俺とのセックスはもう飽きたか？」

「ち、ちがっ……！ そんなんじゃないわ！」

否定をする度に、ぐりぐりと奥を擦られ身体が震える。弄られているのは、私が蜜壺の中で最も快樂を得る場所。

彼はそれを、分かつてやっているのだ。いやいやをする様に首を左右に振り、彼の肩を叩いた。

「最中に考え事をするなんて、飽きたって言われてるみたいで傷付く」

「ごめ……なき、……っん、あ……！」

奥を擦る指が、徐々に激しくなっていく。差し込まれた指二本はどちらも違う動きをしていて、焦らす様に好い場所を掠める為話に集中が出来ない。

「否定、出来ないんだな」

「ちが、ちがう、の……あ、あっ」

先程果てた事もあって、感度は普段以上に上がっている。このままでは、また直ぐに果ててしまうだろう。

あまりにも繰り返し絶頂を迎えると、翌日に響いてしまうだけでなく、声を抑えられなくなってしまう為痴態を晒してしまう事になる。はしたない姿を見せる事だけは避けたい。

しかしそんな願いも虚しく、激しく動かされる指に呆気なく果ててしまった。充分に潤った蜜壺に差し込まれた指を、弄ぶ様に出し入れするその動きにすら快感を得てしまつて喉奥から声が溢れる。

「違つて、言つてるのに……」

弱々しく彼の肩を叩くと、「何が違つんだ」と短く返つてきた。

「私、貴方の事愛してるの」

「愛してないと困る」

「そうじゃ、なくて……。貴方は大切な家族だけど、それ以上に深く愛してる……
というのかしら。もし万が一家族に何かがあった時、私娘を差し置いて貴方を選ん
でしまいそうで怖い……。…」

「……………」

彼の指先が、愛でる様に私の頬を撫でる。私を見つめる瞳は優しく、その顔から
は先程の様な悪戯な表情は消えていた。

「勿論、娘は大事よ。自分の命に変えてでも守りたいと思う。でも、それでも貴
方の姿を一番に探してしまうの。最低な母親ね」

私の頬に触れる彼の手を握り、その掌にそっと頬擦りをした。

きつと、娘が双子ではなかったら別の事を思っていたかもしれない。何があつて
も、私たち二人で守らねばならないと、そう思っていたかもしれない。

しかし、ルイにはレイがいて、レイにはルイがいる。まだ五歳の幼い娘だが、二
人の間には目に見えてわかる特別な絆があった。

まるで私達など居なくても、お互いさえ居ればそれでいいとでも言うような、強

い絆が。

だから、こんな事を思ってしまうのかもしれない。私にはセドリックが居ればいい、だなんて。

これは、ただの言い訳だろうか。責任逃れだろうか。母親になって五年も経つのに、これ程簡単な事が分からない。答えが出ない。

しかし彼は、そんな私を咎める事はしなかった。

「——最低じゃない。俺だって、お前が言うその状況になったらきつとお前を一番に探すと思う」彼がシーツと背の間に腕を差し込み、私をきつく抱き締めた。

少々苦しく感じるその腕の強さが、今は心地良い。

「そうならないように、俺達で二人を守っていこう」

囁く声が優しく、耳に溶けていく。頷きながら彼の背に腕を回すと、彼がもう一度私を強く抱き締めた。

それからというもの、彼はまるで私を安心させるかの様に強く、優しく抱いてくれた。

相変わらず、外では激しい風が吹き荒れている。きつと、明日の朝にも残るだろ

う。もしかすると、レイが怖がって泣いてしまふかもしれない。

泣き出したレイはどうにも厄介で、場合によっては家事すらままならなくなってしまう。レイが上手くあやしてくればそれで落ち着く事もあるのだが、レイは非常に気まぐれであり泣いているレイそつちのけで一人絵本を見ている事も多かった。レイは手が掛からない為苦勞しないが、レイは泣いている自分に見向きをしないレイに腹を立て機嫌まで悪くしてしまう事もある。そんな事になつてしまえば大変だ。今から、少々憂鬱である。

しかしそれでも、こうして彼と甘い時間を過ごす事が出来たからか、そんな明日も良い一日に変えられる気がした。

LII last moment

「ルイ、レイ、あまり離れて行かないで。危ないわ」

普段はあまり立ち寄らない、ロンドンの中心部。高級百貨店ハハブなどもあり、多くの

人で賑わう場所だ。

何か特別な日、という訳では無いのだが、常に家に籠った生活をしている娘二人に少しでも気分転換をさせたくて今日は此処まで足を運んだ。

自身の前を歩くのは、十歳になった娘二人。髪に結ばれた赤いリボンが、歩く度にふわふわと揺れる。ルイには苺の飾りが、レイにはさくらんぼの飾りが付いた髪飾りだ。二人が十歳の誕生日を迎えた日、私とセドリックが贈った物である。

私もセドリックもそれなりの教養があつた為、この十年掛けて二人に読み書きを少々厳しく教えてきた。その甲斐あつてか、街で二人は賢い子供だと評判だ。

労働者階級の子供は、十歳ともなれば働きに出るのが一般的である。しかし、働きの出ている子供でも読み書きが出来る子は少なかった。無教養の大人も少なくなく、殆どはその様な子供に読み書きを教える大人が居ないのだ。

私は幼少期から家庭教師ガツペネが付き、厳しく教養をされてきた為読み書きが出来る事は最早当たり前として考えていた。そんな私が現状を知った時は、驚き、そして心を痛めた。だからこそ、娘には出来る限りの教養をしてやりたいと思つたのだ。

教養が無い事を恥だとは決して思わないが、娘には少しでも苦勞せずに人生を送ってほしい。教養があれば、将来就ける職も広がるであろう。

娘二人——特にルイは、元々賢い子だったのか教えた事は直ぐに覚えられる子だった。レイは少々不真面目であるが、ルイに至っては読書も好きで私達大人が驚く程に博識だ。最近では自身で小説を書いている様で、将来は作家を目指している様だった。

反対にレイは絵を書く事が好きな様で、勉強の為にと買い与えたノートには殆どのページに落描きがされていた。しかし落描きと言っても決して粗末なものではなく、物の形をしっかりと捉えた絵ばかりだった。いつかちゃんとしたカンバスと絵具を買い与えて、自由に絵を描かせてみたいものだ。

セドリックの幼馴染であり、私の親友であるマーシャとは十年経った今でも交流がある。セドリックと同じ職に就いている為交流が途切れない、という事もある様だが、それでも週に二回程家に遊びに来てくれていた。

子供達もマーシャに非常に懐いていて、マーシャのあの性格から家に子供が三人いる様だった。この十年変わる事無く、幸せな生活を送っている。

「ねえママ、早く！ 今度はあれを見たい！」

自身の少し先を歩くレイが、遠くの方を指さした。そしてルイの手を引き、橋の

方へと駆けていく。

「待つて頂戴！ そんなに急がなくても時間はまだあるわ」

スカートを軽く摘まみ上げ、品が無いと分かつていながらも駆けて行ってしまう娘二人を追い掛ける。

丁度、小さな橋を渡ろうとした時。私の視線は前を駆ける娘二人にしか向いていなかった為、女性が歩いてきている事に気が付かなかった。

その女性と強く肩がぶつかってしまい、足元がふらつき思わず柵の手摺を掴む。「——ごめんなさい！」

「いえ、此方こそ失礼致しました」

お互い軽く会釈をして、娘の後を追おうとその女性と擦れ違う。

その瞬間、鼻腔を擦ったのはお気に入り紅茶を連想する甘いベルガモットの香り。これは確か、私が屋敷に居た頃好んで付けていた香水と同じ香りだ。親に与えられたものだった為高価な物だと把握しているが、擦れ違った女性は貴族の間では無かった筈だ。一体どんな人物なのだろうと疑問が沸き上がり、振り返った。

——私とほぼ同時に、その女性も足を止め振り返る。

ダークブロンドの髪に、サファイアの瞳。そして片耳に付けた、よく知ったピア

ス。私は、その顔に目を見張った。

「——メアリー……？」

口を衝いて出た名前は、もう十年以上も呼んでなかった、忘れかけていた名前。私の声に、彼女が切なげに表情を歪ませた。

「お久しぶりです、エルお嬢様」

背後から、私を呼ぶ娘の声が聞こえる。しかし今は、彼女の顔から目が離せなかった。

「ご無事で、何よりです」

*

少し離れた場所のベンチで、娘二人が楽しげに手遊びをしている。

それを眺めていると、隣に座る彼女が静かに口を開いた。

「エルお嬢様、今迄どちらへ？」

その問いに、「もうお嬢様じゃないわ」と返すと、彼女が頬を緩ませて「癖ですの
で」と呟いた。

「十八歳の誕生日パーティーで出会った男性と、街の小さな家で暮らしてる」

「——左様ですか」

彼女は怒る事も、責める事も、嗤う事もしない。ただ、微笑みを称え会話に興じていた。そんな彼女との空気が気まずく、言葉が詰まる。

私は何も言わず、突然屋敷から居なくなり十年以上一度も帰る事は無かった。

それだけでなく、彼女は自分と逃げようと伝えてくれたのに私は別の男性を選んだ。本来であればそれに憤り、激しく詰責きせきしてもおかしくは無い筈だ。

なのに、彼女はまるで最初から全て知っていたかのように、私の返答に驚きもせず遠くに居る娘達を眺めていた。

「メアリー……」躊躇ためらいながらも、彼女の名を口にする。

私は、彼女に謝らなくてはならない。だが、謝罪よりも先に浮かんだのはとある疑問。

謝罪の言葉よりも先に、この問いを口にするのはいけない事だろうか。それに、何処か禁断の質問にも思えるそれは、口にする事が憚はばかられた。

しかし、それは私が長年ずっと気になっていた事だ。この十年間の疑問が晴れるのならば、意を決し口を開く。

「——私が居なくなつた後の屋敷は、どうなつたの？」

案の定、と言うべきか。彼女の顔から微笑みが消え、漂う空気に緊張感が走つたのを感じた。

表情を曇らせた彼女の視線が、娘達から地面へと落とされる。

「お嬢様、今お幸せですか？」

「え……？」

「この問いに答えてくださつたら、教えて差し上げましょう」

変わらずその表情は曇っているが、彼女が口角を上げ悪戯に笑つて見せた。

彼女を裏切つておいて、幸せだと口にするなど許されない。しかし、それ以上に答えが知りたいと思つている自分が居た。

最低だ、と思ひながらも彼女の瞳を見つめると、まるで私の気持ちを肯定する様に彼女が優しく微笑んだ。

「——とても、幸せよ」

目を伏せ、ゆつくりとその言葉を紡ぐ。

「最愛の夫と、可愛い娘達に囲まれて、今は当時と比べられない位に幸せ」

一言一言丁寧な、無下にしない様に。娘や夫の顔を思い浮かべながら小さく告げ

た。そして瞳を開き、彼女に視線を向ける。

「その言葉が聞けて、安心しました」

彼女が私の言葉にほんの一瞬複雑な表情を浮かべた後、切なげに笑った。

「屋敷の事、でしたね。幸せな貴女が知るにはあまりに残酷です。幸せなままで居たいのなら、今日此処で私と偶会ぐうかいした事はお忘れになった方が良いでしょう」

「そんな……、答えたら教えてくれるって言ったじゃない」

「そうですね、しかしお嬢様の幸せを壊す事は私には出来ません」

彼女の瞳が、再び娘達に向けられる。

「お嬢様に似て、とてもお美しい子供達ですね。親というのは、子供を守る為に在るもの。決して子供を傷つけるような事があつてはなりません。子供は道具でも奴隷でも無いのです。……私は、エルお嬢様を心からお慕いしております。それは今も、変わる事はありません。そんな貴女が薄汚い思想を持った人間にならなかつた事だけが、私の唯一の救いです」

静かに告げられた、彼女の言葉。それに対してもう、私は何も言う事が出来なかつた。

私が居なくなつた後の屋敷がどうなつたかなんて、少し考えれば分かる事だ。そ

れに彼女の言葉を聞く限り、過酷な十年間だった事が伺える。

「お嬢様……、ご両親の事、そして私達使用人の事を、どうかお忘れください。全て忘れて、貴女だけはこの残酷な世界に毒されず……」

とても優しい、穏やかな表情が私に向けられる。

「強く……幸せに生きてください」

僅かに震えた彼女の声。涙を堪える様なその表情に、私と彼女の愛おしい思い出が蘇り酷く胸が締め付けられた。

「今日、貴女と会えて嬉しかったです。これが本当の最後になります。子供達に山の愛を注いで、幸せで居てください。約束ですよ」

彼女が徐おもむろに、此方に小指を差し出した。

その指を暫し見つめた後、くすりと笑みを零し自身の小指を彼女の小指に絡ませる。

「指切りなんて、子供みたいね」

「良いじゃないですか。最後なんですから」

彼女が子供の様にふふ、と笑う。

「——Cross my heart and hope to die. 《十字を切つて誓つたからには死んでも良しよ。》」

そして、子供が約束事をする際のお決まりのフレーズを口にした。

本当に子供みたいだと、思わず笑つてしまひそうになる。しかし彼女の穏やかな表情に何も言えず、その言葉を飲み込んだ。

彼女によつて指が解かれ、名残を惜しんだ私の手だけが宙に残される。

「どうか、お元気で」

彼女がベンチから腰を上げ、私に深々と頭を下げた。その拍子に、彼女の耳の横で揺れていた髪がふわりと風に靡く。

聞きたい事も、言いたい事も、沢山あった。でも私は、それを何も聞けていない。

言えていない。更には一番重要な、謝罪すら出来ていない。

こんなお別れをしては駄目だ。きっと、一生後悔する。

「——待って」

踵を返し、街の方へ歩いていく彼女を呼び止めた。彼女が足を止め、ゆつくりと振り返る。

振り向きざまに、髪を耳に掛ける仕草。それは、屋敷で何度か見た事がある、彼女の小さな癖だった。

あれから十年も経ったからだろうか。懐かしさを感じながらも、当時は可愛らしく見えていたその癖が今はとても艶やかに見えた。

「ごめんなさい、私」ベンチから立ち上がり、一步、二歩、と彼女へ近づく。

「私、貴女を裏切ってしまった」

「……………」

「ずっと後悔していたの、貴女を屋敷に置いて行ってしまった事……。屋敷に残された貴女はどんな気持ちだったか、何を思うかなんて、あの時の私は考えもしなかった」

コツコツとヒールの音を立てて、彼女が私に歩み寄る。

目の前まで来た彼女の瞳を真っ直ぐに見つめ、続きの言葉を述べようと震える口で息を吸い込んだ。

「私はただ、自分の幸せだけを——」

だが、言葉は途中で止まる。私の言葉を止めたのは、他でも無い彼女の指先。唇に添えられた指先は冷え切っていて、僅かに震えている。

「——では」微笑みを湛えたまま、彼女が口を開いた。

「今からでも、私と二人で逃げてくださいますか？」

彼女が告げたのは、あの日を思い出させる言葉。冷たい手で心臓を掴まれた様な感覚に陥り、思考が働かなくなる。

「——それは……」遠くで聞こえる、娘の楽しげな声。家に帰れば、最愛の夫が待っている。

私は、この幸せを手放すつもりは無い。つまり、答えはNo一択だ。

なのにそれ以上言葉を紡ぐ事が出来ないのは、彼女への罪の意識からだだろうか。心臓が抉られる様な妙な鼓動を感じながらただ彼女の瞳を見つめていると、彼女が何処か寂しげに笑った。

「冗談です」彼女の指が、唇から離れていく。

その言葉は、決して冗談などでは無かった。本当に冗談だったのなら、これ程手を震わせたりしないだろう。

最後に小さく会釈をした彼女が、再び踵かかとを返した。街の方へ消えていく彼女の後ろ姿を見ながら、彼女の私服姿を見るのは初めてだ、なんて事を考えていた。

彼女を引き止めた事が、あんな謝罪をした事が正しかったかは分からない。彼女

の「冗談」にもう少し別の返答が出来たのでは無いかと、姿が見えなくなった今になつて様々な言葉が溢れてくる。

しかし、もう彼女は居ない。彼女には、もう二度と会えない。

ぼんやりとその場に立ち尽くし、もう見えなくなつた彼女の背を探す様に街を眺める。

「——ねえ、ママ」

不意にブラウスの袖を引っ張られ、はっと我に返つた。

「ぎこちなくも振り返ると、遠くで手遊びをしていた筈の娘二人が私の背後に立っていた。」

「あのお姉さん、だあれ？」

そう問うたのは、少々不安げな顔をしたレイだ。レイはというと、相変わらず何を考へているか分からない無表情で街の方を眺めていた。

「ママの昔の知り合いよ。待たせてしまつてごめんなさいね」そう告げると、レイが黙つて首を横に振る。

「そういえばレイ、何処か見たいところがあつたのよね？　時間はまだあるから、行きましようか」

その不安げな顔に微笑みかけ、手を差し出した。すると珍しく、レイが反抗する事無く私と手を繋ぎ、「うん」と小さく頷いた。

「どうかした？」彼女に問い掛けると、レイは黙って俯いた。その顔は暗く、いつも明るいレイにしては珍しい表情だ。

レイの顔を覗き込もうと腰を屈めると、今迄黙っていたレイが徐おもむろに口を開いた。「ママ、あの人と何処か行ってしまうの？」

まるでレイの言葉を代弁する様に、淡々と告げられたレイの言葉。

彼女たちは先程迄遠くのベンチに座っていた筈だ。メアリーの言葉は聞こえていなかった筈。

「どうして？ ママは何処にも行かないわ」

「——そう」

レイの無表情は変わらない。だが、レイは黙ったまま私の手を強く握った。

子供というのは、やはり鋭いものだ。言葉は聞こえていなくとも、私達の雰囲気を見ていて何かを覚さとつたのだらう。

「大丈夫、私達家族四人はずっと一緒よ」

なるべく明るくそう告げると、レイが再び頷いた。

LIII To my daughter ...

水道から流れる、冷たい水。その水温が、体温を下げるのに丁度よいと感じる夏の暑い季節。

背に投げかけられたレイの不満げな声に、蛇口を捻り水を止めた。

「ねえママ、どうして此処にはレイが居ないのお」

食器を全て洗い終えた事を確認し、キッチンから離れレイの待つリビングへと足を向ける。

「あら、レイ。お勉強はどうしたのかしら？」

彼女に指示したのは、単語書き取り三ページ。休憩時間も設け、一時間以内に終わらせる様に言った筈だが、彼女の前に置かれたノートはたったの一ページも埋まっていなかった。

そして相変わらず、余白には沢山の落描きがされている。これでは落描きだけでペンのインクを使いきってしまいそうだ。そろそろ、落描きを禁止すべきだろうか。

彼女の長所を摘み取ってしまう事はしたくないが、肝心の勉強が進まないのならそれも致し方が無い。

「絵を描くのもいいけれど、お勉強が進まないのなら落描きを禁止しなくてはいけないわね」

「ルイが居ないから^{はかど}捗らないの」

「ルイが居ても捗らないでしょう。あんまりにも言い訳ばかり並べていると、パパに言い付けるわよ」

どちらかと言えば、私よりセドリックの方が教育熱心だ。不真面目なレイを見れば彼はきつく叱りつけ、罰として書き取りページを増やしたりなんて事もしている。レイは今も昔もセドリックが大好きで良く懐いているが、勉強に厳しいセドリックだけは好きになれない様だった。

「パパに言うだなんて卑怯！　そもそも、どうして今日はレイとパパはお出かけで、私は家で一人勉強なの?!　ルイも勉強していないんだから、私もしなくたっていいじゃない！」

「相変わらず口が減らないわねえ……」

レイの言う通り、セドリックとルイは今日二人きりで遠出をしている。向かった

先は、私とセドリックが嘗て散歩と称して出かけたあの緑豊かな丘。悪夢に魘されるセドリックに膝枕をした、思い出深い場所だ。

そこへ行ったのには、大きな理由がある。それは、ルイに少し早い誕生日プレゼントを渡す為だ。

そして私には、レイにそのプレゼントを渡す役目がある。

ふらりとレイから離れ、チェストの方へ足を向けた。そつとチェストの淵をなぞり、一番上の引き出しを開く。

お目当ては、プレゼントが入った小箱。

畳んで仕舞われた服を数枚捲り、その小箱を慎重に取り出す。

これを渡すのはレイがしつかりと勉強を終えてからにしようと思っていたが、この調子だといつまで経つても終わらず、日が暮れてしまいそうだ。それに、二人が帰ってくる前に彼女にこれを渡さなくてはならない。

「レイ、お勉強はもういいわ。ノートとペンを片して」

「え？ もういいの？」

「このまま続けても、貴女は落描きしかしらないでしょう」

苦笑しつつも、小箱を手にレイと向かい合う様に椅子に座る。

「少し、ママとお話をしましょうか」

「お話？」

コトリ、とテーブルの上に小箱を置くと、口にはしないもののレイの視線が小箱に向くのが分かった。

その視線を感じながらも、もったいぶる様に小箱を撫でる。

「レイの事は好き？」小箱を眺めながら、優しい声音でそう問い掛ける。

「勿論、レイの事は大好きよ！でも、そうね……」

返ってきたのは想像通りの反応ではあるが、彼女が不意に複雑な表情を浮かべた。
「好き……というよりも、居なくちゃいけない存在なの」

「居なくてはいけない存在？」

「そう。植物を育てるには、水だけじゃなくて陽の光も必要な様に、私とレイ、何方かじゃ駄目なの。二人揃って、やっと一つになれる」

レイにしては珍しい真剣な声音に驚きつつ、微笑みを漏らし頭の中に幾つか浮かんだ言葉の中から話が掘り下げられる返答を選ぶ。

「——そう……。じゃあ、貴女は自分を不完全な存在だと思っているの？」

「不完全……、という言葉は適切では無い気がするけど、そうね。私は不完全。ル

イが居るから、完全になれる。私ね、何があつてもずっとルイと一緒に居られる気がするの。一緒に居るのが、必然だから」

「必然……」

「生きるのも、死ぬのも、楽しむのも苦しむのも、全部ルイと一緒に。一緒じゃなきゃいけないの。でも、それは決して苦痛なんかじゃなくて、寧ろ一緒に居るからこそその感情を得られる……と、思つて……」

喜怒哀楽が激しく、常に不真面目なレイからは想像が出来ない言葉。彼女も、彼女なりにしっかりと物事を考えているのだ。

我が子の成長を喜ばしく思う反面、やはり二人は私達が入る隙の無い程強い絆で結ばれているのだと実感した。私とセドリックが、そうだった様に。

しかし、二人は血を分けた双子であり、所詮は他人である私達夫婦とは大きく異なるだろう。

私とセドリックはお互いだけを見据え、時に盲目的になる程愛し合っている関係ではあるが、双子である二人は少し違っているらしい。

不完全な個体が、二つ揃つて完全になる。

深い絆で結ばれているのだという事は二人が幼い頃から分かっていたが、彼女が

ルイをその様に感じているとは思わなかった。

「あれれ、私何か変な事言っちゃったかな……」

黙り込んだ私を見て、彼女が不安気な表情を浮かべた。両の掌を擦り合わせ、そわそわと落ち着かない様子を見せる。

「いいえ、そんな事無いわ」

安心させる様に彼女に微笑みかけ、ゆつくりと小箱を開いた。

小箱の中に入っているのは、一本の指輪。表面にはセドリツクと私、そしてルイとレイ四人の名前が刻印されている。

これは二人の十一歳の誕生日に贈る為に作った物だ。しかし、ただ家族全員の名前が刻印されただけの指輪では無い。

ライリーの友人——確かシスターセシリアと言っただろうか。彼女が勤めている先の教会で、特別な祈りを込めて貰った物だ。

愛する娘には、幸せになって欲しい。

出来る事ならいつまでも私達の傍に居て欲しいが、この世の中は少々残酷であり、大切な我が子を親の手だけで守れない事もある。

ならばせめて、二人がいつまでも共に居られるように。仮に不幸な道を進む事に

なつたとしても、二人だけは離れる事は無い様にと、そんな願いをこの指輪に込めた。

「レイ、右手を出して」

「右手？」彼女が怪訝な反応をしながらも、右手を此方に差し出す。

指輪を嵌める位置は、〃集中力・行動力をつける〃右手の人差し指。これは、アクセサリーに詳しいライリーから教わったものだ。

箱からそつと指輪を取り出し、レイの指に慎重に嵌め込んだ。

「指輪だ！」

瞳を輝かせ、様々な角度から指輪を眺めるレイはとても無邪気であり、やはりまだ子供なのだと思いを漏らす。

「世界で〃二つ〃しかない、特別な指輪よ」

「二つ……、あつ……！もしかして……！」

もう一つの指輪は、ルイの元にあるのだと覚つたのだろう。彼女がガタリと音を立てて椅子から立ち上がり、声を上げた。

それを肯定する様に、彼女に微笑みかける。

「その二つの指輪は、磁石みたいに、互いを強く引き寄せるお祈りが込められてい

るの」

「磁石……」

私の言葉を復唱する様に呟いた彼女が、何やら考えこむ様な顔をし再び椅子に腰を下ろした。

「貴女も気付いているわね。もう片方は、ルイが持っているわ。貴方達二人の事は、ママとパパで何があつても守っていきたいと思つてる。でも、時にはそうもいかないう事もあるでしょう。これから先、家族四人でずっと一緒に居られるという保証は何処にも無い」

「——うん……」手を伸ばし、俯いたレイの髪をそつと撫でる。

「貴女達二人きりになつてしまったその時は、貴女がルイを支えてあげてね」

「——私が？」

「そうよ。ルイは賢い子だけれど、咄嗟の時に頭より先に身体が動いてしまう子。でも貴女は、どんな時でも慎重で、しっかりと物事を考えられる。だから、ルイが危険な事をしようとしたら貴女が止めるのよ」

「——……」

するりと、柔らかなレイの髪を指先で梳く。

彼女は勉強に関しては不真面目であるが、この様な話を軽んじる子ではない。きっと、彼女も彼女なりに何かを真剣に考えているのだろう。

——と、思ったのも束の間。彼女が、突然吹き出す様に笑った。

「ルイ、私の言う事聞いてくれるかなあ。ママが思っている以上に、ルイって私の話聞いてないんだよ」

「——それは、否定……出来ないかもしれないわね」

そういえば、ルイは少々自由な子だ。幼少期に、泣いているレイを放って一人絵本を眺めていたことがあった。そんな様々なルイの自由な行動を思い出し、苦笑を漏らす。

ルイは自分で決めた事は貫き通す所があり、レイの言う通り彼女の言葉を聞かない可能性も大いにあった。

「——でも、大丈夫。ちゃんと止めるよ」

しかし、レイはふふ、と笑いしつかりと頷いて見せた。

「聞かなかつたら殴つてでも止めてやる」

「それは、程々にね」再びレイの頭を撫で、彼女と顔を見合わせて笑った。

「仮に家族がバラバラになつても、いつか必ず巡り合える。だから、レイはルイと

共に居る事だけ考えていればいいわ」

自分の言葉が、親として普通じやない事は分かっている。しかし、二人には二人の思う幸せを歩んで欲しかった。

私達親が決めたつけた幸せなどでは無い、彼女達の本当の幸せを。

「少し早いけど……、レイ、十一歳のお誕生日おめでとう」

LIV What i lost

——その日は、夏だというのにやけに気温が低く、とても肌寒かった。

窓から見える空は、今にも雨が降りそうな黒。妙に不安を煽る色だ。

急いで買い出しを済ませ、なるべく早く帰って来よう。そう思いながら、財布の入ったバスケツトと家の鍵を手を取った。

「ママは買い出しに行ってくるから、二人共ちゃんと勉強しているのよ」
自宅の玄関先。

むくれているレイと、何処かそわそわと落ち着かない様子を見せるルイに言い付け、ドアノブに手を掛ける。

レイは先程迄、「自分も一緒に街へ買い出しに行く」としつこく駄々を捏ねていた。しかしレイは昨日も一昨日もまともに勉強をしておらず、今日は罰という事で一日お勉強だ。

ルイはというと、毎日しつかりと与えられた課題は時間内に終わらせ、残りの時間を趣味の読書に費やしている。きっと今も、彼女は早く勉強を終わらせて本の続きが読みたいのだろう。

「誰か来ても絶対に扉は開けない事。二人だけで外には出ない事。分かったわね」
「……」

コクリと黙って頷くルイと、未だ不服そうな瞳で此方をじとりと見つめるレイ。レイは随分と往生際の悪い子供だ。溜息を漏らし、「分かったわね？」ともう一度強めの口調で彼女に問い掛ける。

「……………はあい」

未だ彼女の瞳が不満を訴えているが、諦めたのかレイがやや不機嫌そうな声音で答えた。

そんな彼女の頭を軽く撫で、玄闔扉を開く。

「じゃあ、行ってくるわね」二人に手を振り、扉を閉める。

こうして二人に留守番をさせるのは久しぶりだ。扉をしっかりと施錠し、街の方へ足を向けた。

不真面目なレイに、罰として今日一日勉強だと言い付けたのはセドリックだ。そんなセドリックの言葉に、レイは不満を訴えていた。しかしセドリックが教育熱心な事には変わららず、「それ以上言うなら一週間勉強漬けにさせる」と言つてレイを黙らせていた。

少々レイが可哀想だと思いつながらも、全ては彼女の為だ。数日後にはもう十四歳になると言うのに、読み書きが苦手な様では困つてしまふ。

仕事で家を空けているセドリックの代わりに、私が二人——主にレイの勉強を見るべきなのだろう。しかし、家事を疎かにする訳にもいかない。レイが真面目に勉強しないと分かり切つた上で買い出しに出かけるのは気が引けるが、これも私の仕事である。

レイが不真面目なレイを、姉として叱つてはくれないか、なんて思つてもみるが、

きつと彼女は早々に自分の勉強を終わらせ大好きな読書に時間を費やすのだろう。レイは、レイに対してやや冷淡な一面があり、それは幼少期から変わる事は無い。これでちゃんと姉妹としてやっていけるのだろうか、なんて不安を抱く事もあるが、レイは我儘で喜怒哀楽も激しい為、全ての事に構っていたらレイも疲れてしまうのだろう。レイもそんなレイに不満を抱いている様子も無く、これはこれでしつかりとバランスがとれているのかもしれない。

ふふ、と笑みを零しつつ、頭の中に買う食材を並べ店へと急いだ。

「お、エルさんいらつしゃい。今日は一人？」

色取り取りの果物が並ぶ小さな出店。その店に近づき、最も彩りの良い林檎を一つ手に取ると、店の主人が明るく話し掛けてきた。その声に顔を上げ、微笑みを浮かべつつ頷く。

「ええ、娘は家でお勉強」

「相変わらず教育熱心だねえ、うちの息子にも勉強を教えてやって欲しいよ」

店主が豪快に、声を上げて笑う。そして一頻りひとしばら笑った後、主人はふと何かを思い出した様に「あ」と声を漏らし真剣な表情を浮かべた。

「そういえばエルさん、あの噂聞いた？」

主人が私に顔を近づけ、やや潜めた声で囁く様に告げる。

「——噂？」

此処の主人は噂好きだ。何処からそんな情報を仕入れてくるのか、近所の事情から遠くの街の話まであらゆる話をいち早く取り入れ、こうして買物にやってきた客を見つけてはそれを話して聞かせている。その内容も幅広いもので、他の人が知らない様な話も知っている為情報収集には丁度良いが、貴族の噂話も多い故聞いていて肝が冷える時があった。

しかしこの約十五年で、彼の口からエインズワース家の話題が出た事は無い。そして私の素性にも、未だ気付いて居ないようだった。きつと今回の「噂話」というのも、私には関りの無い話だろう。

一番形が良く、色の良いレモンを二つ手に取り、娯楽の一つとして聞こうと彼の話を傾ける。

「エルさん、スタインフェルド家の事は知っているね？」

彼の言葉に、思わず果物を採択さいたくする手が止まる。

言わずもがな、スタインフェルド家は私の元婚約者が居る家だ。スタインフェル

ド家は社交界でも名高く、嫡男のキースが端正な顔立ちをしている為か令嬢方が噂しているのをよく耳にしていた。

「——勿論、知っているわ。お名前を聞いた事がある、程度だけけれど」

まさか、彼の口からスタインフェルド家の名が出るとは思わなかった。いくらエンジニアズワース家とはもう関係が無いとはいえ、一度は関りを持った家の名が出ると気が転倒する。

動揺に満ちた心中を覚られぬ様当たり障りない返答をし、グースベリーに手を伸ばした。

目は口程に物を言う、なんて言葉があるだろう。今主人と目を合わせれば、確実に私の動揺が伝わってしまう。現に、表情に動揺が滲んでしまいそうで取り繕うのに必死だった。

果物の採択を続けながら、「そのお宅がどうかしたの?」と話の続きを促す。

「——先日、嫡男のキース・スタインフェルドが死んだらしい」

突如、動揺した心に投げ込まれた爆弾。

指先で摘まんだグースベリーが滑り落ち、石畳の上を転がった。

「ごめんさい」

慌てて拾い上げ、買い取ろうと主人に手渡す。しかし、主人は軽く笑って新しいベリーと交換してくれた。

「どうしたんだそんなに動揺して、人が死ぬ事は珍しくないだろう」

「少し、驚いてしまつて」

薄情な話ではあるが、実際この世界の人間が死ぬ事は然程珍しくはない。質の悪い感染症や伝染病、不治の病に侵されて命を落とす人間は多くいる。

しかし、貴族の人間が死ぬ、というのは少し訳が違った。

貴族の人間は病や感染症に侵された際、有り余る金で最も腕の良い医者を雇い、高額な薬を買う。故に、確な治療も受けられない労働社会階級の人間とは違って生き永らえる事が殆どだ。

それに、スタインフェルド家程の名家の人間が病に侵されたともなれば噂が広がるのも早い。だが今回、そんな噂は一度も耳にしていなかった。

となれば、考えられるのは事故死か他殺。

早まる鼓動に声が震えるのを感じながらも、「死因は分かっているの？」と主人に問う。

「ああ、それが……、スタインフェルド家は慈善活動の一環で十五年ほど前に養女

を引き取つたらしいんだけど、どうやら養女と嫡男は不仲だった様でね。その養女が、嫡男を刺したらしい」

「刺した……？」

「まだ噂って段階だから、断定は出来ないけどね。でも養女は行方不明になつてゐる話もある。少なくとも、嫡男が死んだのは本当だよ」

指先が、微かに震える。

キースが、死んだ。それは私にとって、何よりも好都合だ。もう、キースに偶会ぐうかいするのでは無いかと怯えながら街を歩かなくて良い。

事実、娘を連れて街を歩いている時はずっと不安だった。もし娘を連れて居る時にキースと偶会ぐうかいしてしまえば、彼に娘が居る事を知られてしまう事になる。今更になつて彼が私達に危害を加えるとは思えないが、それでも彼の目に娘の姿を触れさせたくはなかった。

——そんな彼が、死んだ。

胸の中を渦巻くのは安堵か、欣快きんかいか、それとも恐怖か。少なくとも、動揺どうごうをしてるのは確かだった。

しかし、動揺どうごうをするのも当然だろう。幾ら嫌いな相手だったとはいえ、恐怖を抱

いていた相手だったとはいえ、私の元婚約者だ。関りのあった人物の死である。

それに、キースを刺した養女は行方不明だという話も上がっている様だ。人を刺した人間が、このロンドンの何処かに居る。それだけでも畏怖感のある事実だった。

「——エルさん、大丈夫？」

「えっ……？」主人に声を掛けられ、ふと我に返る。「ごめんなさい、考え事をしていて」

「幾ら俺の噂話がつまらないからって、考え事なんて酷いなあ」

「つまらないなんて思っていないわ。ちゃんと聞いていたもの」

彼は時々、あまりに噂話ばかりをしているからか客に「煩い」「しつこい」「つまらない」等と言われていた。それを、彼は少々気にしている様だ。私の言葉に、「つまらない」等と本当に？」と執拗に聞き返してくる。

「本当よ。でもごめんなさい、今日は急いでいるの。また後日聞かせて頂戴」

選んだ果物のお金を払い、バスケットの中に果物を詰めていく。

キースの死について、本当はもっと話を聞きたかった。だが、これ以上の話を知るのが怖くもあった。

それに、今日はレイの勉強を見なくてはならない為、あまりこんな場所で長く話

し込んでいる訳にもいかない。残念そうな顔をする主人に手を振り、別の店へと急いだ。

三十分程で買い出しは終わり、空のバスケットは沢山の食材でいっぱいになった。他の店で買い物をしていても、頭の中を回るのはキースの事ばかり。キースの話をしたのは果物屋の店主だけだったが、それでも皆彼の死を知っているのでは無いかと思えて落ち着かなかった。

今にも雨が降り出しそうな空を見上げながら、石畳の道を駆けていく。雨に降られてしまったら、着替えなどが非常に面倒だ。それに最近は天気が悪い事が多い為、なるべく余計な洗濯物を出したくない。雨が降り出す前に、自宅に戻ればベストだ。

レイは今頃、勉強が嫌だと騒いでいるのだろう。レイはもう、今日の分の勉強を終わらせ読書に勤しんでいるかもしれない。早くキースの事を忘れてしまおうと、娘二人の事で思考を埋め尽くす。

今日は少し、多めに果物を買った。レイが勉強をちゃんと進めていたら、ご褒美に林檎を剥いて出してあげよう。レイには生の林檎よりも、砂糖で煮たコンポート

を出してあげた方が喜ぶかもしれない。

ルイはセドリックに似ている所が多い為、彼女も甘い物が苦手だとばかり思っていた。しかし味覚の好みはセドリックとは真逆であった。彼女は大の甘党であり、甘い物が好きなマーシヤも驚く程だ。顔に笑みを浮かべ、コンポートの作り方を一から頭に並べる。

やっと、遠目に見えてきた我が家。雨が降り出す前に、無事戻ってこられて良かった。

早く、家に入って果物を我が子に出してあげよう。

——なのに。

石畳の道を駆ける足は止まり、持っていたバスケットは手から滑り落ちる。

落ちた衝撃で、買った食材がバスケットから飛び出し辺りに散らばった。娘に出そうと思った熟れた林檎は、コロコロと遠くの方へ転がっていく。

早く拾い集めなければ、食材が傷んでしまう。

しかし私の瞳は、遠くの我が家を見据えたまま。

ゆらゆらと、風に合わせて開閉を繰り返す玄関扉。灯りが消え、真つ暗になった家の中。

私の足が再び動いたのは、我が家に起こった異常に気付いてからだだった。

脳内を回る、キースの死。行方知らずの養女。

それを掻き消す様に、様々な憶測を並べ立てる。きつと、レイがあまりに勉強が嫌で逃げ出してしまったのだ。それを、ルイが追いかけて行ってしまったのだろう。

二人が知っている場所といえ、買い出しによく行く街だけだ。私の後を追いつけ街に向かったのかも知れない。一度街に戻り、娘の姿を探した方が良さだろうか。

心臓が壊れてしまいそうな程の動悸と、乱れた呼吸。止まらない、地面を蹴る足、脳内に並べる沢山の憶測。

しかし、漸く辿り着いた我が家の玄関扉に張り付いた、黒い封筒の姿に一瞬で背筋が凍り付いた。

——不吉な黒に、血液の様な赤い、“B”の文字が押された封蝋。

これは嘗て私が受け取った、あの謎の手紙と同じ物だ。

ひつたくる様にその手紙を扉から剥がし、封筒が破れるのもお構いなしに乱暴に開封する。

中に入っているのは、昔と同じ黒いメッセージカード一枚。息を吐き、そのカードを取り出した。

Dear Elle Andor, 《親愛なる エル・アンドール》

You just have to believe in you. 《貴女は貴女を信じれば良い》

No one blames the choice. 《その選択を咎める者は居ない》

Mabel Balfour 《メイベル・バルフォア》

「——どうして、どうしてなの……」

ぐしやりとその手紙を握り締め、今も風に揺られ開閉を繰り返す扉をゆつくりと開く。

「どうしてあの時も、今も、大事な事が何も……書いていないの……」

これはきつと——いや確実に、予言の類たぐいだ。

予言など、この世に存在しない。する訳が無い。そう思いたいが、現に今手の中にそれがある為否定する事が出来ない。

あの時も、そうだ。理解できない文章が書かれていたが、きつとあれはセドリックとの関係を指していた。

そしてこの黒い手紙から僅かに香る甘いシトラスの香りに確信を抱く。私が娘二人を身籠った時に裏路地で擦れ違ったあの女性。きつと、あの女性こそがこの手紙の差出人だ。

張り裂けそうな程の動悸を感じながら、家の中に足を踏み入れる。

明かりが消え、人の気配が無い事以外いつも通りの我が家だ。テーブルの上に残された二人のノートを一瞥し、ぐるりと一周家の中を見渡す。

「——ルイ、レイ……どこに居るの……？」

この家の中に、二人は居ない。それは気配で分かる事なのに、俄かに信じられず

二人の名を呼ぶ。

ふらつく足で二階に繋がる階段へと向かい、言葉にし難い恐怖心を抱え一段目に足を掛けた。そしてもう片方の足を二段目に乗せ、ゆっくりと階段を上っていく。幾ら不真面目でも、レイは私の言い付けを破る子では無い。物事に対して冷淡でも、ルイだって物事の善悪は付く子だ。

故に、二人は自らの足でこの家を出た訳では無い。二人の身に、何かがあったのだ。それはもう、とっくに分かっていた。

しかしまだ、心の何処かで願っていた。私を驚かせようと、わざと子供部屋に籠っているのでは無いか。部屋に入った瞬間、笑顔のレイが「勉強漬けにさせたお返し」なんて言って驚かせてくるのでは無いか。もしくは、私の言い付けを破って外へ遊びに行ってしまったのでは無いか。

——そうであって欲しいと、心から願っていた。

辿り着いた二階。子供部屋のドアノブに手を掛け、息を深く吐く。この奥に、二人は居る筈だ。きつと、私の帰りを待っている筈。

まずは、これ程心配させたことを叱ろう。如何なる理由があつたとしても、善悪を教えなくてはならない。そしてその次に、思い切り強く抱きしめて、おやつとし

て果物を剥いて出してあげよう。

ああ、でもその為には、外で落したまま拾っていないバスケットと食材を取りに行かなくてはならない。食材と果物は、傷んでいないだろうか。

だがそれは、三人で取りに行けば良いだろう。食材も、三人で買い直しに行けば良い。

——しかし、二人が居なかったら？

子供部屋はもぬけの殻で、本当に二人の行方が分からなかったら？

それが今は怖くて、怖くて仕方が無い。ドアノブに掛けた手が、酷く震える。

しんとした家の中と裏腹に、外からは激しい雨音がしていた。娘は部屋の中に居る筈だと思いつつも、何処かへ消えてしまった二人が雨に濡れていないだろうか。だなんて、矛盾した心配が募っていく。

いつまでも、扉の前で娘を想っていたって仕方が無い。意を決し、そつと扉を開いた。

静まり返った部屋の中。明かりが灯っていない為薄暗い。

目を凝らして、部屋の隅々まで視線を走らせる。ベッドの下、棚の隙間。娘が居る筈の無い場所すらも、確認してしまう。

この部屋にあるのは、娘二人が居た「痕跡」だけ。僅かに感じる娘の香りや、娘がいた気配。それだけだ。

もう此処に、二人は居ない。

「——どうして……」

崩れ落ちる様に床に膝を付き、背を丸め娘のベッドに顔を埋める。

鼻腔を抜けるのは、娘を抱きしめた時に感じたものと同じ香り。こうしてベッドに突っ伏していると、娘を抱きしめている様な錯覚に陥り自然と涙が瞳に滲む。

ふと、ベッドの表面を撫でようと手を動かした時、かざりと何かが指先にあたった。顔を上げ、その何かに視線を向ける。

「——……？」

それは、寸前まで強く握り締められていたのか、きつい皺の付いた一枚の紙だった。形状を見るに、勉強用のノートを破ったものだろう。何かが書かれているのが透けて見え、そっと紙を裏返す。

Dad, mom, goodbye. Don't forget us.

《パパ、ママ、さよなら。私達を忘れないでね。》

I love you, forever.

《いつまでも、愛しています。》

文章を書く事に慣れていない字。随分と乱れているが、これは紛れも無くルイの字だ。

普段から丁寧に文字を書くルイにしては珍しい程の殴り書きである。去り際、咄嗟に書いたのだろうか。

しかしその文面に思考は止まり、代わりに涙が止めど無く溢れる。

——何故。どうして。

頭に浮かぶのはそんな事ばかり。

二人は今、何処に居るのか。二人の意思で、此処を出たのか。

ただの家出か、それとも誘拐か。ぐわりと回る眩暈と殴られる様な頭痛の中、ただ嗚咽を漏らしながら縋る様に布団を掴む。

ふと、遠くで聞こえる足音が耳に付いた。

娘達の足音だろうか。——いや、違う。

娘二人と、最愛の夫の足音を聞き間違えう筈が無い。

セドリックは今仕事中の筈だ。何故、これ程タイミング良く帰ってきたのだろう。そんな事を考えているうちに足音は近づき、自身の背後で止まった。

「——エル」

背後で聞こえた、掠れた声。その声にゆっくりと顔を上げ、振り返った。

「——セドリック……二人が、居なくなっちゃったの……」

彼は、娘二人が居なくなつた事に気付いている様だった。その悲愴感が滲んだ顔に、彼は何かを知っているのだと確信を持つ。

しかし、今はまともに思考が動く事は無かった。

「——ごめん、なさい……私が、ちゃんと二人を見ていなかったから……」

瞳から再び涙が零れ、頬を伝い落ちていく。

そんな私を見て、彼が一度切なげに表情を歪めた後私をきつく抱きしめた。

「——ごめんなさい、ごめんなさい」ただ、讒言うそごとの様にその言葉を繰り返す。まるで子供の様に泣きじゃくりながら、雨に濡れて重くなった彼のジャケットを掴んだ。

「——エル」私の背をあやす様に撫でていた彼が、躊躇ためらいがちに口を開く。「話さないと、いけないことがある」

彼の、その言葉。きっと、娘二人の事だろう。二人の居場所を、彼は知っているのかもしれない。

しかし、何故だか今はとある感情が自身の心を覆い尽くしていた。

この状況の中、そんな事を想ってしまうだなんて。自分自身に、深く失望する。

——貴女は貴女を信じればいい。その選択を咎める者は居ない。

あの手紙——差出人は確か、メイベル・バルフォアと言っただろうか。

あれが本当に予言たぐいの類たぐいのだとしたら、彼女は今現在私が抱いている感情も全て見透かしているのだろうか。

その言葉は、私の今の思いにも当て嵌まるものだと、果たして本当に彼女は言う

のだろうか。

LV Nightmare story

——流れる、沈黙。

テーブルに向かい合う様に座り、早くも十分が経過した。お互い無言のまま、ただ時間だけが過ぎていく。

テーブルの上に広げられた、娘二人のノート。このままでは邪魔になってしまいが、娘が居た痕跡を消す事が出来ず手が付けられずにいた。それはセドリックも同じだった様で、彼も黙って娘のノートを見つめている。

レイとレイは勉強の進み具合が違い、二人のノートは消費されたページ数が大きく異なっている。それはレイが余白に落書きばかりして不真面目だという事と、レイが勉強に真面目に取り組んでいるという事を表していた。

しかし今日の様な日に限って、レイのノートは落書きでは無く沢山の文字で埋ま

っていた。相変わらずの殴り書きであるものの、ミスも無く彼女なりに真面目に取り組んでいた事が分かる。

そんなノートを見て、止まった筈の涙が再び零れ落ちた。

視線を隣のルイのノートに移せば、ノートを大事にしていた彼女のものだとは思えぬ程乱暴に破かれたページが目に入る。きっと私達に最後の言葉を伝えようと、このノートを破つたのだろう。ルイのノートを指先でなぞり、止まらぬ涙に嗚咽を漏らした。

「――二人は恐らく、スタインフェルド家に居る」

彼が漸く口を開き、長い沈黙を破る。しかし、彼のその言葉を咄嗟に理解する事が出来なかつた。顔を上げ、彼に怪訝な視線を投げる。

「スタインフェルド家とは、仕事で関りがあつたんだ。それで少し、揉め事を起こして……」

「――仕事……」彼の言葉を、復唱する様に呟く。

彼はブローカー業を営んでいると、昔マーシヤから聞いた。貴族を相手にする事も、多いのだとか。

仕事で、スタインフェルド家と関りがあつたという事は彼の言葉で理解した。出

来る事なら関りを持つて欲しくは無かった家ではあるが、それが仕事なのであれば仕方が無いのだろう。

しかし、何故仕事で関りがあつただけの家に娘二人が居るのだろうか。それがどうにも理解が出来ない。

「——俺の仕事、マーシャからなんて聞いてる」

「ブローカー……みたいな仕事だつて」

「——そうか。……取引内容は、聞いてるか」

彼の問いに、黙つて首を横に振る。

すると、彼が再び黙り込んだ。何かを深く考え込む様な表情を浮かべたまま、テーブルの一点を見つめている。

雨に濡れた彼の肌は、体温が下がっている所為かいつにも増して白く、強く目を惹かれた。艶やかな黒髪に赤い瞳だという事も相まって、まるで物語に出てくる吸血鬼、もしくは死神の様だ。こんな状況だと言うのに、そういった彼の姿について見惚れてしまう。

そんな私の思考を断ち切る様に、彼がまるで独り言の様に言葉を漏らした。

「——俺は、あまり良くない仕事をしてる」

今にも消えてしまいそうな、小さな声。

「——売り手と買い手の仲を取り持つのがブローカー。宝石であったり、洋服であったり、質の良い布であったり……取引される物は様々だ。……でも俺は、その中でも特殊な物の取引を担当してる」

「特殊……？」彼が深い溜息を吐き、そして深く息を吸い込んだ。瞳を伏せ、躊躇ためらいがちに口を開く。

「……子供の売買だ」

彼の言葉に、息を呑む。

——子供の取引。そして、貴族を相手にしている。

その情報で、とある事に気付いた。

私がまだ屋敷に居た頃。社交界で良く、慈善活動の一環として孤児を引き取り、養子として育てる家が多いと噂で聞く事があった。何処かの孤児院から引き取っているのかと思っていたが、ずっと、高慢な貴族が下層階級である孤児を自身の屋敷に招き入れ、そして美しい服を着せ何不自由の無い暮らしをさせる事に違和感を抱いていた。

彼等は階級を何よりも大切にされていて、孤児等ゴミの様に扱う事が殆どだ。そん

な彼らが、自ら引き取り養うだなんて、心の何処かで何か裏があるに違いないと思つていた。

——それに、彼が関わつていたのなら……？

「訳有つて子供が欲しい貴族。借金、配偶者パートナーからの暴力、望まない妊娠等から子供を手放したい親。双方からの依頼を集め、そしてその中で比較的条件の一致する依頼者同士を引き合わせる。それが、俺の仕事だ」

あまりにも、非現実的な話だ。しかし、その話に妙に納得がいった。

彼と出逢つたあの晩、彼が自身の仕事を「人助け」と言つていた。今の今迄、それはただの誤魔化し文句だと思つていたが、話を聞いている限りでは人助けでも強あながち間違ひでは無い様に思える。

「——どうしてセドリックは……子供の売買の仲を取り持つ仕事を選んだの……？ 先程貴方が言つた様に、宝石や服、布でも問題無かつた筈だわ」

「特に、理由なんて無い。ただ、貴族が絡む仕事は割が良いんだ。本当に、それだけだよ」

それは、此処で暮らして何度も思つた事。

街の人達と比べて、私達は遥かに良い暮らしをしている。子供が二人も居れば生

活が苦しくなることが普通だが、この約十四年間生活に困った事は一度だって無かった。

「——貴方の仕事は、分かったわ。でも……どうして揉め事を起こしたからといって、二人がスタインフェルド家に居るのか……それが分からない、理解出来ないの。どうして……？」 誘拐でもされたって言うの……？」

「——……」

彼が再び、口を閉ざす。

そんな彼に、深い愁然しゅうぜんの様な、痛憤つうふんの様なものが沸き上がるのを感じた。

「どうして何も言わないの？ この期ごに及んで、まだ隠し事をするの？」

「違う。隠し事じゃ、無い。ただ、俺も分からないんだ。なんで二人が誘拐されたのか。そもそも、本当に誘拐をされているのかも……」

「そんな——……」 胸の中が、絶望で満ちる。

一体どうすれば、この状況を立て直せるのか。どうすれば、二人を連れ戻せるのか。どれだけ考えても、思考が絡まり何も出てこない。

——そういえば、今日街でとある噂を聞いた。

二人が居なくなり、そしてセドリックから仕事の話聞いた事で頭の中から消え

てしまっていたが、その噂はスタインフェルド家が関わる重要な事だ。もし本当に二人がスタインフェルド家に居るのなら、その噂も大きく関わっている事になる。

「——今日、スタインフェルド家の長男が……死んだって……噂を……」
俯いた彼の肩が、びくりと僅かに揺れる。

「ねえ、その……揉め事って一体何……？ スタインフェルド家の養女が刺した、その養女は行方不明になつてる、と聞いたけれど……もしかしてその養女って、貴方が仲を取り持った子なの……？」

そこまで告げると、彼が「そう言う事か」と一言呟いた。

彼のその言葉の意味も分からず、表情も此処からでは見えない。しかし、すぐさま否定をしない所を見る限り、私の憶測は間違っていない様だった。

胸が挟られる痛みと共に、酷い眩暈と動悸に襲われる。

もし、二人が殺されるなんて事があつたら。そう考えるだけで、言い難い感情に駆られ吐き気が込み上げた。

吐く息が震える。喉が詰まる様な窒息感を覚え、服の胸元を掴んだ。

「十五年以上も前の話になるが、とある女から依頼を受けた。そしてその依頼に食いついたのが、スタインフェルドだった。しかし、どうやらその養女には精神異常

の類たぐいがあつたらしい。スタインフェルドが職場に押し掛けてきて、物凄い剣幕で『責任を取れ』と言つてきたが……、そうか、あの男を、刺したのか」

乱暴にネクタイを緩め、彼が自嘲を漏らした。

「そうか、そう……そう言う事か……。だから、責任……か」彼が深く、溜息を吐く。

「ね、ねえ……二人が殺されるなんて事、無いわよね……？」

「……………」

「ねえ……セドリツク……？」

「……………」

「セドリツク……！」

バン、と強くテーブルを叩き、椅子から勢いよく立ち上がった。その拍子に椅子が倒れ、部屋に騒音が響き渡る。

「二人を……連れ戻しに行きましょう……？」彼は俯いたまま、何も答えない。「二人の身に……何かある前に……ね……？」

そつとテーブルから離れ、向かいの彼に歩み寄つた。そして床に膝を付き、彼の顔を覗き込みながら縋る様にシャツを掴む。

しかし、ずっと黙っていた彼が蚊の鳴くような声で否定を示した。

「——それは、出来ない」

縫りつく私の手を握る彼の手は、氷の様に冷たい。そして僅かに、震えている様な気がした。

どうして？ そう問いたくとも、彼の顔を見つめる事で精一杯で、喉奥から声を出す事が出来ない。

「——相手は貴族だ。それに、息子と養女を失って、気が触れている奴でもある。二人を無理に取り返そうとすればする程、きつと二人を危険に晒す事になる」

「そんな……じゃあ、二人はもう戻ってこないの……？」

「——そうは……言っていない……」

彼がきつく、唇を噛み締める。私の問いに否定を示しているが、彼のその顔を見ていれば二人を取り戻す事が難しいと言う事は直ぐに分かった。

ぐるぐると、自身の中を渦巻く感情。セドリックがこの家に帰ってきてきてから、ずっと私の中を回っていたものだ。

それが、今もずっと回って消えない。

「——最低」

思わず、漏らした言葉。それを口にした事が引き金になったのか、ボロボロと止めど無く涙が溢れ頬を伝い落ちていく。

——最低、最低。最低だ。

こんなの、普通じゃない。絶対におかしい。親として、一人の人間として、間違っている。

——娘二人を失つても尚、セドリツクが此処に居てくれる事に安堵してしまっているなんて。

「……ごめん、ごめんなさい、……ごめん、なさい」彼の腕に縋り、嗚咽を漏らしながら繰り返す。

「——あ、貴方のお仕事が、良くない仕事だつて分かつてる。親として、妻として、貴方を責める事が普通なのかもしれない。でも、私は……貴方を責める事が出来ない」

「——エル……」

彼が掠れた声で、私の名を呼ぶ。だがその声を遮る様に、更に言葉を続けた。

「大切な娘が居なくなつたというのに……私、私まだ、貴方と居られる事を……嬉しく思うの……。自分でも、親失格だって、最低だって、分かつてる……、でも……」

…

彼は私を闇から救ってくれた、ただ一人の光。

狂った世界から引き上げてくれたのは、私に自由を与えてくれたのは、私に知らぬ感情を、愛を与えてくれたのは、他でも無いセドリツクだ。

彼は私にとって唯一の光であり、希望である。

「貴方が居ないと、駄目なの。生きて、いけない。だから」

涙で掠れた、酷く聞き苦しい声。それでも、無理矢理言葉を紡ぐ。

「——貴方だけは、傍に居て、何処にも行かないで、お願いよ」

彼が罪人でも構わない。あの時私は、確かにそう思った。そう思って、自分の意志で彼を選んだ。

娘が誘拐されてしまったのは、彼だけの責任じゃない。その罪は、私も背負わなくてはならない。

——でもどうか。

これから先の未来がどれだけの地獄であろうと、私から彼を奪わないで欲しい。もしいつかこの関係に終わりが来るのだとしても、一分、一秒でもその終わりを遠ざけたい。

それが、最低な自分のただ一つの願いだった。

LVI Beautiful girl

蛇口から流れる、冷たい水。

冬こそ苦痛を感じるものであるが、今の様に暑い季節は少々心地よく感じる水温だ。

そんな水で洗い流しているのは、二人分の食器。グラスも、皿も、器も、ナイフとフォークさえも二人分だ。娘二人が使っていた食器は、食器棚の奥で眠ったままもう一週間も使われていない。

——娘が居なくなつて、一週間。

この一週間で得られたのは、二人はセドリツクの言う通りスタインフェルド家に居るといふ事だけだった。二人があの家でどんな生活を送っているかは分からないが、今の所命に関わる事は起こっていないらしい。

二人が生きていてくれる、それだけが唯一の救いであるが、それでも娘がもう此処に戻ってこない事は確かだ。その傷はどれだけの時間が過ぎても、癒える事は無かった。

——それともう一つ。

街で、とある噂を耳にした。

街から外れた、薄暗い不気味な森。その中心部に佇む^{たなす}廃教会に、赤毛のシスターが住んでいるらしい。そのシスターを見た者は、未来を知る事が出来るのだとか。最早、伝説じみた噂だ。

森奥の廃教会とは、セドリックからプロポーズを受けたあの場所の事だろう。当時はあの教会には悪い噂が立っていた様だが、この数年間でその噂は薄れ、新たな噂に塗り替わっている事を知った。

未来。そんなもの、本当に見られるのだろうか。

蛇口の水を止め、タオルで手を拭きエプロンの中に手を差し込む。そしてそっと音を立てずに取り出したのは、一週間前玄関扉に張り付いていたあの黒い手紙だ。自身があの時強く握りつぶしてしまった為深い皺がついてしまっているが、メッセージカードに書かれた文字はしっかりと読むことが出来た。

「——貴女は貴女を信じればいい……。その選択を、咎める者は居ない」
メッセージカードに書かれた文字を、読み上げる様に呟く。
これが本当に、予言の類たぐいなら。街の噂も、もしかするとこの手紙に繋がる何かがあるのかもしれない。

「——ママ」

不意に、背後から娘の声が聞こえ振り返った。

『そんな所で何してるの？』

テーブルに着いてノートを広げる。娘二人の姿。それがまるで現実の様に鮮明に浮かび上がり、そして滲んでいく様に消えた。

そこに、娘が居るのは当たり前だった。それが、日常だった。

なのに今は、娘は居ない。此処には、居ない。瞳に浮かんだ涙が一筋、頬を伝う。

手紙をポケットに仕舞い、そっとテーブルの方へ歩み寄る。

娘がいつも、勉強していた場所。家族四人で、食事をしていた場所。いつも、娘は此処に居た。

テーブルをそつとなぞり、二人の名前を零す。

当然、返事は無い。しんと静まり返った部屋に響くのは、冷たい秒針の音のみだ。

噂のあった、あの廃教会。そこに、本当に赤毛のシスターが居るのだろうか。本当に彼女と会えば、未来が見えるのだろうか。

——未来を知るのが怖い。でも、確かめたい。

二つの思いが交じり合い、葛藤する。

——一度だけでいい。もう一度、二人に会いたい。

——仮にそれが幻でも、もう一度二人を抱きしめたい。

その叶わぬ願いは、いつまでも心に残ったまま。

*

——深夜二時。

セドリックが眠ったのを確認し、私はこっそりと家を出た。

幾ら夏でも、夜は気温が下がり肌寒い。しかし暖を取る為のストールを羽織る気にはなれず、薄着のままあの森の方面へと歩を進めた。

この時間に、外を歩いている人間は居ない。

路上生活者も身体にあるだけの布を巻き付け、道の隅や路地裏で身体を丸くして眠っている。そんな光景を眺めながら、ただ歩き続けた。

ポケットの中には、あの黒い手紙。頭の中で繰り返すのは、その手紙の差出人である「メイベル・バルフォア」の名前。

噂では赤毛のシスターと言われていたが、私はその噂に関わっているのはあの白髪の女性ではないかと臆見していた。彼女がその廃教会で、暮らしているのではないかと。

もしくは、あの女性と同じ様な人間が複数存在するのかもしれない。ずっと思っていた事だが、マーシヤの勘の鋭さも少々異様だ。まるで人の心が読めているのではないかと思ってしまう程である。

予言など、到底信じられない。しかし、この手紙を貰っている以上信じないと言いつける事は出来ない。それにマーシヤの事もあり、心の何処かでその様な何かを持っている人間が存在するのではないかという考えが拭えずにいた。

歩き続ける事数分。辿り着いたのは、真っ暗で不気味な森の入り口。

昼間とはまた違った恐怖がある森は、とてもじゃないが一人で足を踏み入れようとは思わない。しかし、今の私にはこんな森など怖くは無かった。

仮に悪霊に憑り付かれようと、魔物に魂を取られようと、何も怖い事は無い。今の私が何よりも恐怖を感じている事は、セドリツクが娘の様に私の元からいなくなってしまう事だった。

躊躇い無く森に足を踏み入れ、手探りで木の幹に触れながら進んでいく。

地上に露出した樹木の根に足を取られながらも、森の奥を只管に目指す。

こんな森に、足を踏み入れる人物など居るのだろうか。薄気味悪さを除いても、足場が悪く思う様に前に進めない。

やはり、噂話はただの噂話なのだろうか。もしかすると、子供の作り話が噂となつて広まつってしまったのかもしれない。

此処まで来て、そんな事が脳内を過る。

しかし私のその思考は、目の前に突如現れた灰色の煉瓦の壁に遮られた。

壁に伝う無数の蔦も、その壁も、もう十年以上が経つというのに何も変わらない。だが、近づいた先の教会の扉を見て、ふと違和感を抱いた。

——この教会の扉は、こんなにも綺麗だっただろうか。

扉に埋め込まれたステンドグラスは月明かりが反射してキラキラと光っている。罅ひびや欠けも無く、埃が被かっている様子も無い。

その違和感が濃くなつていくのを感じながら、一度当たりを見渡した後そつと扉を押し開いた。

錆を感じさせない、クリアな開閉音。内陣のステンドグラスとその前に聳え立つ十字架に目を惹かれながらも、足音を立てずに身廊を歩き進んでいく。

昔はあつた筈の、椅子に張つた蜘蛛の巣、ガラスの破片、汚い足跡。全てが綺麗に無くなつている。薄暗くて隅々までは見る事が出来ないが、この教会に人の手が入つた事は一目で分かつた。

——まさか、あの噂は本当なのだろうか。本当に、此処にシスターが住んでいるのだろうか。

ぼんやりとステンドグラスを眺めながら十字架の前に佇んでいると、ふと背後から扉が開く音が聞こえた。

「——誰？」

やや冷たい、棘のある声音。しかしその声は幼く、何処か怯えが滲しみんでいる様に感じられた。

パッと振り返り、声の主に視線を向ける。

「……………」

そこに立っていたのは、全体的に色素が薄く透明感のある、まるで天使の様に美しい少女だった。歳は、ルイとレイより少し上だろうか。背は娘より高く、私と同じ位だ。

ステンドグラスの光が反射し、青く染まった髪と白い肌に目を奪われながらも、「ごめんなさい、勝手に入ってしまった」と返答する。

「——こんな時間にお祈り？」彼女の問いに、首を横に振った。

「赤毛のシスターに、会いに来たの。此処に、シスターはいるかしら」

私がそう問うと、彼女がきつく口を噤んだ。私を警戒している様な瞳は、僅かに揺らいでいる。

「——イヴは居ない。帰って」

「イヴ……？ やはり、この教会にはシスターが居るのね……」

その名前に何処か聞き覚えを感じながらも、ぼつりと呟く。すると、彼女が困惑した様な表情を浮かべた。しかしそんな表情も束の間、直ぐに私をきつく睨みつけ「帰って」ともう一度告げる。

「——イヴに会っても未来は見えない。あんなの、ただの噂話」

「そう……」

「未来を見たがる人が来ること、イヴはあまり良く思っていない様だった。此処は神聖な場所だよ。神様が居る場所なの。好奇心で来ていい場所じゃない」

その声はやや震えているが、それでも芯のある声をしている。彼女の口振りからするに、あの噂を頼りに此処まで来た人は少なくない様だ。

「——ごめんなさい」

彼女に一言謝り、身廊を再び歩き出した。そして彼女の目の前で立ち止まり、「もう、此処には来ないわ」と告げる。

そんな私を見て、彼女が僅かに眉を顰ひそめた。

「貴女、他の人とは違う」

「他の……？」

「他の人は、しつこくイヴに会わせろって言ってきた。掴みかかられた事もある」

「そう……大変だったのね」

私の言葉に、彼女が切なげな表情を浮かべた。そして小さく頷き、その場に俯く。

「イヴは、見世物じゃない。執拗しつとつに関わって、イヴを傷つけて欲しくないの」

「見世物……だなんて……」

「貴女はイヴを見世物だと思つてなくても、思つてる人は居る」

彼女の言葉に、何も言えなかつた。噂話とは、全てが良いものではない。誰かが傷付くものだつてある。

私はそんな事も分らずに、その噂を頼りに此処まで来てしまった。自身の行動に、僅かに罪悪感を抱く。

しかし、罪悪感を抱きながらも、目の前で悲しげに俯く彼女が何処か娘に重なつた。怒られて気落ちする娘によく似ていて、思わずその頭に手をのせる。

「！」

びくりと小さな肩が揺れ、上目遣いに彼女が私に目を遣つた。

一瞬払いのけられるかとも思つたが、彼女は動くこと無く私の手を受け入れていく。そんな彼女を見ると、娘が帰つてきた様な錯覚を起こし胸が強く締め付けられた。

涙が溢れ、頬を伝い落ちていく。

「——どうしたの？ 何か、あつたの？」

私の涙に気付いた彼女が、躊躇ためらいがちに口を開いた。その問いに、撫でていた手

が止まる。

娘と然程歳の変わらない様な少女に、打ち明けてよい話だろうか。娘が貴族に誘拐されただなんて、彼女の負担になるだけでは無いだろうか。

そう思いながらも、頭に浮かんだ言葉をぼつりと零した。

「——娘と、離ればなれになってしまったの」

私の言葉に、彼女の瞳が動揺した様に揺れる。

やはり、彼女の様な若い少女に話すべきではなかった。僅かな後悔が浮かび、彼女の頭から手を退けた。

「そう、なんだ。私も、小さい頃ママと離れ離れになった」

彼女が寂しげにふふ、と小さく笑う。

雲の切れ目から月が顔を出したのか、ステンドグラスの光が少々強くなる。それと同時に彼女が顔を動かし、光が与えられた髪が揺れ動きキラキラと光った。

「ママの顔、もう覚えてないの。ただ、胸に花が咲いてたって事だけは覚えてる」

「胸に、花が？」

「うん。普通じゃないよね、分かってる。でも、胸に花が咲いてたの」

彼女が再び笑った。しかしその笑みはもう寂しげなものでは無く、何処か楽しそ

うな、嬉しそうな笑みだった。

「私、苦しみからやっと自由になれたの。だから、これからママを探そうと思ってる」

「そうなの、見つかるといいわね」

「貴女もね。きっと、娘さんといつかまた逢えるよ」

彼女と顔を見合わせて笑い合い、そして小さく息を吐いた。

私も彼女の様に、強く生きられたら。

きっと、今は娘の居ない生活を受け入れるしか無いのだろう。いつまでも、消えた娘を想って心を病んでいたって仕方が無い。

それでも、私は彼女の様に強くなれそうにはなかった。今も、娘二人の顔を思い浮かべるだけで涙が出る程に胸が苦しい。

「——私、もう行くわね」

彼女に声を掛け、再び出入口の方へ歩を進める。彼女と擦れ違った瞬間、何故か彼女から僅かに煙草のニオイがした。

しかしそのニオイもすぐに消え、気のせいだったのだと自身に言い聞かせ扉の方へ足を向ける。

「——待つて」背後の彼女に呼び止められ、足を止めた。
ゆつくりと振り返り、彼女と視線を交わらせる。

「貴女の、名前を教えて」

「名前？」

「そう。もうきつと二度と会う事は無いけど、貴女の事覚えておきたいから」

「ふふ、私の事なんて覚えなくていいわ」そういいつつ、彼女を娘と重ねてしまっているからかその頼みを無下にする事は出来なかった。

暫し悩んだ末に、自身の名を口にする。

「エル、よ」

私の名を聞いて、彼女が「エル」と繰り返した。

何やら考え込む様な顔をした彼女を疑問に思いつつ、「貴女の名前は？」と問う。
すると彼女は、その顔に複雑な表情を浮かべた後一言呟く様に名を告げた。

「——ノエル」

私も彼女と同じ様に、その名を繰り返す様に呟く。

何処かで聞いた事のある様な名前だ。しかし、どれだけ考えてみても何処でその名を聞いたか思い出せない。

「ノエル、良い名前ね」 思い出せないものを、考えたって仕方が無い。彼女にそう笑いかけ、教会の扉を押し開いた。

LVII branch point

微雨びうの降る昼過ぎ。

時計の秒針が響く部屋で、長らく使っていないかった客人用のティーカップに甘い香りの立つ紅茶を注ぐ。

「悪いね、突然押し掛けて」

テーブルに着き、紅茶の支度をする私を見つめる彼女——ライリーが、ぽつりと呟く様に静かに告げた。今日は私とセドリックに用事があり、家を訪ねてきたらしい。

しかし、生憎セドリックは不在だ。丁度彼女が来る十分程前に、街の方へと出かけて行った。

私も共に行くと言えたのだが、彼は「直ぐに戻ってくるから」と一言残し行ってしまった。行き先は聞いていない。

このまま、セドリックまでも居なくなってしまうのでは無いか。私を苛むのはそんな不安。一人になると、潰れてしまいそうな程の不安に襲われじっとしていらなくなってしまう。

しんと静まり返った部屋に息苦しさを感じ、眩暈を覚え始めた頃、ライリーがこの家を訪ねてきた。

「——いいの。セドリックが居なくて、心細かったから……。来てくれて嬉しいわ」
あのまま一人きりで居たら、余計な事ばかり考えて不安に耐えられなくなっていただろう。セドリックを探しに、一人彷徨う様に街へ出て行ってしまっていたかもしれない。

そう考えると、どんな理由があれば彼女が来てくれた事には安堵していた。

「そうかい。じゃああまり急ぐ必要は無さそうだね」

「ええ、ゆつくりしていつて」紅茶を注いだティーカップを彼女の前に出し、向かい合う様に自身も椅子に腰掛ける。

用意した紅茶は、彼女の分のみ。香りが良く、私が特別気に入っていた茶葉だが、

今は紅茶を口にする気分では無かった。

湯気の立つ紅茶を見つめながら、彼女が話し始めるのを黙って待つ。

深夜二時頃、こっそりと教会に行つていた為十分な睡眠がとれていない。その為、少しでも気を抜けば倒れてしまいそうだった。

今もこうして、彼女と向かい合う様にテーブルに着いているだけで、ふわふわと揺れる様な眩暈に襲われている。まるで船酔いでもしているかの様な不調だ。酷く気分が悪い。

「——ルイちゃんとレイちゃんが居なくなつて、もう一週間が経つだろう」

彼女が言葉を選びながら、ゆっくりと話し始めた。

「勿論私は、二人はいつか帰つてくるつて信じてるよ。だけど、エルちゃんもセドリックも、この家に居るのがつらいんじゃないかと思つてね」

揺らしたティーカップの水面を見つめながら、彼女が何処か言いづらそうに告げる。

事実、この家には娘達との思い出が多く詰まっている。簡単に手放す事が出来ないのと同時に、このまま此処に住み続ける事に苦痛を感じていた。

「——前に、セシリアの話をしたのを覚えてるかい？」

「確か、隣町の教会の……」

「ああそうだ。孤児院と並立してる、という話はしたと思うんだが、どうやら孤児院の方で人手が足りてない様なんだ」

「孤児、院……」

親の居ない、子供達。孤児院は、そんな子供達を保護した場所。

子供達は、一体どんな苦勞の中で生きてきたのだろうか。そんな事を考えると、胸が抉られる様に痛んだ。

娘二人は貴族の屋敷に居る事が分かっているが、もしそんな孤児達と同じ様な苦しい生活を送っていたとしたら。私が元居た屋敷での暮らしと同じ様な生活を強いられていたとしたら。そう考えると頭がどうにかなくなってしまいそうだった。

「それで、提案なんだが……。今のエルちゃんにこんな事を頼むのは酷だとは分かっているが、エルちゃん、その孤児院でシスターとしてセシリアの手伝いをしてやってくれないかな。給料は出ないが、住む場所も、食事もある。十分に生活は出来る筈だ。勿論、セドリックも一緒に」

「……」突然の話しに、言葉が出ない。

確かに、ずっとこのままという訳には行かない。しかし、娘を失った私が孤児の

世話をするだなんて、あまりに非現実的な話ではないだろうか。

「詳しくは、此処に書いてある」

黙り込んだ私を見て、ライリーが一通の手紙をテーブルに置いた。その手紙には私とセドリック二人の名が書かれている。

ライリーの顔を一瞥し、その手紙に手を伸ばした。

手紙には、切手も貼られていなければ消印も無い。しかし、裏返してみればそこには“Cecilia Umbridge”《セシリア・アンブリッジ》“の名が書かれていて、赤い封蝋で口が閉じられていた。

ライリーが彼女——セシリアから直接預かったものだろうか。しかし、昔ライリーはセシリアに会いに行く事が中々出来ないと言っていた筈だ。暫くその手紙を見つめたまま考え込んでいると、私の疑問に気付いたのか彼女が「私宛に届いた手紙にそれが入っていたんだ」と一言告げた。

「とりあえず、セドリックにも話してみてくれよ。返事は急いでないから」

「——ええ、分かったわ」紅茶を飲み干した彼女が、席を立った。

「話も済んだし、私はここで失礼するよ」

「あら、もう行ってしまおうの？」

「ああ、話も済んだし、あまり長居をするつもりはなかったからね。紅茶、美味しかったよ。ありがとう」

「——いえ……、またいつでも来て……」

彼女も、笑顔の無い私を見ているのがつらいのだろう。私を見る彼女が、寂しげな表情を浮かべている事には気付いていた。

それに、ライリーも娘二人をとっても可愛がってくれていた。幼少期には毎日の様にこの家にも遊びに来てくれたものだ。そんな彼女にとっても、娘の居ないこの家は居心地が悪いのかもしれない。

椅子から腰を上げ、玄関へ向かっていく彼女を追い掛ける。

「返事は、なるべく早く出すわ」

「さつきも言っただろう。返事は急がなくて良いって」

「でも、こういうのは早い方がいいわ」

振り返り私の顔を見た彼女が、何か言いたげな表情を浮かべる。しかし、何も言うことなく曖昧な反応を示した。

「じゃあ、私はこれで」

どこか素っ気無く告げたライリーが、一度も振り返ること無く街へと去っていく。

そんな彼女の背を見ながら、先程の話を頭に浮かべた。

——この家を去り、孤児院でシスターとなる。

それがどういう事かは、理解はしているつもりだ。

娘の帰りを待つ、それは私の唯一の心の拠り所だった。二人が戻ってこないことは分かっていたが、それでも心のどこかでいつか帰ってきてくれるのでは無いかと思っていた。

それが、もう無くなる。それこそ本当の別れだ。

セドリックは、娘が居なくなつてから仕事に行っていない。特別辞めたという話は聞いていないが、きつともうブローカー業を続けるつもりはないのだろう。

非合法的な仕事ではあつたものの、幸いにも割の良い仕事だった為に貯蓄がある。贅沢な暮らしを求めなければ、このまま仕事をしなくとも暫くは生活が出来るだろう。

非常に悩ましい選択だ。

此処でずつと娘の帰りを待つか、心機一転と考え隣町へ越すか。

ライリーの背がもう見えなくなっている事に気付き、玄関扉を閉め溜息を吐く。そしてふらりと玄関から離れ、テーブルに着いた。

目の前には、先程ライリーが置いて行ったセシリアからの手紙。それをぼんやりと眺めながら、手紙の答えを思案する。

娘との大事な思い出を捨てる事も、心の拠り所を手放す事も出来ない。しかし、ずっとこのままで良い訳が無い。

此処に居れば、私はいつまでも心を病んだまま娘の事ばかり考え、そして今迄以上にセドリックに依存した生活を送る事になるだろう。それは、セドリックの為になるのだろうか。ならない筈だ。

私が妊娠したあたりを境に、彼はあれ程好んでいた煙草をやめた。人伝ひとづてに聞いた話ではあるが、煙草をやめる事には相当苦労したらしい。

しかし、娘が居なくなつてから煙草を吸うセドリックの姿をよく見かける様になった。私の前では吸わないと心掛けていた様だが、彼のスーツからは常に煙草のにおいがしていた。

彼は決して、私に娘の話はしない。私が娘を失くした事に、酷く傷心している事を知っているからだ。そして私は今迄それにずっと甘え、この一週間過度に彼に依存した生活を送っていた。

だが、苦しく、つらいのは彼も同じであろう。

ライリーが私から逃げる様にこの家を去った様に、セドリックもきつと心を病んでいる私を見ているのはつらい筈だ。

この家から離れ、隣町に越し、そして孤児院のシスターとして働いた方が良いのではないか。

今の私が子供と触れ合うのは少々苦しいものがある。しかし、それでもこうしてしんと静まり返った家で来る筈の無い、"娘が帰ってくる未来"を待ち続けている方がきつととても苦しい。

そんな事を悶々と考えていると、家の外から靴音が聞こえた。

顔を上げ、玄関扉の方へ視線を向ける。それと同時に、カチリと心地よい音が響き扉が開いた。

「——おかえりなさい、何処へ行っていたの？」

顔を見せたのは最愛の夫。勢いよく椅子から立ち上がり、彼の方へと駆け寄る。そんな私を見た彼が私を優しく腕の中に迎え入れ、耳元で優しく「ただいま」と囁いた。

彼の心音を感じながら、彼が無事帰ってきてくれた事に深く安堵する。

「——ん？」

私から身体を離れた彼が、小さく声を上げた。彼の視線の先には、先程ライリーが置いていった手紙。

脱いだジャケットを彼から受け取り、その手紙を手取る彼をぼんやりと眺める。彼はその手紙を見て、何を思うだろうか。なんというだろうか。

優しい彼の事だ。きっと、私がどうしたいかを一番に考えてくれるだろう。

そう思っていると、手紙を裏返し差出人を見た彼が「アンブリッジ……？」と小さくその名を零した。

「その人、知っているの？」

「——いや……」私の問いに、彼が曖昧に言い淀む。「手紙、見ても良いか」

「ええ、勿論。貴方宛の手紙でもあるから」

彼の問いにそう返すと、彼がやや躊躇いながらも赤い封蝋を剥がした。

そして封筒の中から二つ折りの手紙を取り出し、文面に目を走らせる。

時間になると、二、三分位だろうか。何度か手紙を読み返した彼が、「ううん」と小さく唸りを上げた。

顔を上げた彼と、顔を見合わせる。

彼の手元を覗き込み私も共に手紙に目を通したが、書かれていた事は決して特別

な事では無かった。

先程ライリーから聞いた事と同じだ。保護した孤児が多く、管理者の人数が足りていないらしい。

彼が視線に迷いを滲ませ、私を見つめる。

「——私は、行っても良いと思っっているの」彼のジャケットを胸に抱き、彼に身を寄せほつりと呟いた。「ずっとこのままという訳にも、いかないから……」

事前に考えていた事なのに、いざ口にするに猛烈な不安に襲われる。

本当に此処から離れても良いのだろうか。娘達が他でもない此処に帰ってくる事は、無いのだろうか。娘達の帰る場所を奪う事にならないだろうか。

しかし、まるでそれ等の不安を軽くするように彼が優しい声音で私の言葉を肯定した。

「——そうだな」彼が私の背をぽんと叩き、そつと手紙を封筒の中に戻す。「返事は俺が出しておくよ」

言つて、今度はくしやりと私の髪を撫でた。

昔の彼を連想させる撫で方。私は昔から、こうして髪を乱される様に撫でられるのが好きだった。

胸の奥がむずむずとする様な感覚に、彼のジャケットを強く抱きしめる。すると、ジャケットの中からかきりと小さな音がした。

ジャケットを抱え直し、音のした狭い胸ポケットに指を差し込む。そのまま中を探ると、硬い紙のような物が指先に当たった。

それを指先で摘まみ、ポケットから引き出す。

「……なあに、これ」

出てきたのは、四つ折りの小さな紙。一見ただの紙切れの様だが、紙切れにしてはやけに丁寧に折りたたまれている。

「——あ」

その紙を見るなり声を上げたセドリックが、私の手を強く掴んだ。そして私の指の間から紙を抜き取り、そつとその紙を開く。

「……?」

何やら険しい顔をして紙を見つめる彼に疑問が沸き上がり、私もその紙を覗き込もうと背伸びをした。しかし、何か文字が書かれている事は分かったが身長差の所為で何が書かれているか迄は見えない。

仕方なく諦め、紙を見つめる彼に視線を送った。

「——アイリーン・スチュアート……」

彼がぼつりと、呟いた名前。

その名前に、古い記憶が呼び起こされる。

「それって……！！ メアリーの！」

思わず声を上げ、彼の手を乱暴に掴み紙を覗き込んだ。

The name of the woman who keeps regretting is Aileen Stuart

《後悔し続ける女性の名は、アイリーン・スチュアート》

She is the only hope

《彼女こそが一筋の希望》

見覚えのある字、言い回し、そして書かれた名前。

もしや彼も、あの女性から予言を受けていたのだろうか。しかし、私が受けた予

言と形態が大きく異なる。

私は黒い封筒に黒いメッセージカードで予言を受けた。だが彼は、小さな紙に文字を詰め込んで書いただけの物だ。差出人はあの女性では無く、別人だろうか。

しかし今は、それよりも書かれている名前——アイリーン・スチュアートの方が重要だ。

メアリーとお茶会をした時、彼女からその名前を聞いた筈だ。

確か、彼女は——

*

「ねえメアリー、メアリーの旧姓ってなんだったの？」

出張で父が居らず、そして母が書齋ライブラリーに籠りきりになってしまったとある月曜日。その日は両親が居ない穏やかな日であり、昼間から居間パントリーでメアリーとお茶会に興じていた。

「スチュアートですよ。メアリー・スチュアート。何故突然そんな事を？」

「ごめんなさい、少し気になってしまって。でも、素敵な名前ね」

「私の旧姓など、気になる程のものでは御座いませんよ。ですが、私はバレンタインの姓よりスチュアートの姓を大切にしておりますので、そう言っていただけで少し嬉しいです」

ふふ、と照れた様に笑うメアリーが、音を立てずカップに紅茶を注ぐ。

「ちなみに、いつまでその名を名乗っていたの？ 此処へ来た時にはもう、バレンタインの姓だったわよね？」

「十四の頃迄です。此処へは十六の時に来ているので、そうですね、私はメアリー・バレンタインとしてこのお屋敷で雇って頂いております」

「バレンタインの姓の方が馴染み深いけど、メアリー・スチュアートも素敵ね。可愛らしくて、私はそっちの方が好きよ」

「うふふ、ありがとうございます」

私と向かい合う様にテーブルに着いた彼女が、赤い頬を隠す様にティーカップに口を付けた。

「お母様は今、何処に？」

「母、ですか？ えっと、何処かのお屋敷でレディーズメイドをしていたと記憶しております」

「あら、メアリーと同じね。何処のお屋敷か覚えていないの？」

「私はまだ見習いですが……。過去の手紙を遡さかのぼれば分かると思います。ですが、知ったとしてももう会う事は無いと思いますので……」

「そんな！ メアリーだってお母様に会いたいでしょ？」

「それは……。会えるなら会いたいです……。でも過去の手紙はとても量があるので遡さかのぼるのも難しく……。それに私はまだ見習いですので覚えねばならぬ事も沢山あります。母の勤め先を調べる時間は、私にはありません」

彼女は気にしていないとでも言う様に、私に優しく微笑んで見せた。

しかし、その瞳の奥に寂しさが隠されている様に見えて、私は黙っている事が出来なかつた。

「お母様の、名前を覚えて頂戴。私が貴女のお母様を探すわ」

「そ、そんな……。いけません！」

「いいのよ、私は社交パーティーに参加する機会があるから、その時に探ってみるわ」

「……………」

メアリーがそっと、自身の唇をなぞる。それは、彼女が何かを決めかねている時

の癖だ。

彼女はきつと、実母に会いたいのだろう。しかし、お互い忙しい為会う事は叶わない。だがそれでも、勤め先を知っているのと知らないのでは大きく違う。

「私じゃ、頼りないかしら？」鎌をかける様な言い方をしてみれば、彼女が大きく肩を揺らし勢いよくカップをソーサーに置いた。

「とんでもございません！ そんな事は決して……！」

「じゃあ、お母様の名前を教えてくださいませんか？」

多少強引なやり方だったが、彼女の願いを叶えてやりたかった。それが、唯一私に出来る事だからだ。

諦めを滲ませた表情をした彼女が、ゆっくり口を開く。

「——アイリーン・スチュアート。それが、私の母の名前です」

*

「……この女を、知ってるのか？」セドリツクの問いに、ふと我に返る。

あの時、威勢よくメアリーの母を探すと云った方がいいが、結局探し出す事は出来

なかつた。社交パーティーで様々な人と関われば分かると思っていたが、使用人の名前を知りたがる私に不信感を抱いたのだらう。皆怪訝な視線を向けるだけで何も教えてはくれなかつた。

メアリーはそんな私に、「気にしなくていいんですよ」と言つて笑つて見せてくれたが、それでも何処か悲しそうな顔をしていた事を覚えている。

「——私が屋敷に居た頃に、とても仲の良い使用人が居たの。メアリーって名前の女の子でね。その、メアリーのお母様が、アイリーン・スチュアートという人で……」

「その母親は、今どこに？」

「そこまでは……分らないわ……。でも当時、メアリーと同じ様に、何処かの屋敷に勤めている」と言つていたのを覚えてる」

私の言葉に、彼がもう一度紙に視線を落とす。

彼は、何も教えてくれる様子はない。しかし、何処か焦った様子で口を開いた。

「エル、紙と封筒。それとペンを用意してくれ。急ぎで手紙を出したい」

LVIII Epilogue

ガタガタと車両を揺らしながら、私とセドリックを乗せた辻馬車が街の中を進んでいく。

窓から見える景色は、良く親しんだ街並みだ。今日で最後だと思つくと、感傷的になつてしまう。

噂好きの果物屋の主人とも、花の話でよく盛り上がつていた花屋の兄妹とも、長い付き合いだったライリーとも。私がこの街に戻つてこない限り、会う事はもう無いだろう。

それ等の寂しさに耐えられず、窓から顔を逸らし隣の彼に凭れ掛かった。

「——セドリック」

ぼつりと、彼の名を呼ぶ。

「——新しい場所へ行つても、私を愛していてくれる？」

何故彼に、こんな問いを投げ掛けたのかは自分でも分らない。娘が居なくなつて

から今まで、彼は心を病んだ私を献身的に支え続けてくれていた。今更彼の愛を疑うつもりも無ければ、愛を失うとも思っていない。

しかしきつと、新しい環境に少なからず不安を抱いているのだろう。私を愛しているのと、そんな言葉が欲しかったのかもしれない。

この歳にもなつて、子供じみてしていると自嘲を漏らす。

「——何言つてるんだ。当たり前だろ」

しかし彼は笑う事無く、私の手を強く握り優しく囁いた。

溶けていく緊張感と、僅かな安堵。その言葉を強く噛みしめながら、瞳を閉じる。

思い返すのは、街の人達の事。

娘が居なくなつた事を知っているのは、マーシャやライリーを含めた数人だけだ。その為、気分転換に街へ出れば私に娘の話振る人は少なくなかつた。

その都度、私は笑う事も出来ぬ中どうにか誤魔化して家に逃げ帰り、彼に縋って泣き続けた。

娘が居なくなつたことを、口にしたくなかつた。娘の話を、されたくなかつた。故に、あれ程お世話になつた街の人達に別れを告げず、黙って出て来てしまった。

今思えば、別れを告げずとも最後に一度だけ会っておけば良かったかもしれないと後悔が沸き上がる。

しかしきつと、会わない日が続けば皆自然と私の事等忘れていくのだろう。今も、窓の外に目を遣れば親しい仲だった店の店主が笑顔で客と会話をしていた。

そしてそんな中目に付いたのは、いつの日か私を水溜りに突き飛ばした、セドリツクに恋をしていた少女。「彼を返して欲しい」だなんて、筋違いな事を言ってきたのは今となれば懐かしい思い出だ。

その少女は大人になり、今や誰かの子を宿したのか大きなお腹を抱えていた。まるであの日の事など無かったかのように、幸せそうに笑っている。

——こうして、私は人々の記憶から消えていく。

そう思うと、寂しさのような、切なさの様な言い難い感情が胸の中に広がっていくのを感じた。

再び窓から視線を逸らし、凭れた彼の肩に寄り寄る様に額を擦りつけた。

鈍い音を立てて、馬車が止まる。

どうやら目的地へ到着した様だ。彼に手を引かれるまま、馬車を降りる。

目の前に聳え立つのは、美しく大きな、聖グロリアスガーディアン教会。森の奥で見たあの廃教会とは似ても似つかない、とても整った外見だ。

ステンドグラスが埋め込まれた美しい扉をゆっくりと開き、背後に彼の気配を感じながら礼拝堂に足を踏み入れる。

「——アンドールさん、おはようございます。来てくれて嬉しいわ」

祭壇の元に立っていたシスターが、私達に気付き顔を綻ばせた。彼女こそが、ライリーの友人であるシスター・セシリアだ。

セドリックと共に祭壇の元へ歩み寄り、優しい笑顔を浮かべる彼女と顔を合わせた。

「改めて、私が此処のシスター、セシリア・アンブリッジです」

「——よろしく、お願いします」

優しく笑う彼女——セシリアに深々と頭を下げる。

「ライリーから、話は聞いていますよ。辛い思いをしたのに、此方の頼みを受けてくださってありがとうございます」

「——いえ、此方こそ……、ご迷惑をお掛けすると思いますが……」

「そんな硬い事仰らないで。大丈夫よ。実際、心に傷を抱えた子達は少なくないけ

れど、それでも皆根は良い子達なの。だからきつと、直ぐに馴染めますわ」

セシリアが優しく、私の肩に手を置いた。

シスターというだけあり、彼女はとても優しい人だ。話しているだけで心が洗われる様な気さえしてくる。

新しい環境に不安はあるが、彼女が居れば大丈夫。今はそう思う事が出来た。

挨拶を済ませ、改めて礼拝堂を見渡す。椅子も均等に並べられ、祭壇には埃一つ見当たらない。澄んだ空気が肺を満たして、呼吸を繰り返すだけで気持ち晴れていく様な気がした。

自身が歩いてきた身廊をなぞる様に眺めて、再びセシリアに視線を戻す。すると彼が柔らかな微笑みを見せてくれた。そんな彼女にぎこちなくも笑顔返すと、突如背後から礼拝堂の扉を開く音が聞こえた。

礼拝者だろうか。そんな事を思いながら、音に釣られる様に振り返る。

「――！」

開いた扉の前に立っていたのは、杖を突いた老人。皺の多い顔に、宝石の様な瞳が印象的な男性だ。

その顔には、覚えがあった。

「——バートンさん！ おはようございます」

セシリアが顔を綻ばせ、その男性の元へ駆けていった。それに釣られ、まるで吸い寄せられる様にその男性に一步、また一步と近づいていく。

どうして、彼が此処に居るのか。私を見つめるその瞳は、まるで私達が今日此処に来ることを知っていたかのようだ。

聞きたい事は山程ある。しかし、何から問えばいいのかが分からない。

「——モーリス、どうして……」

辛うじて絞り出した言葉は、やけに震えていた。

「お久しぶりです、エルお嬢様」

その言葉は、いつかメアリーと再会した時に彼女が告げた言葉と同じ。

彼が何か言葉を続けようと口を開くが、何やら考え込む表情を浮かべ口を閉ざした。そして優しい笑顔を浮かべ、再び口を開く。

「もう、エルお嬢様とお呼びするのは失礼ですね。ミセス・エル・アンドール」

彼の声が優しく耳に届く。

鼻腔を擽る薔薇の香りも、優しい声も、当時のままだ。ただ変わった事と言えば、皺が少し増えた位だろう。

涙が浮かび、視界が滲む。

「——貴方と、また、会えるなんて……思っていないかった……」
 「言ったでしょう、あの晩。エル・バートンと名乗れば貴女様を見つけやすくなる
 と」

涙が頬を伝い落ちる中、彼がゆっくりと杖を突き私と距離を詰めた。

「そんな顔をしないでください。私は貴女様と再会出来て嬉しく思っているのです
 よ」彼がちらりと、私の背後のセドリックに目を遣る。「素敵な殿方を見つけ、幸せ
 になられたようで。安心しました」

「——え、ええ……そうなの……。結婚して……子供、も……」

思わず零してしまった子供の存在。

モーリスは、娘二人が誘拐されてしまった事を知らない。それに、出来る事なら
 彼に子供を失った事は言いたくなかった。

「わ、私が、居なくなった後の屋敷は？ どう、なったの？」

誤魔化す様に口にしたのは、あの日メアリーにしたものと同じ問い。

彼女は、私の問いに答える事は無かった。きっと、目の前の彼もそうだ。私の問
 いに答えない。

「その問いに答えるには、些いささか難しいものがありますね。時が来たら、全てをお話しましょう」

「——そんな……」彼が、優しく笑う。

そしてそつと私に手を伸ばし、頬を伝う涙を拭った。

「大丈夫。此処にはシスター・セシリアや、優しい子供達が居ます。きつと直ぐに、孤児院にも慣れるでしょう。自分を信じていれば良いのです。貴女様を咎める人は此処には居ませんよ」

彼が告げたのは、あの「黒い手紙」に書かれていた事と同じ事だ。

私を見つめる優しい瞳とその声に、まさかあの手紙の差出人は彼だったのではな
いかなんて非現実的な事が浮かんでしまう。

そして、彼の瞳を見ていとある事に気付いた。

その問いに、彼は答えてはくれない。きつと答えを誤魔化して笑うのだろう。
しかしそれでも、その問いを口にしない選択肢は自分の中に無かった。

「——じゃあ、貴方のお話を、聞かせて貰える？」

これは、ただの私意しじかもしれない。

それでも私の思考に間違いは無い様な気がしていた。

呆れた様でいて、何処か嬉しそうな彼の表情。

そして優しく細められた、宝石の様に美しいイエローブラウンの瞳。

「きっと私は知らない事が多くあるのでしょうか？」

彼は私を、目を逸らす事無くしっかりと見据える。

「——ねえ、お父様」

DachuRa Ist story-ivy- end

「1巻〜3巻共通参考文献」

- ・ 図説 英国貴族の令嬢 村上リコ (河出書房新社)
- ・ ヴィクトリア朝英国人の日常生活 貴族から労働者階級まで
ルース・グッドマン著 小林由果訳 (原書房)
- ・ 図説 英国のインテリア史 トレヴァー・ヨーク著 村上リコ訳 (マール社)
- ・ 図説 英国貴族の城館 カントリーハウスのすべて 田中亮三 (河出書房新社)
- ・ 図説 英国メイドの日常 村上リコ (河出書房新社)
- ・ ヴィクトリア時代の室内装飾 女性たちのユートピア (L I X I L 出版)

本書は、2021年6月13日発行の「Dachura 1st story-ivy-」に修正を加え、再編集したものです。

[DachuRa 1st story-ivy- III]

2023年8月11日 第1刷発行

著者：白城 由紀菜

カバー：白雪

印刷所：株式会社ブックフロント

ご意見・ご感想お待ちしております。

●宛先

https://odaibako.net/u/w_yuki_1601

